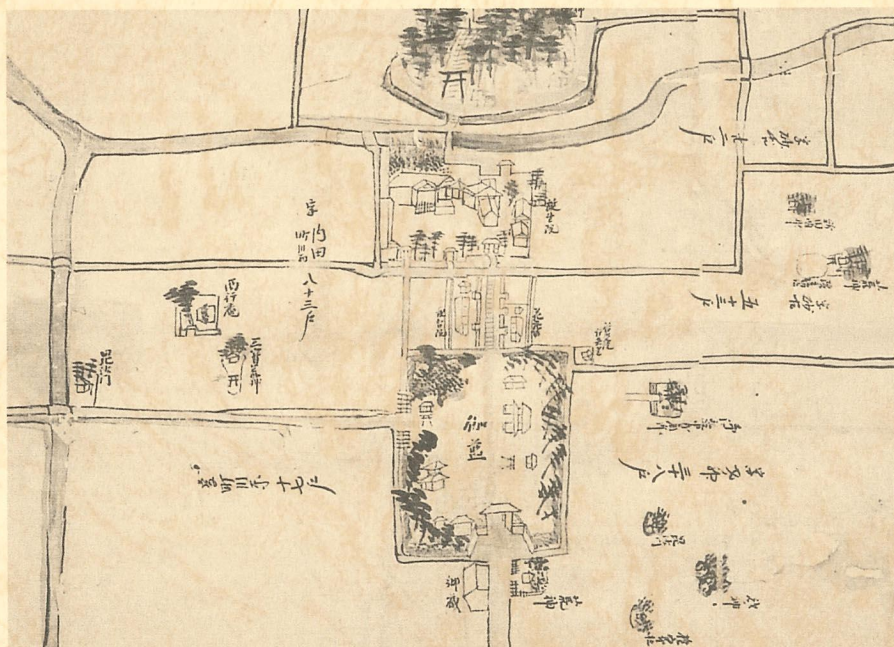


善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書10

善通寺旧境内
善通寺陣所跡
四国学院大学構内遺跡
菊塚古墳
樽池西手山頂墳3号



平成17 (2005) 年3月

善通寺市教育委員会

善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書10

善通寺旧境内
善通寺陣所跡
四国学院大学構内遺跡
菊塚古墳
樽池西手山頂墳3号

平成17（2005）年3月

善通寺市教育委員会



1. 第3・3'トレンチ墳丘裾検出状況(北東から)



2. 第3・3'トレンチ墳丘裾完掘状況(北東から)



1. 第3トレンチ全景(南東から)



2. 第4トレンチ全景(北東から)

例 言

1. 本書は善通寺市教育委員会が平成16年度国庫補助事業として実施した、埋蔵文化財調査事業（善通寺市内遺跡発掘調査事業）の発掘調査報告書である。
2. 本事業は善通寺市善通寺町3-5（善通寺旧境内・H16ZKK）において平成16年4月22・23日（1次調査）、平成16年8月5日から8月13日（2次調査）、同善通寺町3-3-1（善通寺陣所跡・H16ZZA）において、平成16年7月1日から7月16日まで、同文京町3丁目（四国学院大学構内遺跡・H16SGD）において、平成16年12月3日から12月10日まで、同善通寺町字大池東（菊塚古墳・H16KD）において、平成16年11月1日から11月30日まで、同善通寺町字伏見奥（樽池西手山頂墳3号H16TNS3）において、平成17年2月10日から3月10日まで発掘調査を実施し、調査中および調査終了後に各遺跡の調査資料と出土遺物の整理作業を実施した。現地調査・整理作業は、善通寺市教育委員会文化振興室 室長補佐 笹川龍一の指導・協力のもと、同主事 渡邊淳子が担当した。現地調査および整理作業に参加した調査補助員は下記に記す。
3. 本書の執筆は渡邊および、善通寺市役所 海邊博史、関西大学大学院生 長江真和、関西大学文学部考古学研究室 米田裕貴子・松村祐香・森田浩史、四国学院大学考古学研究部 田村隆明が行った。執筆分担は、付章第5節まとめを長江・海邊が、第1章・第2章第2節②・付章第3節耳環・同4節玉類を海邊が、付章第1節土師器【高坏】を長江が、同第1節土師器【埴・コップ型土製品】を田村が、付章第2節須恵器【壺】を森田が、同【甗】を米田が、同【横瓶】を松村が、その他を渡邊が行った。また、丸亀市文化財審議委員 遠藤 亮氏より玉稿を賜り、付章2に掲載した。編集は渡邊が行った。
4. 各遺跡の実測は、渡邊および調査補助員が行った。写真撮影は渡邊が行った。また本書に掲載した挿図の実測・製図は、平成14年度出土遺物 須恵器を長江・米田・松村・森田が、土師器を田村が、遺物出土状況図および耳環、玉類を海邊が、その他は渡邊および調査補助員が行ったほか、片桐節子氏・加藤恵子氏のご協力を得た。遺物の接合検討、復元作業は平成14年度菊塚古墳出土遺物（土師器・須恵器）を、長江・西川英志・森田・伊藤 諭・森下真企・米田・松村・田村が、その他を渡邊・海邊・田村が行った。なお、遺物実測図中、土器の断面は黒塗りが須恵質、白抜きが土師質、網掛けが瓦・瓦質土器・陶磁器を表す。遺物の写真撮影は菊塚古墳平成14年度出土遺物【耳環・玉類】を海邊が、同【土師器・須恵器】を長江が、その他を渡邊が行った。
5. 菊塚古墳の調査および整理作業には、関西大学文学部考古学研究室（代表 米田文孝教授）の、樽池西手山頂墳3号の調査および整理作業には、奈良大学文学部文化財学科考古学研究室（代表 植野浩三講師）の全面的なご指導、ご援助を頂いた。香川県埋蔵文化財調査センター 片桐孝浩氏には、現地指導および報告書作成について多大なご指導を頂いた。また、事業実施および本書の編集にあたっては、次の方々・機関よりご教示、ご協力を得た。記して謝意を表

します。

香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・学校法人四国学院・四国学院大学考古学
研究部・総本山善通寺・高畑精麦株式会社・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・パ
リノ・サーヴェイ株式会社・東 信男・安藤文良・入江秀信・大久保徹也・遠藤 亮・大野宏和・
小野秀幸・門脇範子・加納弘之・川端 聡・蔵本晋司・小林謙一・佐藤竜馬・白川雄一・角南
聡一郎・高畑 尚・高畑 将・豊島直博・中里伸明・中山尚子・信里芳紀・乗松真也・萩原 哉・
藤好史朗・松田朝由・松下孝幸・松下真実・松本和彦・宮脇武一・森下英治・山田哲也・山元
敏裕・渡部明夫(順不同・敬称略)

調査補助員

(発掘および整理作業)：高田晃裕・奥山広規・山口遙介・具志堅有紀・福山博章(奈良大学文
学部文化財学科考古学研究室)・土井辰宣・田村隆明・田辺 茂・三好健斗・久次米孝浩・寺
島有紀・宮井文子(四国学院大学考古学研究部)・吉岡優孝・横山正幸・松木瑤子(四国学院大
学学生)

(整理作業)：細川晋太郎・長江真和(関西大学大学院生)・伊藤 諭・森下真企・米田裕貴子・
松村祐香・西川英志・森田浩史(関西大学文学部考古学研究室)・片桐節子・加藤恵子

発掘作業員

合田 貢・田中澤次

目 次

例 言

第1章 遺跡周辺の位置と環境	1
第2章 善通寺旧境内	6
第1節 調査の経緯と経過	6
調査日誌(抄)	8
第2節 調査の成果	8
①遺構	8
②遺物	10
第3節 まとめ	13
第3章 善通寺陣所跡	14
第1節 調査の経緯と経過	14
調査日誌(抄)	15
第2節 調査の成果	16
①基本層序	16
②遺構・遺物	16
第3節 まとめ	16
第4章 四国学院大学構内遺跡	18
第1節 調査の経緯と経過	18
調査日誌(抄)	19
第2節 調査の成果	20
①基本層序	20
②遺構・遺物	20
第3節 まとめ	20
第5章 菊塚古墳	22
第1節 調査の経緯と経過	22
第2節 調査の方法	23
調査日誌(抄)	24
第3節 古墳の立地	26
第4節 調査の概要	26
第5節 調査の成果	27
①遺構	27
②遺物	31
第6節 まとめ	32
①各トレンチの検討	32
②後円部墳丘復元案	34
付章1 平成14年度出土遺物	35
第1節 土師器	35
第2節 須恵器	42

第3節	耳環	48
第4節	玉類	49
第5節	まとめ	57
付章2	菊塚古墳の石屋形に用いられた石材	60
第1節	はじめに	60
第2節	石屋形について	60
第3節	石屋形石材の岩質	62
第4節	採石地の推定	64
第5節	石材産地の比定	65
第6節	おわりに	66
第6章	樽池西手山頂墳3号	69
第1節	調査の経緯と経過	69
主要参考文献		70
写真図版		73

挿図目次

第1図	善通寺遠景	1
第2図	調査地と周辺の主要遺跡	2
善通寺旧境内		
第3図	調査地位置図	6
第4図	トレンチ配置図	7
第5図	第1次調査 調査区土層断面図	9
第6図	第2次調査 調査区平・断面図	11
第7図	1次調査出土遺物実測図	12
第8図	2次調査出土遺物実測図	12
善通寺陣所跡		
第9図	調査区位置図	14
第10図	調査区配置図	15
第11図	調査区平・断面図	17
四国学院大学構内遺跡		
第12図	調査区位置図	18
第13図	トレンチ配置図	19
第14図	作業風景	19
第15図	調査区平面・土層断面図	21
菊塚古墳		
第16図	調査区位置図	22
第17図	作業風景	24

第18図	作業風景	25
第19図	第1・4トレンチ調査区平・断面図	28
第20図	第3・3トレンチ調査区平・断面図	29~30
第21図	砂糖竈検出状況・断面図	29~30
第22図	第3トレンチ出土遺物実測図	32
第23図	後円部墳丘復元案	33
第24図	主体部遺物取り上げ地区模式図	35
第25図	主体部土師器出土状況図①(床面上層)	36
第26図	主体部土師器出土状況図②(床面直上)	37
第27図	主体部出土土師器実測図①	38
第28図	主体部出土土師器実測図②	39
第29図	主体部須恵器出土状況図①(床面上層)	43
第30図	主体部須恵器出土状況図②(床面直上)	44
第31図	主体部出土須恵器実測図①	45
第32図	主体部出土須恵器実測図②	46
第33図	主体部出土装身具実測図①	50
第34図	主体部出土装身具実測図②	51
第35図	王墓山古墳石室内須恵器転用枕推定図	59
第36図	玄室内の石屋形	60
第37図	石屋形各部の名称	61
第38図	石屋形各部の形態	62
第39図	粒径による火山砕屑岩の分類	63
第40図	石材採石推定地周辺分布図	63
第41図	中山南東部の凝灰岩堆積層の露頭	64
第42図	瓦谷川の石塊や白い崩落土	65
第43図	地域別火山礫凝灰岩標本写真	68

樽池西手山頂墳3号

第44図	調査区位置図	69
------	--------	----

表目次

第1表	出土土師器観察表①	40
第2表	出土土師器観察表②	41
第3表	出土須恵器観察表	47
第4表	出土装身具観察表①	52
第5表	出土装身具観察表②	53
第6表	出土装身具観察表③	54
第7表	出土装身具観察表④	55
第8表	地域別火山礫凝灰岩	65

付図 菊塚古墳墳丘測量図

写真図版目次

菊塚古墳

- 巻頭図版1-1 第3・3'トレンチ墳丘裾検出状況(北東から)
巻頭図版1-2 第3・3'トレンチ墳丘裾完掘状況(北東から)
巻頭図版2-1 第3トレンチ全景(南東から)
巻頭図版2-2 第4トレンチ全景(北東から)

善通寺旧境内

【1次・第1トレンチ】

- 図版1-1 トレンチ周辺(北半・南から)…………… 75
図版1-2 トレンチ周辺(北半・北から)…………… 75
図版1-3 全景(北から)…………… 75

【1次・第2トレンチ】

- 図版2-1 遠景(北から)…………… 76
図版2-2 南壁断面(北から)…………… 76
図版2-3 西壁断面(東から)…………… 76

【2次・第1トレンチ】

- 図版3-1 全景(南西から)…………… 77
図版3-2 全景(南から)…………… 77
図版3-3 東壁断面(西から)…………… 77
図版3-4 土手状遺構(西から)…………… 77

【2次・第2トレンチ】

- 図版4-1 全景(南西から)…………… 78
図版4-2 全景(南から)…………… 78
図版4-3 重機掘削状況…………… 78
図版4-4 東壁断面(西から)…………… 78

【2次・第3トレンチ】

- 図版5-1 全景(南西から)…………… 79
図版5-2 全景(深掘後・南から)…………… 79
図版5-3 重機掘削状況…………… 79
図版5-4 東壁断面(西から)…………… 79

善通寺陣所跡

- 図版6-1 全景(西から)…………… 80
図版6-2 全景(北から)…………… 80
図版6-3 東部深掘断面(北から)…………… 80
図版6-4 調査区遠景(南東から)…………… 80
図版7-1 調査区西部(検出状況・北から)…………… 81
図版7-2 調査区西部(完掘状況・北から)…………… 81
図版7-3 ピット2(南から)…………… 81
図版7-4 土坑3(北から)…………… 81
図版8-1 調査区東部(北から)…………… 82
図版8-2 調査区東部(西から)…………… 82
図版8-3 ピット1完掘状況(南から)…………… 82
図版8-4 骨蔵器出土状況(南から)…………… 82

図版8-5	北・東壁石列(南から)……………	82
図版8-6	近代土坑断面(西から)……………	82

四国学院大学構内遺跡

図版9-1	第2トレンチ全景(北西から)……………	83
図版9-2	第1トレンチ(南から)……………	83
図版9-3	第3トレンチ(南から)……………	83

菊塚古墳

図版10-1	菊塚古墳遠景(北から)……………	84
図版10-2	後円部全景(南から)……………	84
図版10-3	後円部全景(北から)……………	84

【第1・2トレンチ】

図版11-1	第1トレンチ全景(北から)……………	85
図版11-2	第1トレンチ西壁(中央部・東から)……………	85
図版11-3	第1トレンチ西壁(北部・東から)……………	85
図版11-4	第1トレンチ西壁(南部・東から)……………	85
図版11-5	第2トレンチ全景(南から)……………	85

【第3トレンチ】

図版12-1	砂糖竈検出状況(南から)……………	86
図版12-2	砂糖竈完掘状況(南から)……………	86
図版12-3	砂糖竈断面(北から)……………	86
図版12-4	砂糖竈遠景(東から)……………	86
図版13-1	第3・3'トレンチ全景(南東から)……………	87
図版13-2	全景(東から)……………	87
図版13-3	墳丘裾溝(南西から)……………	87
図版13-4	周庭堆積木出土状況(南西から)……………	87

【第3'トレンチ】

図版14-1	墳丘裾検出状況(南西から)……………	88
図版14-2	墳丘裾完掘状況(南西から)……………	88
図版14-3	南壁断面(北西から・上は第3トレンチ)……………	88

【第4トレンチ・遺物】

図版15-1	全景(北東から)……………	89
図版15-2	南壁断面(北東から)……………	89
図版15-3	墳丘裾溝(南東から)……………	89
図版15-4	第3トレンチ出土遺物……………	89

【主体部出土遺物】

図版16-1	土師器 集合……………	90
図版16-2	須恵器 集合……………	90
図版17-1	須恵器 甕……………	91
図版17-2	須恵器 台付壺・甕……………	91
図版17-3	須恵器 横瓶……………	91
図版18-1	耳環 集合……………	92
図版18-2	玉類 集合……………	92

第1章 遺跡周辺の位置と環境

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の弘法大師(空海)が誕生した場所として有名な田園都市であり、総本山善通寺の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の土砂堆積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されている。南から北に下る緩やかな傾斜になっているため、たいがいの場所から瀬戸内海や対岸の岡山方面を望むことができる。この河成沖積層の土壌は、下層が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70～80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には、まれに縄文土器片が包含されていることが知られていたが、四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したことが確認されている。

善通寺市の北には、讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する天霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆ノ山・香色山が麓を連ねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、古くから信仰の対象であった。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、古くから文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡、善通寺市の五条遺跡、善通寺市から多度津町にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期古段階の弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では遺構・遺跡の範囲などについては現在も詳細は不明であるが、出土した弥生土器は畿内第Ⅰ様式中段階から新段階に相当することが確認されている。

これらの遺跡群は自然堤防上に立地しており、現在の海岸線から2～3kmの距離があるが、当時の海岸線が現在の標高5m付近と推定すれば、三井遺跡や中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間



第1図 善通寺遠景

背後の山は左端から大麻山・香色山・筆ノ山・我拝師山(この手前の小丘が甲山)・中山・火上山



第2図 調査地と周辺の主要遺跡

には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されている。また、四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、市内吉原町から旧石器も出土しており、現在のところ本市の古代文化は約2～3万年前まで遡ることができる。

善通寺市街地の北一帯には、香川県を代表する弥生時代の中核的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまでおよんでおり、ここが旧陸軍第十一師団の練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。

昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土した。また、県道整備工事の際に国立病院付近から弥生土器に加えて須恵器や小玉などが大量に出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまでおよんでいることが確認された。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲におよぶ可能性が強いばかりでなく、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる、県下でも例のない存在であることが分かっている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが判明し、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群では、これまでに数多くの発掘調査が実施されている。以下、主な調査を順に紹介する。総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行われたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。昭和58年には、遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村廃寺(伝導寺跡)の発掘調査が実施され、寺域の北端やその下層の弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。昭和59年には、善通寺西遺跡から弘田川沿いの約600m下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約1,500㎡の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居・小児壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部など、多くの遺構・遺物が確認された。特に弥生時代終末期の竪穴住居からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる倭製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏃、多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500mの仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。その後も、国立善通寺病院や四国農業試験場などではこれまで頻繁に発掘調査

1：阿弥陀堂遺跡 2：高熊遺跡 3：乾遺跡 4：中村遺跡 5：永井遺跡 6：稲木遺跡群 7：金蔵寺下所遺跡
8：五条遺跡 9：九頭神遺跡群 10：石川遺跡 11：甲山北遺跡 12：旧練兵場遺跡群 13：香色山遺跡群 14：四
国学院大学構内遺跡 15：生野本町遺跡 16：生野南口遺跡 17：御忌林遺跡 18：我拝師山遺跡群 19：鶴が峰西
麓遺跡 20：瓦谷遺跡 21：南原麻坂遺跡 22：北原シンネバ工遺跡 23：下吉田八幡古墳 24：丸山古墳 25：鶴
が峰4号墳 26：磨臼山古墳 27：王墓山古墳 28：宮が尾古墳 29：野田院古墳 (24～29：国指定史跡 有岡古墳群)
30：鶴が峰山頂古墳 31：御館古墳 32：岡(南光)古墳群 33：丸山1号墳 34：丸山2号墳 35：寺田1号墳
36：寺田2号墳 37：熊の巣古墳 38：大麻山椀貸塚古墳 39：大麻山経塚古墳 40：宮が尾2号墳 41：瓦谷1号墳
42：大塚池(吉原椀貸塚)古墳 43：北原古墳 44：善通寺伽藍 45：仲村廃寺 46：野田院跡 47：香色山経塚
48：仲村城跡 49：甲山城跡 50：菊塚古墳 51：三井遺跡 52：樽池西手山頂墳3号

第2図 凡例

が行われているが、いずれの調査でも住居跡が複合し密集した状態で遺存しており、正確な集落の規模は今も把握できていない。この遺跡の東側には九頭神遺跡・稲木遺跡・石川遺跡と続いている。

また、ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年に都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居や小児壺棺墓・箱式石棺墓などが確認された。九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。九頭神遺跡の北方に隣接する稲木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年から昭和60年にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二度実施されており、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居群や墓地、中世の建物跡群などが確認されている。旧地形をみると、これらの集落遺跡群はいずれも複数の旧河道間に形成された微高地に営まれたものであり、これまでの調査結果からいずれも同時期に併存したものであることもわかる。したがって弥生時代頃の善通寺周辺部には、"大集落"というよりはむしろ"小国"が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅剣3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣2口・細形銅剣5口・中細形銅鉾1口の計8口、我拝師山遺跡では計3カ所から平形銅剣5口・銅鐸1口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など青銅器が数多く出土している。また、近年旧練兵場遺跡では、小銅鐸をはじめ複数個の銅鐸片が出土し話題となった。市内出土の弥生時代青銅器の数が県下出土数の約4割を占めていることは特筆すべきことである。旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目される。

やがて弥生時代に開始された稲作文化は完成期を迎え、丸亀平野の肥沃な生産基盤を背景に、独自の技術を持った特定の有力者が灌漑治水事業などを行い耕作面積を増大させた。この勢力が地域を代表する権力者となり有岡地区を中心に数多くの墳墓を築くようになるが、古墳時代を迎えこの地の勢力はさらに発展を続ける。

この頃の集落域は現市街地の北方と東方に広がりを見せ、市街地の南西部の丘陵部が墓域と推定される。この地区の古墳は確認されているだけでも400基以上を数え、中でも香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は、前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓中でも比較的高所を中心に大麻山椀貸塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窪経塚古墳、丸山1号・2号墳など数多くの積石塚が築かれている。御忌林古墳と丸山2号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している。中でも野田院古墳は、標高405m(平地との比高差約370m)という全国的にも有数の高所に立地する丸亀平野最古級の前方後円墳である。大麻山北西麓のテラス状平坦部に立地しており、前方部は盛土、後円部は積石で構築されている。史跡整備に伴う発掘調査によって壺形土器が多数出土した。また、後円部と前方部の具体的な構築方法を確認するなど、多くの成果が得られた。築造年代は3世紀末頃と推測される。

また有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野籬子塚古墳(消滅)・磨臼山古墳・鶴が峰2号墳(消滅)・

鶴が峰4号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。王墓山古墳では、石屋形を有する横穴式石室が検出され、内部からは金銅製冠帽や象嵌付き鉄刀、多数の馬具・鉄製品・装飾品・土器などが出土した。また、菊塚古墳でも石屋形を検出し、多数の遺物が出土した。

古墳時代後期末になると大麻山麓部を中心に群集墳が多数出現する。現存する群集墳の中には線刻画で装飾された横穴式石室が計8基確認されており、それらが共通モチーフを有している点は大変興味深い。宮が尾古墳もそのひとつである。線刻画ではそのモチーフの正体を把握しにくいものが多いが、宮が尾古墳には周辺の装飾古墳と共通したモチーフのほか、人物群や船、騎馬人物が具象的に描かれており、装飾古墳を考える上で極めて貴重な存在と考えられている。

この頃の丸亀平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯直一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯の一代系譜の墓とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い、白鳳期には佐伯氏の氏寺である伝導寺(仲村廃寺)が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかし、この寺は短期間で消滅し、後に500m程南面に移転されたものが現在の善通寺伽藍ではないかと考えられている。奈良時代末、宝亀五(774)年この地の有力豪族であった佐伯氏に弘法大師空海が誕生する。平安初期、大同二(807)年に唐から帰朝した空海が、長安の青竜寺を模して今の伽藍の場所に真言宗最初の根本道場として善通寺を建立した。創建当時は四町四方の境内に金堂や大塔、講堂、法華堂、西塔、護摩堂のほか、四十九の僧房があったといわれているが、平安時代末頃から鎌倉時代、そして南北朝時代にかけては、社会環境の大きな変化に伴い幾度も荒廃の危機に曝された。これを反映するように、善通寺の西側に隣接する香色山山頂では平安時代末頃の経塚群が確認されている。末法思想を背景として、この地を活動の基盤とした豪族(佐伯氏)や善通寺の僧侶達が造り上げたものであるが、中には子孫のために経筒などの埋納場所を事前に確保しておいたとみられる上下二段構造の経塚(香色山1号経塚)が、平成9年夏に発見され注目を集めた。

善通寺は戦国時代、永禄元(1558)年には香川・三好両軍の戦火により焼失してしまう。その復興が始まるのは、やがて江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからのことであるが、四国八十八カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となるのはこの頃からであり、八十八カ寺のうち五カ寺が現市内に所在するこの地域は、総本山善通寺を中心に門前町として活気を取り戻す。

明治29(1896)年には陸軍第十一師団が設置され、門前町に加えて軍都としての性格を帯びるようになり、これに伴い道路や鉄道が整備された。この頃建設された洋風デザインの建造物群は市街地に今も多数残され、独特の景観を呈している。

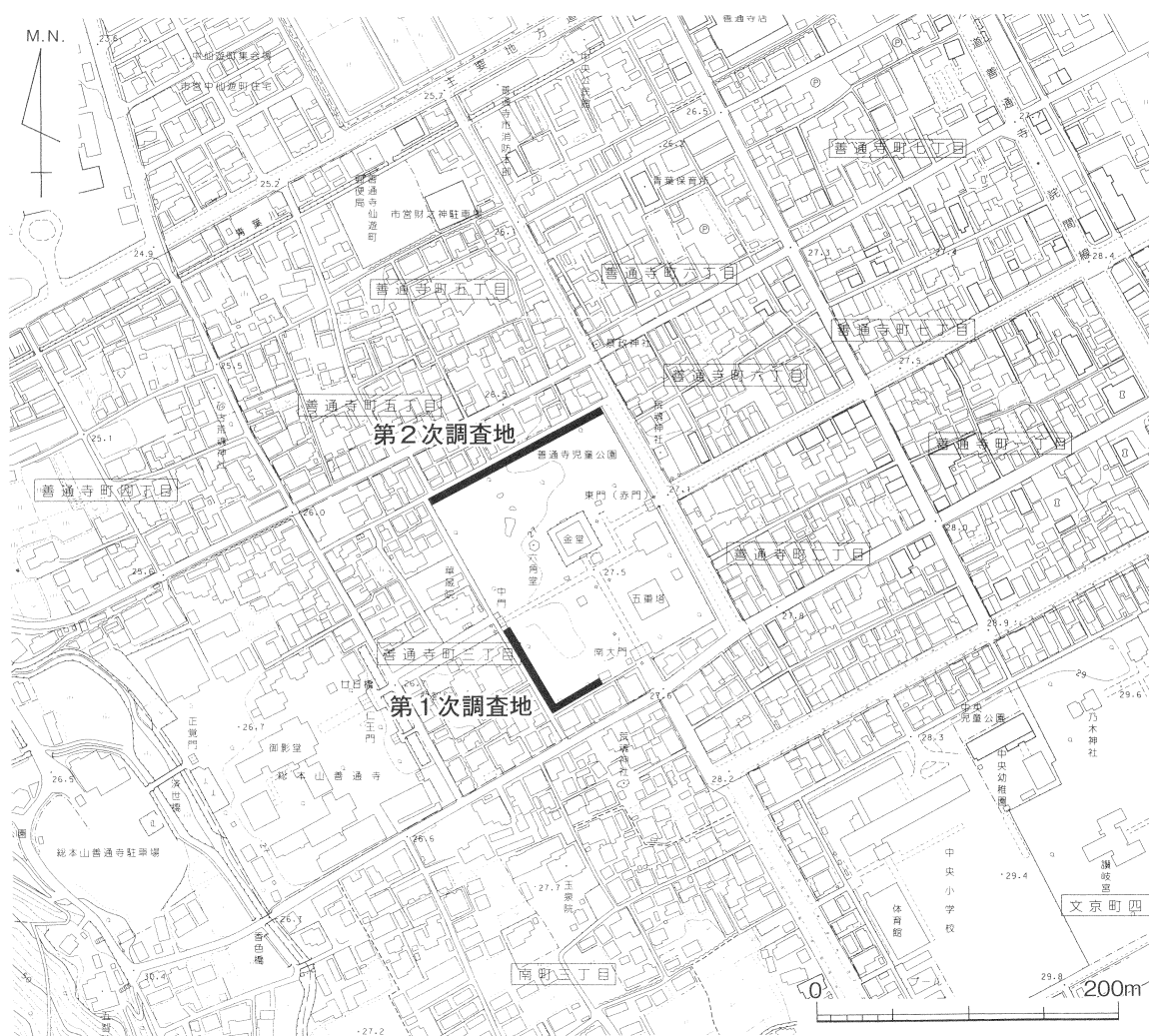
これにより善通寺町として都市化が始まり、昭和29(1954)年3月31日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村との合併により市制が施行され善通寺市が誕生し、現在に至っている。

第2章 善通寺旧境内

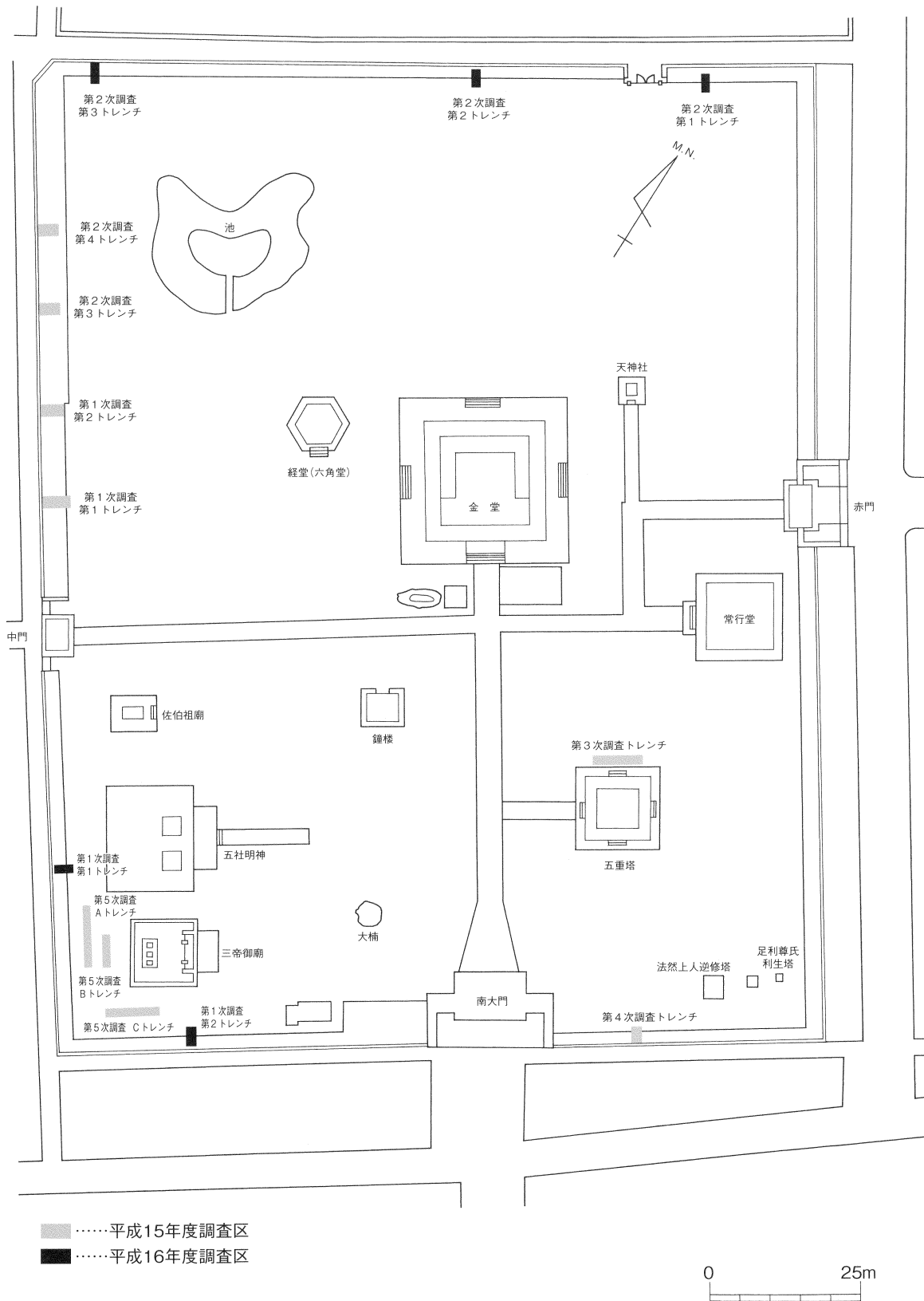
第1節 調査の経緯と経過

総本山善通寺は平成18年に創建1200年を迎える。それに伴い昨年度より境内整備が進められているが、約30年前の部分的な調査以外に確認調査などは実施されておらず、遺構の状況などが不明であった。そこで、本年度は昨年度に続き構造物建設予定地において、確認調査を実施した。調査は他遺跡の調査の関係から断続的に行ったため、計2次におよんだ。調査方法は該当地に任意でトレンチを設定し重機および人力にて掘削を行った。そして土層断面の観察、写真撮影、縮尺20分の1での図化を行った。なお、遺跡が県指定史跡に指定されているという重要性を勘案し、調査面積および下層の掘削は最小限に留めた。

なお、今年度の調査は昨年度より行われている旧境内四周塀沿いの調査の続きである。昨年度の調査では北西部、東南部で中世の土手状遺構を検出している。またさらにその下層では、弥生時代の包含層が存在することが確認されている(第4図)。以下、概要を説明する。



第3図 調査地位置図 (1:5,000)



第4図 トレンチ配置図 (1 : 1,000)

平成15年度調査の概要

【第1・2次調査】 旧境内西面の中門北部分で4ヶ所調査区を設定した。第1～4トレンチともに南北方向の土手状遺構を検出した。土手状遺構は大きく二層に分かれ、上層と下層で遺物に時期差が認められる。出土遺物から推察して土手状遺構の年代は、上層は室町期、下層は中世前半と推定される。さらにその下層には古墳時代の遺構および弥生時代の包含層が確認された。

【第3次調査】 旧境内南東部の五重の塔北側に該当する。中世の遺物包含層を検出した他は、平面・断面ともに明確な遺構は確認できなかった。

【第4次調査】 旧境内南東面に該当する。東西方向の土手状遺構を検出した。土手状遺構は大きく二層に分かれ、上層と下層で遺物に時期差が認められる。第1・2次調査で検出した土手状遺構同様、上層は室町期、下層は中世前半の年代を比定できる。2次調査で検出した弥生時代の包含層は確認できなかった。

【第5次調査】 旧境内の西南隅で、3ヶ所調査区を設定した。中世以降の遺物包含層のみで、平面・断面ともに明確な遺構は確認できなかった。

調査日誌(抄)

(第1次調査)

4月22日(木) 天候：晴

伽藍南西堀の西側・南側にそれぞれ1ヶ所、合計2ヶ所のトレンチを設定する。重機掘削のち、1トレンチの壁面精査を行う。断面で土手状遺構

を確認する。

4月23日(金) 天候：晴

2トレンチの壁面精査、断面図の作成をする。

(第2次調査)

8月5日(木) 天候：晴

伽藍北堀に合計3ヶ所のトレンチを設定する。1・2トレンチの重機掘削を行う。その後壁面精査、土層断面図の作成、写真撮影をする。

8月6日(金) 天候：晴

3トレンチの重機掘削を行う。その後壁面精査、土層断面図の作成、写真撮影をする。下層の土層堆積状況を確認するため重機で深掘りしたところ、ピットを検出する。埋土の遺物を取り上げ、現地での調査を終了する。

8月9日(月) 天候：晴

室内にて、出土遺物の水洗を行う。

8月10日(火) 天候：晴

室内にて図面・写真整理を行う。

8月11日(水) 天候：晴

室内にて、出土遺物の実測を行う。

8月12日(木) 天候：曇

室内にて、出土遺物の実測を行う。

8月13日(金) 天候：曇

室内にて、出土遺物のトレースを行う。

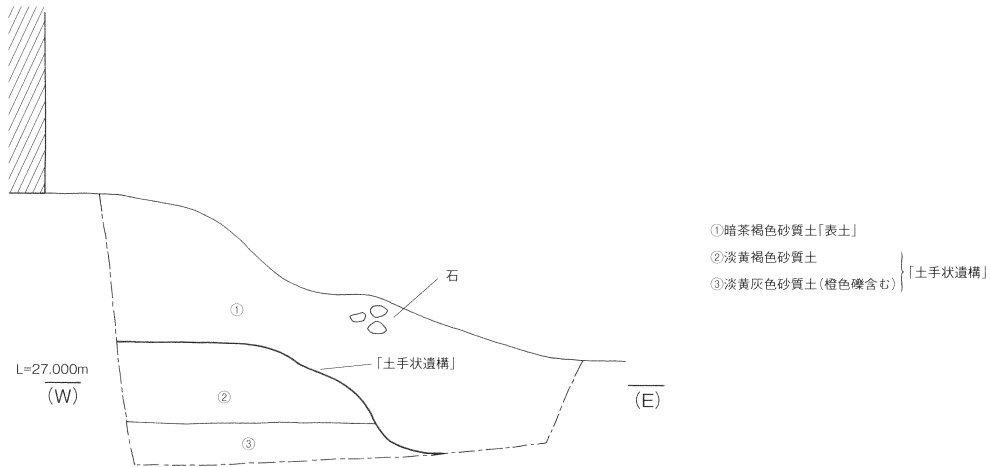
第2節 調査の成果

①遺構

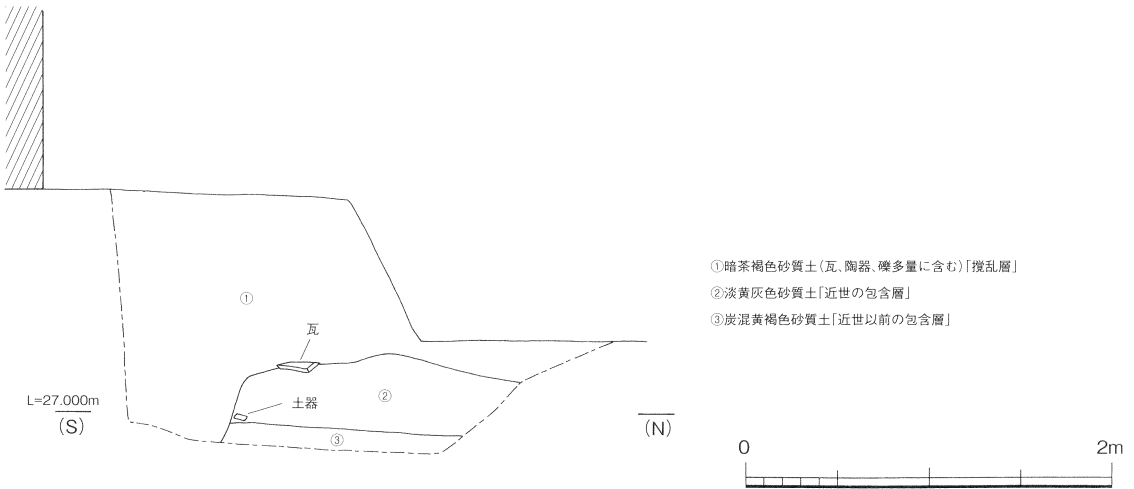
【第1次調査】 調査地は善通寺旧境内の南西辺に該当する(第3図)。第1トレンチは西壁に第2トレンチは南壁に、それぞれ堀に直交するように1本ずつトレンチを設定した(第4図)。

第1トレンチの土層は表土を除くと、2層に分層できる(第5図)。第1層は、淡黄褐砂質土で

第1トレンチ北壁



第2トレンチ西壁



第5図 第1次調査 調査区土層断面図 (1:40)

ある。土層②が相当する。土手状遺構上部に該当し水平に堆積している。締めりはやや悪い。第2層は、土手状遺構下部に該当する。土層③が相当する。淡黄灰砂質土で、橙色礫を含む。第1層の下層に位置し水平に堆積している。土手状遺構は現状の塀から約1.5m付近で西から東へ下方に落ちている。今回検出した土手状遺構が、平成15年度調査で検出された土手状遺構のどの層に相当するかは特定できなかった。

第2トレンチの土層は攪乱を除くと、2層に分層できる(第5図)。第1層はいぶし瓦や土器を含む近世の包含層で、水平に堆積している。第2層は、第1層の下層に位置し水平に堆積している。炭混黄褐砂質土で遺物を包含していないため時期の判別は困難であるが、現状では近世以前の包含層としておく。第2トレンチでは、昨年度調査および本年度第1トレンチにみられる土手状遺構は、検出されなかった。旧境内南辺は現在法面を石垣で補強した土手となっており、上部に塀が建てられている。付近の調査(平成15年度5次調査Cトレンチ、4次調査)でも攪乱・削平を受けており、当トレンチはおそらく石垣の構築等で、遺構が削平されている可能性が高い。

【第2次調査】 調査地は善通寺旧境内の北辺に該当する(第3図)。北門をはさんで東側に第1トレンチ、西側に第2・第3トレンチとそれぞれ塀に直交するように合計3つのトレンチを設定した(第4図)。

第1トレンチは表土・攪乱を除くと、2層に分層できる(第6図)。第1層は、弥生土器片を多く含む包含層である。土層⑥が該当する。出土した土器は碎片で著しく摩滅しており、二次的な堆積によるものと考えられる。第2層は褐灰砂質土で北壁塀より1.0mの地点で北から南へ下方に落ちる。土層⑦が相当する。遺構の形状から土手状遺構であると推測される。

第2トレンチは表土・攪乱を除くと、3層に大別できる(第6図)。第1層は土手状遺構上層に該当する土層⑦である。第2層は土手状遺構下層に該当し、水平に堆積しており、締まりは良い。土層⑧・⑩が相当する。第3層は土手状遺構の流出土であり、土層⑨・⑪が該当する。

第3トレンチは、表土・攪乱を除くと、4層に大別できる(第6図)。第1層は土手状遺構上層に該当する土層④である。第2トレンチ土層⑦と同じである。第2層は土手状遺構中層に該当し、水平に堆積している。土層⑥・⑦が相当する。第3層は土手状遺構下層に該当し、水平に堆積しており、締まりは良い。土層⑨・⑫が相当する。第4層は弥生時代の包含層である。土層⑬～⑯が該当する。炭混じりの黒褐色土で、一部焼土が薄く堆積している面がある。⑭・⑮の上面からは、ピット2基を検出した。ピット1からは弥生土器片と須恵器壺片が、ピット2からは弥生土器甕が出土した。

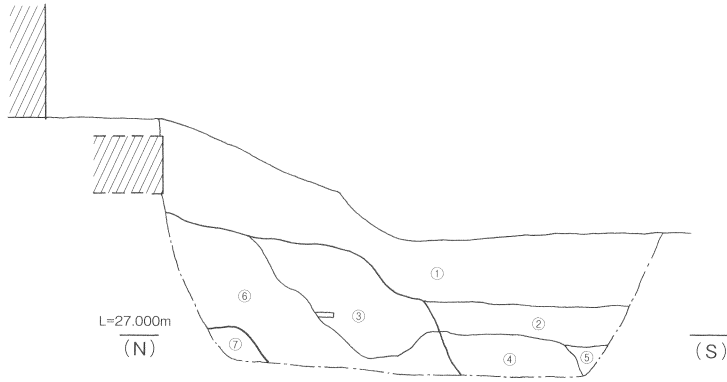
各トレンチで共に土手状遺構を検出している。各土手状遺構の相互関係は、第2トレンチ土手状遺構上層(土層⑦)に第3トレンチ土手状遺構上層(土層④)が相当し、第1トレンチ土手状遺構(土層⑦)に第2トレンチ土手状遺構下層(土層⑧・⑩)と第3トレンチ土手状遺構中層(土層⑥・⑦)が相当する。

②遺物

【第1次調査】 (1)は唐草文軒平瓦である。重機掘削中排土より出土した。焼成はやや不良で土師質である。瓦当端部の10%程度しか残存していない。素文縁の瓦当に退化した1葉構成の唐草文を配する。顎の形態は段顎で、平瓦部の凹面には布目の痕跡が、凸面には縦方向のナデ調整が認められる。平瓦部と瓦当部とが接合している内面には粘土が充填されており、接合時の横方向のナデ調整が確認できる。

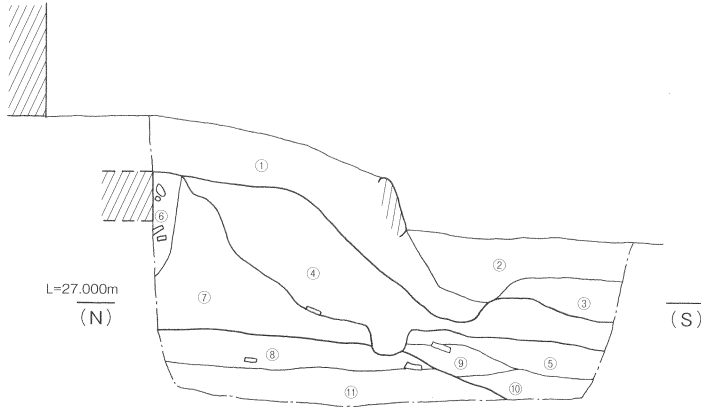
【第2次調査】 (1)は須恵器坏身である。第2トレンチ⑪より出土した。口縁部は欠損している。体部はやや内弯気味に立ち上がり、底部との境界部には外側に若干踏ん張った高台を貼り付ける。調整は内外面ともに横方向のナデ、底部は回転ヘラ削りである。色調は内外面ともに灰白色、焼成は良好、残存率は高台部15%である。8世紀前半頃と思われる。(2)は須恵器坏身である。第2トレンチ⑪より出土した。口縁は直線的に伸び、内面に弱い凹線を有する。端部は内面に面を持つ。体部は強いナデ調整による稜線がみられる。器壁は薄い。底部は一部しか残存せず詳細は不明である。内外面とも回転ナデ調整、色調は内外面ともに灰色、焼成は良好、残存率は口縁部10%以下である。(3)は須恵器坏蓋である。第3トレンチより出土した。口縁部のみが残存する。坏部は途中より屈曲する。端部は丸く収める。内外面とも回転ナデ調整、色調は内外面ともに灰白色、焼成は良好、残存率は口縁部10%以下である。田辺編年のTK43併行期に該当し、6世紀後半頃と思われる。(4)は須恵器甕である。第3トレンチ⑫より出土した。口縁部のみ残存

第1トレンチ東壁



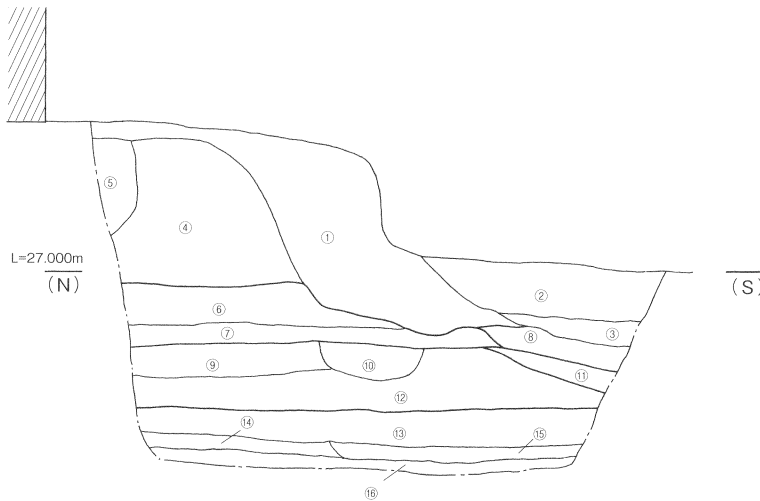
- ①黒褐色土〔表土〕
- ②10YR4/2 暗茶土ブロック混灰黄褐色土(締まり悪い)
- ③2.5YR5/3 黄褐色土(瓦含む)〔攪乱〕
- ④10YR4/3 にぶい黄褐色土(締まり悪い、瓦多量に含む)〔攪乱〕
- ⑤10YR8/1 黒褐色粘質土(締まり悪い)〔攪乱〕
- ⑥10YR4/4 黄土ブロック混褐色土(弥生土器片多く含む)
- ⑦10YR4/1 褐灰砂質土(弥生土器細片含む)〔土手状遺構〕

第2トレンチ東壁

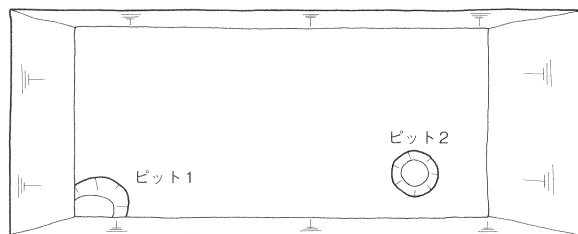


- ①10YR4/3にぶい黄褐色土〔表土〕
- ②花崗土〔攪乱〕
- ③炭混黒褐色土〔攪乱〕
- ④10YR7/2にぶい黄褐色土(摩滅した土器細片・瓦含む)〔攪乱〕
- ⑤10YR4/2灰黄褐色土(①に由来する暗茶土ブロック混、締まり悪い)
- ⑥2.5Y3/1黒色粘砂(コンクリート裏込め・石を多く含む)
- ⑦10YR4/2灰黄褐色土(土器片・瓦含む)〔土手状遺構上層〕
- ⑧10YR4/1褐灰砂質土(土器片・瓦含む、やや締まる)〔土手状遺構下層〕
- ⑨10YR6/2灰黄褐砂質土(土器片・瓦含む、締まりやや悪い)〔土手状遺構下層流出土〕
- ⑩10YR6/3にぶい黄褐色土(土器片含む、締まり良い)〔土手状遺構下層流出土〕
- ⑪10YR3/1黒褐色土(土器片含む、締まり良い)〔土手状遺構下層〕

第3トレンチ東壁



- ①2トレンチ①と同じ(瓦含む)〔表土〕
- ②2トレンチ②と同じ〔攪乱〕
- ③10YR3/2黒褐色粘質粗砂(瓦含む)〔攪乱〕
- ④2トレンチ⑦と同じ〔土手状遺構上層〕
- ⑤2トレンチ⑥と同じ
- ⑥10YR4/4褐色土(暗茶土ブロック含む) } 〔土手状遺構中層〕
- ⑦10YR5/4にぶい黄褐色土(土器片含む) }
- ⑧10YR4/2灰黄褐色粘質土(締まり悪い)〔土手状遺構中層流出土〕
- ⑨10YR4/4褐色粘砂(土器片含む)〔土手状遺構下層〕
- ⑩10YR4/3にぶい黄褐色土(土器片含む)
- ⑪10YR4/1褐灰粘質土(土器片含む)〔土手状遺構下層流出土〕
- ⑫10YR3/2黒褐色粘質土(黄土ブロック・土器片含む、締まり良い)〔土手状遺構下層〕
- ⑬10YR2/1黒色粘質土(黄土ブロック・炭・焼土多量に含む、締まり良い)〔弥生時代包含層〕
- ⑭2.5YR6/4にぶい黄色粘質土(茶土ブロック多量に含む)〔弥生時代包含層〕
- ⑮2.5YR4/2暗灰黄色粘質土(黄土ブロック含む)〔弥生時代包含層〕
- ⑯2.5YR6/6明黄褐色粘質土(茶土ブロック混、締まりやや悪い)〔弥生時代包含層〕

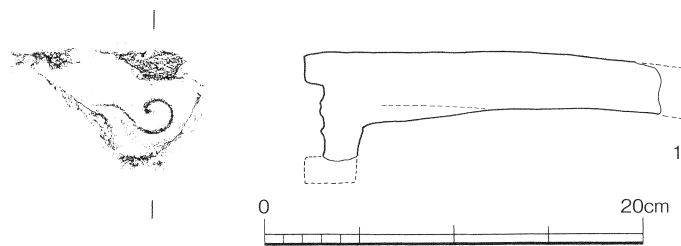


第6図 第2次調査 調査区平・断面図 (1:40)

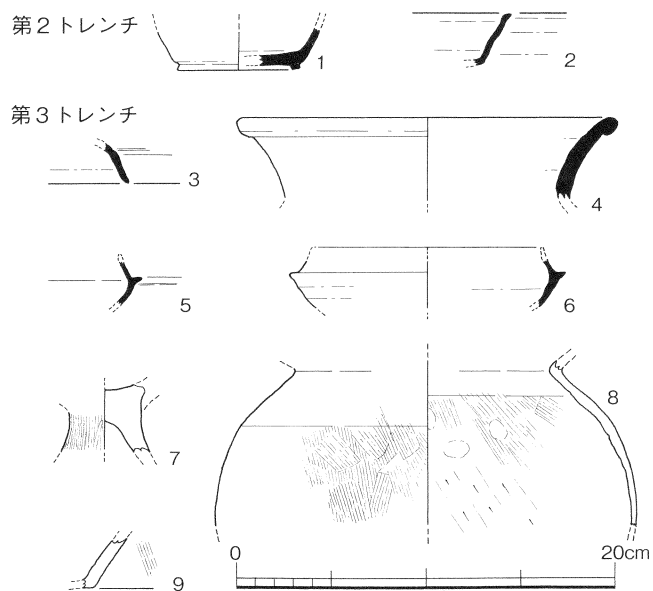
する。口縁部は外反し、端部を折り返して玉縁状に整形する。内外面とも回転ナデ調整、色調は内外面ともに灰白色、焼成はやや不良、残存率は口縁部20%である。(5)・(6)は須恵器坏身である。いずれも第3トレンチ⑫・⑬より出土した。(5)は受け部のみが残存する。

立ち上がりは内側にほぼ直線的に伸びる。端部は欠損する。受け部は短く、断面は鋭い三角形状を呈する。受け部上面には焼成時に付着した蓋の端部がごく僅かに残存する。内外面とも回転ナデ調整、色調は内外面が灰色、断面が赤灰色、焼成は良好堅緻、受け部より下部は高温のため、器壁がガラス化している。残存率は受け部10%以下である。(6)は受け部から坏部上半部が残存する。立ち上がりは内側に直線的に伸びる。端部は欠損する。受け部は短く、断面三角形状を呈する。受け部上面には

焼成時に付着した蓋の端部がごく一部残存する。内外面とも回転ナデ調整、色調は内面が灰色、外面が灰色～暗灰色、焼成は良好堅緻、残存率は受け部20%である。(5)・(6)いずれも田辺編年のMT15～TK10併行期に該当し、6世紀前半～中葉頃と思われる。(7)は弥生土器高坏である。第3トレンチ⑬より出土した。坏部と接合する脚部上半のみ残存する。脚部は外方向に外反しながら開く。内面はナデ調整、外面は縦方向のハケ調整である。外面に赤色顔料が明瞭に付着する。色調は内面が褐色、外面が赤褐色(赤色顔料部分)～にぶい黄褐色、断面がにぶい赤褐色を呈する。焼成は良好、残存率は脚部の接合部のみ100%である。(8)・(9)は弥生土器甕である。いずれも第3トレンチピット2より出土した。(8)は頸部から体部半ばまで残存する。口縁部は欠損する。頸部は明瞭に屈曲する。体部は弧を描き、下部へいくにつれ器壁が薄くなる。下半には二次焼成による煤が付着する。内面は頸部接合部より上側が横方向のナデ調整、体部は縦方向のケズリのちハケ調整で、部分的に指オサエの痕跡が残存する。外面は頸部から体部上半は横方向のナデ調整、体部は斜め方向のハケ調整である。色調は内外面ともににぶい黄橙色～にぶい橙色を呈する。焼成は良好、残存率は頸部接合部で20%である。弥生時代後期後半と考えられる。(9)は底部から体部の一部のみ残存する。底部から体部への屈曲は明瞭である。外面に縦方向のハケのちナデ調整、内面はナデ調整が確認できる。色調は内面がにぶい黄褐色、外面がにぶい黄褐色～橙色を呈する。焼成は良好、残存率は底部10%である。



第7図 1次調査出土遺物実測図(1:4)



第8図 2次調査出土遺物実測図(1:4)

第3節 まとめ

【第1次調査】 第1トレンチにおいては土手状遺構を検出した。昨年度調査で確認した旧境内西面中門北側の土手状遺構が中門南側まで続くことが判明した。

【第2次調査】 各トレンチともに土手状遺構を検出した。旧境内北面でも土塁状の土手が存在していたことが明らかになった。また第3トレンチについては、土手状遺構下層で弥生時代の包含層およびピットを確認した。遺物は、包含層およびピットから須恵器(古墳時代～古代)と弥生土器を検出した。

以上のように平成16年度は善通寺が昨年度に引き続き石造物設置を行う計画があったため、それに伴う小規模な確認調査を行った。

2年にわたる調査で、旧境内の北面・西面・南面を取り囲むように土塁状の土手が存在していたことが確実となった。旧境内東面の調査は実施していないが、おそらく旧境内四周に土手状遺構が巡るものと推定できる。土手状遺構の年代については、昨年度の調査で上層を中世後半、下層を中世前半と位置付けている。今年度の調査では調査区が小規模だったこともあり遺物の出土量が少なく時期の確定には至らなかったが、概ね昨年度調査と同様の年代と考えて差し支えないであろう。

また昨年度旧境内西面北部で弥生時代の包含層を確認していたが、今回第3トレンチで同じく弥生時代の包含層が検出され、新たに同時代の遺構(ピット)も検出している。他の第1トレンチ・第2トレンチにおいても二次的な堆積による弥生土器を含む土層が確認されることから、旧境内北部全体にわたり弥生時代の包含層が存在していた可能性が高い。弥生時代に当地に集落等何らかの人為的痕跡があったことは確実であろう。さらに、昨年度第2次調査で古墳時代と思われる遺構を確認している。今年度第2次調査でも包含層およびピットから古墳時代から古代の須恵器を検出しており、古墳時代～古代の遺構があった可能性がより強くなった。

これらのことから善通寺旧境内地は、善通寺創建以前から永続的に集落が営まれていたことが窺える。

第3章 善通寺陣所跡

第1節 調査の経緯と経過

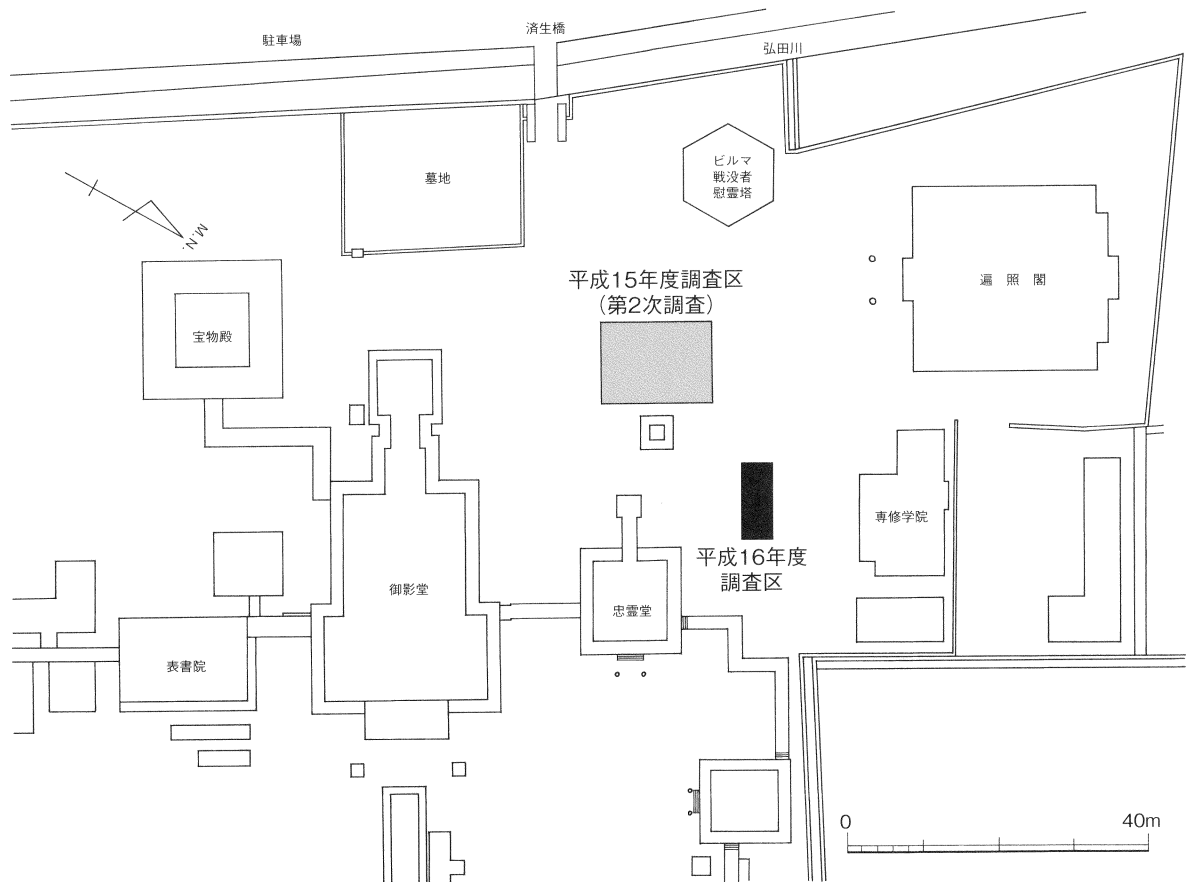
総本山善通寺は平成18年に創建1200年を迎える。それに伴い昨年度より境内整備が進められており、善通寺西院(誕生院)でも建物の建設が予定されている。当該地は善通寺陣所跡と称され周知の埋蔵文化財包蔵地として認知されている。本遺跡は寛文3(1663)年に香西成資によって作成された『南海治乱記』に、阿波国の三好実休が香川氏征討のため、長禄元(1558)年、金蔵寺に本陣を構え(金蔵寺陣所)、さらに軍勢を進めて善通寺に陣所を移したという記載が見られる。この陣所跡が現在の善通寺西院と伝えられている。

昨年度は建物建設が計画されている西院南東隅(第1次調査)と北東部(第2次調査)で確認調査を実施した。第1次調査では、中世後半から近世にかけての溝、ピット、土坑を検出し、瓦・土器が出土した。第2次調査では、7世紀末から8世紀に遡る大規模な溝状遺構を検出した(第9図)。

今回調査地はその北東にあたる。当地で納骨堂建設が計画されたため、確認調査を行うこととなった。



第9図 調査区位置図 (1 : 5,000)



第10図 調査区配置図(1:1,000)

調査日誌(抄)

7月1日(木) 天候：晴

調査区の設定を行う。調査区付近の材木・石材等の移動をする。調査区付近に基準点を設置する。道具の準備をする。

7月5日(月) 天候：晴

午後から機械掘削を行う。調査区に大きな木根があり、調査区全体を掘削することが困難である。調査区の西半分の掘削を終えた。

7月6日(火) 天候：晴

午前中は調査区東部の機械掘削を行う。南壁に側溝を掘る。

7月7日(水) 天候：晴

南壁・東壁の側溝掘りを行う。かなり暑い。

7月8日(木) 天候：晴時々曇

調査区西部の遺構面精査をする。南壁・東壁の分層をする。

7月9日(金) 天候：晴時々曇

引き続き遺構面精査を行う。検出した遺構を掘る。土層断面図・平面図を作成する。

7月12日(月) 天候：晴時々曇

調査区西部を重機で深掘りする。納骨堂工事掘削の範囲である地下3mの範囲まで掘削する予定であったが、礫層になり湧水してきたため土層確認は2m付近までにとどめる。埋め戻しを行い完了。道具の片づけをする。

7月13日(月) 天候：晴時々曇

遺構図面などの整理を行う。水洗等出土遺物の整理をする。

7月14日(火) 天候：晴時々曇

遺構図面などの整理を行う。水洗等出土遺物の整理をする。

7月15日(水) 天候：晴時々曇

遺構図面などの製図を行う。

第2節 調査の成果

①基本層序

調査地は、西院(誕生院)北西部、御影堂北の忠霊堂と専修学院の間に位置する(第10図)。平成15年度に調査を行った聖天堂再建予定地の北東にあたる。調査区は納骨堂建設予定地内に任意で東西10m×南北4mのトレンチを設定した。

基本層序は、表土・攪乱を除くと2層に大別できる(第11図)。第1層は近代の堆積層で、土層③～⑥が該当する。第2層は基盤層(遺構面)で、土層⑦が該当する。さらに下層は、確認のため調査区東側部分を深掘りしたが、砂層および粗砂層(湧水層)(土層⑪・⑫に該当する)が確認されたのみで、人為的な痕跡は確認できなかった。

②遺構・遺物

調査区のほぼ半分が木根で覆われており、検出した遺構はごく僅かである(第11図)。

第1層上面からは近・現代の骨蔵器を大量に含む土坑(土層⑬)と、東壁北端と北壁で建物の基礎と思われる石列(土層⑭)を検出した。

第2層(基盤層)上面からは、土坑3基、ピット5基を検出した。埋土や出土遺物の状況から判断して、近・現代の遺構は土坑1、土坑2、ピット3である。土坑1、土坑2からは近・現代の瓦・骨蔵器が出土した。ピット3にも骨蔵器が埋納されており、中には火葬骨が残存していた。

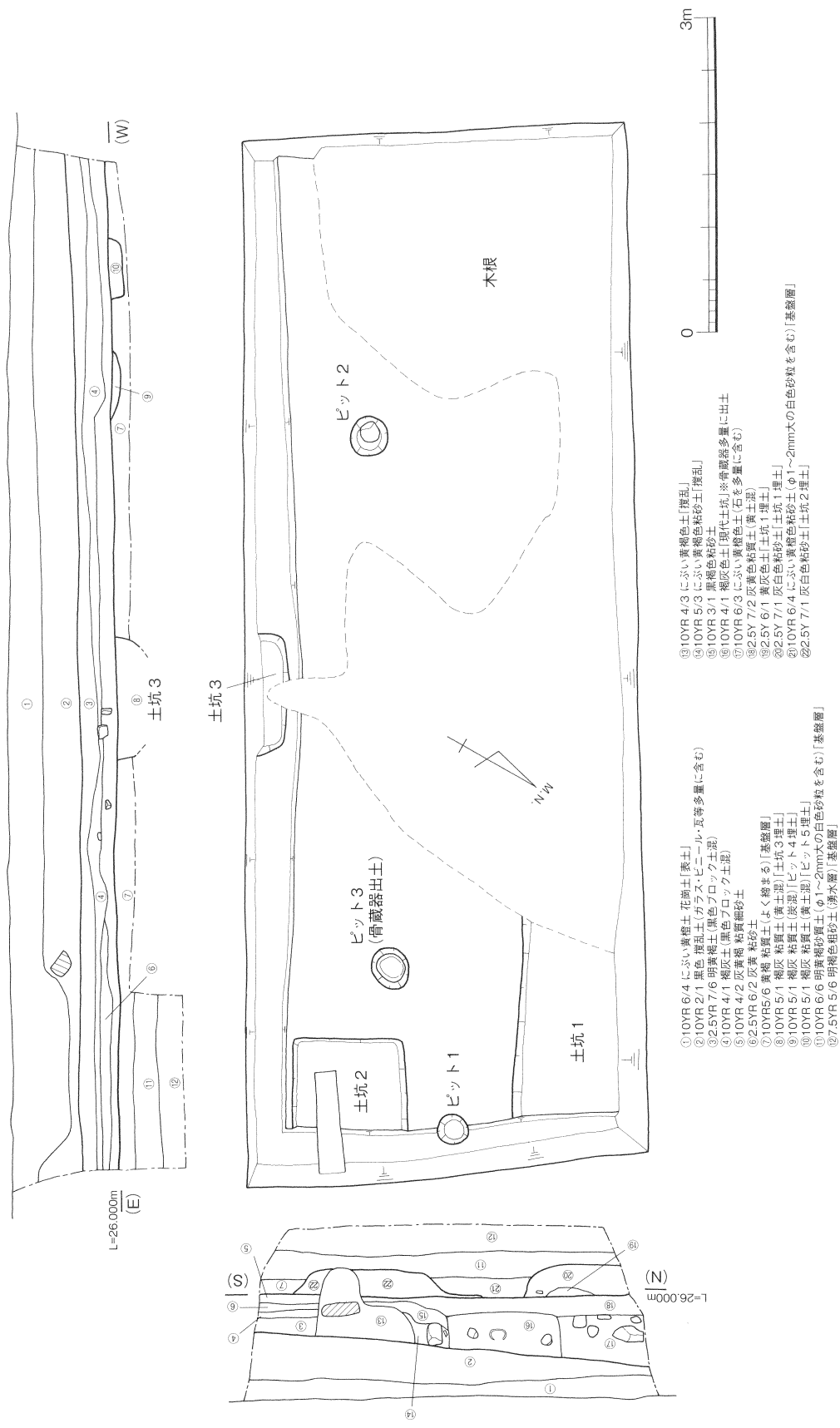
近世以前の遺構としては、土坑3、ピット1・2・4・5が挙げられる。土坑3は、東西1.1mを測る。南北は南壁にかかるため規模は不明である。隅丸方形を呈すことから柱穴であった可能性がある。埋土は、黄土混褐灰粘質土で、平瓦が1点出土した。破片であるため時期の確定は困難であるが、おそらく中世頃の所産であると考えられる。ピット1は、直径0.3mの円形を呈す。埋土は炭混褐灰色で、遺物は出土しなかった。ピット2は、直径0.35mの円形を呈す。底部には平石が据えられている。埋土は、褐灰粘質土である。ピット4・5は南壁西部断面で検出した。土層⑨・⑩に相当する。埋土はピット2と同じく褐灰粘質土である。遺物は出土しなかった。

第3節 まとめ

調査地は善通寺陣所跡の北西部に該当する。当初想定していた中世後半の陣所跡に関する明確な遺構・遺物は発見できなかった。しかし、近・現代の土層より下層面で、土坑、ピット等の遺構を僅かながら検出しており、近世以前に何らかの人為的痕跡があった事は明らかである。

また隣接する平成15年度2次調査では、古代に遡る大規模な溝状遺構を検出している。溝状遺構はその位置から多度郡三条と四条の境溝の可能性が高い。そのため、今回の調査でも関連する遺構が検出されることが予想されたが、当該時期の明確な遺構・遺物は検出されなかった。

今回の調査地区は面積が狭小なこともあり、今後周辺の調査事例の増加により、当遺跡の全貌が明らかになることを期待したい。



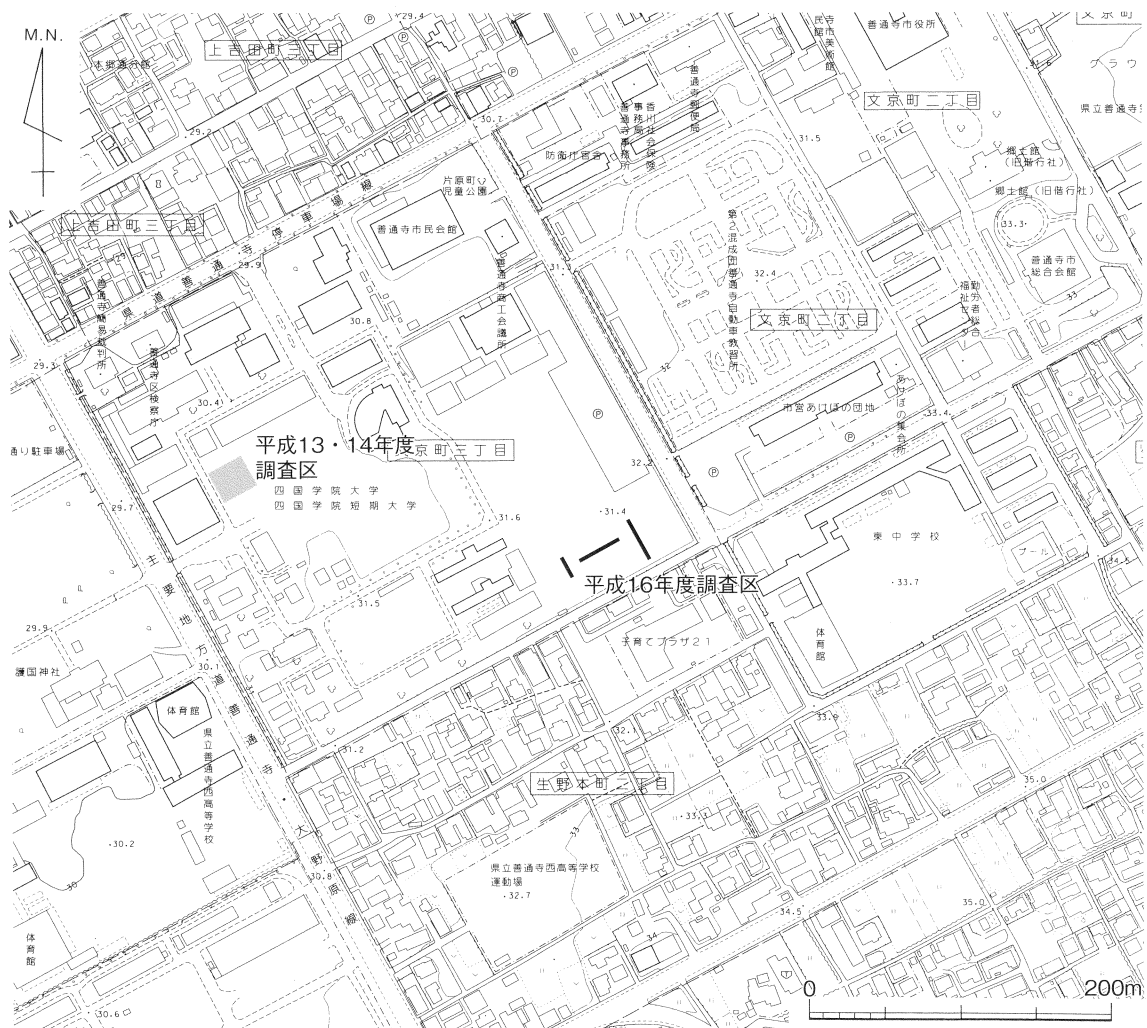
第11図 調査区平・断面図(1:60)

第4章 四国学院大学構内遺跡

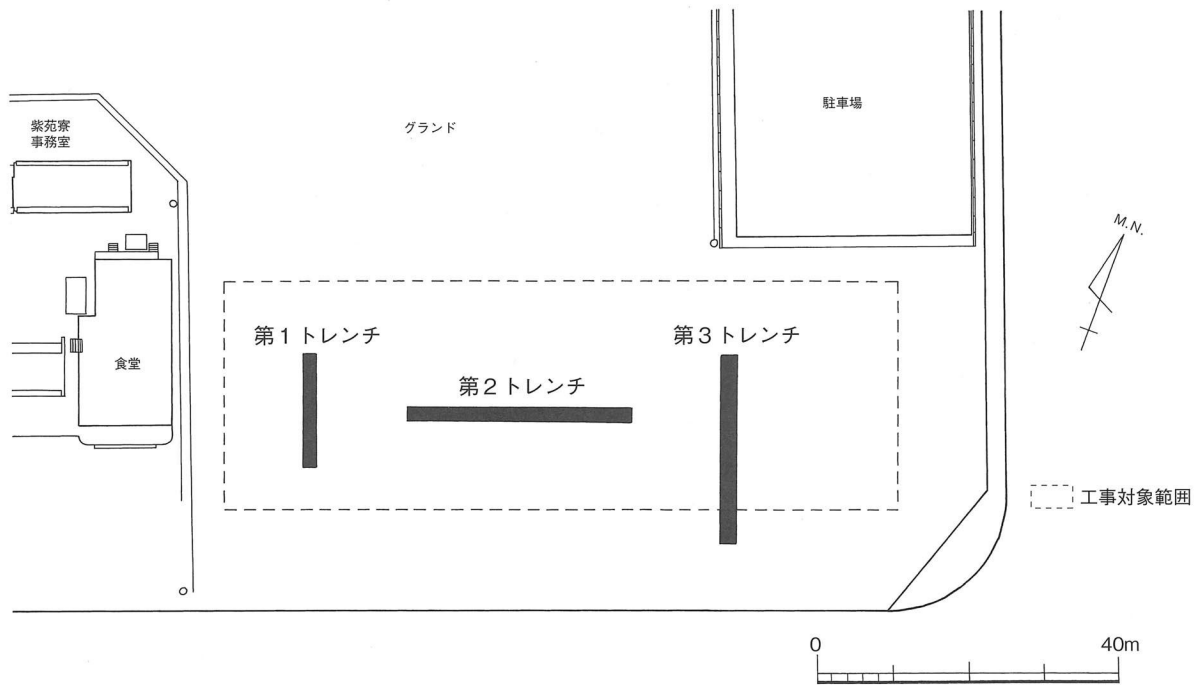
第1節 調査の経緯と経過

調査地は、四国学院大学の構内東南隅に位置する。近辺では、同じく構内のグラウンド(通称キャンパス)部分を平成13・14年度に渡り市教育委員会が調査し(第12図)、6世紀末から8世紀初頭にかけての集落跡を検出している(海邊2002、海邊・渡邊ほか2003b)。遺構は、掘立柱建物、竪穴住居、溝状遺構(条里側溝と推定される)が挙げられる。遺物は、土師器煮沸具、須恵器供膳具・貯蔵具、円面硯、瓦等が出土した。さらにその東側約60mの地点では四国学院大学友愛館(5号館)建設に伴い昭和51・52年に調査を行っている。未報告であるため詳細は不明であるが、6～7世紀の竪穴住居や溝、土器溜りが検出され、流路内より円面硯が出土した。遺構・遺物の内容から平成13・14年度の調査区と同一の遺跡の範囲内であると捉えることができる。また大学北東に隣接する市民会館では、建物建設時に土器等の遺物が表採されており、遺跡の存在が推測できる。

このように周辺に遺跡が点在する状況で、当地に学生支援センター(仮称)の建設が計画された。市教育委員会では当地の立地の重要性に鑑み、隣接する遺跡の広がり把握するため、確認調査



第12図 調査区位置図(1 : 5,000)



第13図 トレンチ配置図(1:1,000)

を行うこととした。

調査方法は、該当地に任意で東西・南北方向に合計3ヶ所帯状のトレンチを設定した(第13図)。基盤層まで掘削し、土層断面の観察、写真撮影、縮尺20分の1での図化を行った。また基盤層より下層の堆積状況を確認するため部分的に深掘りを行い状況把握に努めた。

調査日誌(抄)

12月3日(金) 天候：晴

調査区周辺の水準点測量を行う。調査区の設定をする。

12月6日(月) 天候：晴

重機掘削を行う。1～3トレンチともに礫層(川原石)・砂層が厚く堆積しており、調査地が氾濫原である可能性が高い。3トレンチについては、南側で一部締まった面がみられたため、その部分をさらに南へ10m拡張する。

12月7日(火) 天候：曇

1トレンチの壁面整形、および写真撮影・実測(断面)を行う。

12月8日(水) 天候：晴

2トレンチの壁面整形、および写真撮影・実測(断面)を行う。県文化行政課の佐藤竜馬氏来訪。

12月9日(木) 天候：晴

3トレンチの壁面整形を行う。拡張部分については平面精査を行う。平面図・断面図を作成する。

12月10日(金) 天候：晴

埋め戻しを行う。3トレンチについては確認のため南端で工事予定の掘削深度まで掘り下げる。道具の片づけをし、撤収する。



第14図 作業風景

第2節 調査の成果

①基本層序

土層は、各トレンチともに大きく3層に分層される(第15図)。第1層は表土である。第2層は、炭層で旧陸軍時代の堆積層と考えられる。第3層は、礫層および砂層で河川の堆積土である。

第2層の炭層は、各トレンチに水平に堆積している。戦前、善通寺には旧陸軍第十一師団が設置されており、当調査区には騎兵隊が配置されていた。明治40年に騎兵隊の兵舎が火事で焼失したとの記録があり、炭層はこの時のものではないかと推測される(註1)。

第3層礫層・砂層は、第2層直下より掘削床面まで、約0.5~1.0mにわたり厚く堆積している。礫層・砂層の礫・砂粒の大きさは層によって大小様々であり、長時間水流の摩滅を受け、形状は丸みを帯びている。礫層と砂層が互層になり、多方向へ地表面を繰り返し侵食し堆積している状況が、各トレンチの断面から窺える。

②遺構・遺物

第2トレンチ断面、第3トレンチ平・断面において、第2層直下より、ピットおよび方形土坑を検出した。いずれも埋土は炭を含んでおり、騎兵隊の時期の構造物柱穴や基礎の痕跡と推測される。

その他近世以前に遡る遺構は全く検出されなかった。河川の土砂が厚く堆積していることからこの付近一帯は長年にわたって河川の氾濫原であったためと考えられる。

遺物については、全く出土していない。

第3節 まとめ

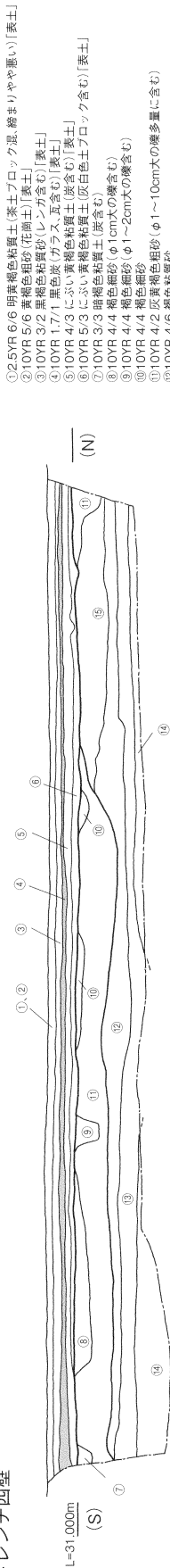
今回の調査では、調査区周辺で検出された古代の遺構・遺物は検出されなかった。前述のとおり、調査区一帯が河川の氾濫原であったため、集落のなかでもこの付近は住居跡等の遺構密度が希薄であったか、若しくは集落の範囲外であった可能性が高い。河川の流路は、各トレンチの断面をみても、数回にわたり大規模な氾濫を繰り返しており、流路の方向は多方向におよぶ。

また、今回の調査区の南約300mには生野本町遺跡・生野南口遺跡が立地する(第2図)。両遺跡では7世紀後半から8世紀前半の柵列・建物群、竪穴住居、条里側溝、土坑などが検出されている(國木1993、佐藤2003)。四国学院大学構内遺跡にほど近く、同一の微高地上にあることから、同じ遺跡群である可能性が考えられる。

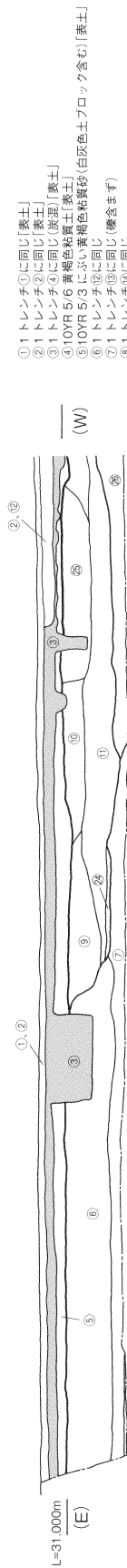
大学構内での遺跡の残存範囲と周辺遺跡の位置関係、および残存する旧河道の痕跡を考え合わせると、今回検出した旧河道は平成13・14年度調査区および昭和51・52年度調査区の東側に沿って南東から北西方向に流れていたと推測できる。今後、大学構内遺跡ならびにその周辺の集落遺跡の広がりや利用状況を把握するうえで、有益な情報となり得るであろう。

註1 香川県文化行政課 佐藤竜馬氏よりご教示頂き、当時の新聞記事(『香川新報』明治40年3月3日付記事)の写しを賜った。それによると、「善通寺騎兵第十一聯隊厩舎七棟の内第三中隊に属する第五厩舎は昨日午前一時五十分頃舎の西北部より出火す 當時西風吹荒み見る見る火は一面に擴がり桁行四十三間梁行六間の該舎全焼し…」とあり、騎兵隊馬舎で火災があったことが窺える。全焼した第五号馬舎は騎兵第十一連隊配置図(香川県教育委員会2005)によると現在の大学立体駐車場部分に位置し、今回の調査区にほど近い。

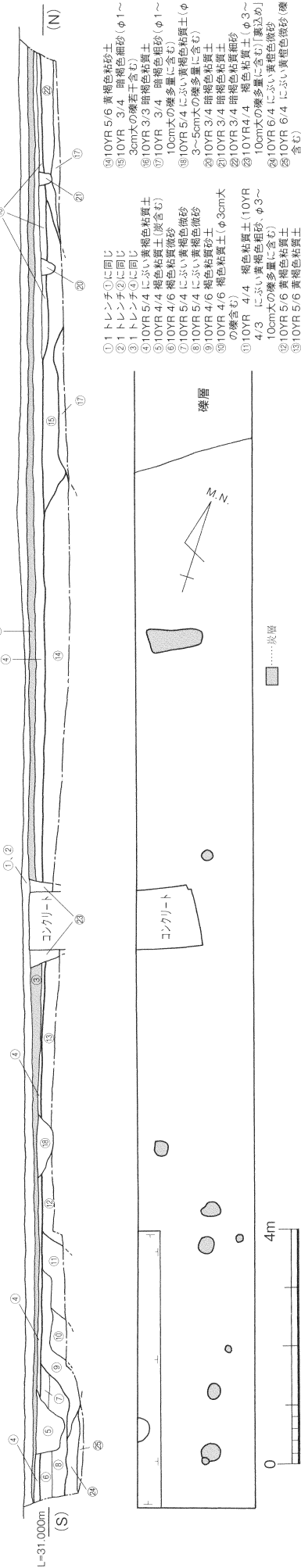
第1トレンチ西壁



第2トレンチ南壁



第3トレンチ西壁



- ①25YR 6/6 明黄褐色粘質土(茶土ブロック混. 綿まりやや重い)「表土」
- ②10YR 5/6 黄褐色粗砂(花崗土)「表土」
- ③10YR 3/2 黒褐色粘質砂(レンガ含む)「表土」
- ④10YR 1/7.4 黒色泥(ガラス. 瓦含む)「表土」
- ⑤10YR 4/3 にぶい黄褐色粘質土(灰白土ブロック含む)「表土」
- ⑥10YR 5/3 にぶい黄褐色粘質土(灰白土ブロック含む)「表土」
- ⑦10YR 3/3 暗褐色粘質土(灰含む)
- ⑧10YR 4/4 褐色粘砂(φ1cm次の礫含む)
- ⑨10YR 4/4 褐色粘砂
- ⑩10YR 4/2 灰褐色粘砂(φ1~10cm次の礫多量に含む)
- ⑪10YR 4/6 褐色粘質土(φ1~5cm次の礫多量に含む)
- ⑫10YR 3/4 褐色粘質土(φ1~10cm次の礫多量に含む)
- ⑬10YR 5/4 にぶい黄褐色微砂

- ①1トレンチ①に同じ「表土」
- ②1トレンチ②に同じ「表土」
- ③1トレンチ④に同じ(灰泥)「表土」
- ④10YR 5/6 黄褐色粘質土「表土」
- ⑤10YR 5/3 にぶい黄褐色粘質砂(白灰土ブロック含む)「表土」
- ⑥1トレンチ②に同じ
- ⑦1トレンチ③に同じ
- ⑧1トレンチ③に同じ
- ⑨10YR 4/4 褐色粘砂
- ⑩10YR 4/6 褐色粘砂(φ1~10cm次の礫多量に含む)
- ⑪砂利
- ⑫10YR 4/3 にぶい黄褐色粘砂(φ1~3cm次の礫含む)
- ⑬10YR 3/1 黒褐色砂質土(灰泥)
- ⑭10YR 3/1 黒褐色砂質土(灰泥)「探掘」
- ⑮10YR 5/4 にぶい黄褐色粘砂(φ1cm次の礫含む)
- ⑯10YR 5/4 にぶい黄褐色粘砂(φ3cm次の礫含む)
- ⑰10YR 4/3 にぶい黄褐色粘砂
- ⑱10YR 4/3 にぶい黄褐色粘砂(φ3~10cm次の礫多量に含む)
- ⑲10YR 5/6 黄褐色粘質土
- ⑳10YR 4/4 褐色粘砂
- ㉑1トレンチ③に同じ
- ㉒10YR 5/4 にぶい黄褐色粘砂
- ㉓10YR 4/4 褐色粘砂(φ1~3cm次の礫. 黄土ブロック若干含む)
- ㉔10YR 4/6 褐色粘質土(礫含む)

- ①1トレンチ①に同じ
- ②1トレンチ②に同じ
- ③1トレンチ④に同じ
- ④10YR 5/4 にぶい黄褐色粘質土
- ⑤10YR 4/6 褐色粘質土(灰含む)
- ⑥10YR 4/6 褐色粘質土(灰含む)
- ⑦10YR 5/4 にぶい黄褐色粘砂
- ⑧10YR 5/4 にぶい黄褐色粘砂
- ⑨10YR 4/6 褐色粘質土(φ3cm次の礫含む)
- ⑩10YR 4/6 褐色粘質土(10YR 4/3 にぶい黄褐色粘砂. φ3~10cm次の礫多量に含む)「裏込め」
- ⑪10YR 5/6 黄褐色粘質土
- ⑫10YR 5/6 黄褐色粘質土
- ⑬10YR 5/6 黄褐色粘質土
- ⑭10YR 5/6 黄褐色粘質土
- ⑮10YR 3/4 暗褐色粘質土(φ1~3cm次の礫若干含む)
- ⑯10YR 3/4 暗褐色粘質土
- ⑰10YR 3/4 暗褐色粘質土(φ1~10cm次の礫多量に含む)
- ⑱10YR 5/4 にぶい黄褐色粘質土(φ3~5cm次の礫多量に含む)
- ⑲10YR 3/4 暗褐色粘質土
- ㉑10YR 3/4 暗褐色粘質土
- ㉒10YR 4/4 褐色粘質土(φ3cm次の礫含む)
- ㉓10YR 4/4 褐色粘質土(10YR 4/3 にぶい黄褐色粘砂. φ3~10cm次の礫多量に含む)
- ㉔10YR 5/4 にぶい黄褐色粘砂
- ㉕10YR 5/6 黄褐色粘質土
- ㉖10YR 5/4 にぶい黄褐色粘砂(礫含む)

第15図 調査区平面・土層断面図(1:100)

第5章 菊塚古墳

第1節 調査の経緯と経過

菊塚古墳は戦前から丸亀平野屈指の首長墳と認識はされていたものの、発掘調査が行われ詳細が判明したのは、近年のことである。調査以前は盾形の周庭帯の存在から中期古墳とする説や後期古墳と考える説が並立していた。

平成12年度調査 菊塚古墳において周辺地の圍場整備の計画に伴う照会が善通寺市教育委員会にあった。古墳周辺の工事は水路や畦畔の改修が中心で、現存する墳丘への影響は無いが、周庭帯の痕跡と推定できる地割りへの影響が想定されたため、墳丘南東側の水田を中心に確認調査を実施した。調査の結果、周庭帯は基盤層を削り出して構築していることを確認したことや、後円部裾部を検出することができた。

平成13年度調査 以前より墳丘の流出が確認されていたが、墳頂部の菊主神社に通じるコンクリート製舗装路の下部の空洞化などが確認され、安全面から改修が急務であった。現状のまま放置すると、墳丘自体が崩壊する恐れがあったため、保存を前提とした墳頂部の遺構の確認調査を



第16図 調査区位置図(1 : 5,000)

行った。併せて後円部墳丘の測量調査も実施した。その結果、調査前不明であった主体部が南に開口する横穴式石室であることが判明した。また石室内には、中四国では王墓山古墳に次いで2例目の発見となる石屋形を検出した。後円部の測量の結果、直径39m前後の規模になることが分かった。

平成14年度調査 前年度の調査を踏まえ、玄室全面および羨道の一部の調査を行った。その結果、石室は石屋形を有する両袖式横穴式石室であることを確認した。遺物も盗掘を受けていたものの、玄室を中心に多数の遺物が出土した。

石室は後円部のほぼ中央部に位置する。奥壁が後円部のほぼ中心にあたり、奥壁の位置が墳丘の設計にも大きく影響していたと考えられる。石室形態は羨道が狭く袖部が内側に突出しているなど、九州型横穴式石室の影響を受けた可能性がある。また石屋形の存在は、菊塚古墳の性格を考える上で最も顕著な遺構である。石屋形の位置は、王墓山古墳とは異なり奥壁側に据えられている。この形態は肥後地方にある通有の石屋形の形態と言える。

遺物は大部分が玄室内から出土した。出土遺物は、須恵器・土師器などの土器類、耳環・ガラス製小玉・水晶製切子玉・碧玉製勾玉などの装飾品、杏葉・鏡板・辻金具・鐙などの馬具類、鉄銚・石突・鉄刀・刀子・鉄鏃などの鉄製品と多種多様である。また出土須恵器の年代より菊塚古墳の築造時期が、おおよそ6世紀中葉頃に該当することも判明した。

平成15年度調査 墳丘の形状を把握するために前方部端の検出を試みた。2次にわたる調査で前方部北側および西側に計10本のトレンチを設定した。調査の結果、前方部長25m、墳丘長64mの前方後円墳であることが判明した。また前方部西側前端では基盤層を削り出した幅5.5mの周溝を検出し、これまで周堤のみと考えられていた墳丘復元を変更する必要性が生じた。なお、後世の削平のため詳細な墳丘の形状を確定させるまでには至らず、今後の課題が残った。

市教育委員会は遺跡の重要性を考慮し、関係諸機関と協議の上、埋蔵文化財調査事業として保存を前提とした遺構の確認調査を行った。

現地調査については市教育委員会担当者を調査員として実施するとともに、四国学院大学考古学研究部・四国学院大学学生および地元作業員が参加した(個別氏名は例言に記した)。

調査は昨年度までの成果を踏まえて、墳丘形態、規模の確認および遺構の残存状況を把握するため、後円部裾推定部分にトレンチを設定した。調査面積は計50.7㎡である。調査期間は平成16年11月1日から同年11月30日まで行った。整理期間は調査中から適宜行い、平成17年3月31日に終了した。

第2節 調査の方法

調査は後円部裾が残存していると考えられる古墳南側および東側にトレンチを設定した。

計5本のトレンチを設定し、遺構の検出に努めた。調査区は現況において更地および荒蕪地となっている。トレンチは最も遺構が把握できるように長さ、幅ともに全て任意である。作業効率のため適宜、平面および断面の観察・縮尺20分の1での図化・写真撮影を行いながら下層の掘削に努めた。

調査日誌(抄)

11月1日(月) 天候：曇のち晴

1～4トレンチの設定をする。基準杭に標高をおとす。1トレンチの表土剥ぎを行う。

11月2日(火) 天候：晴

1～3トレンチの調査。2トレンチは、表土を剥いだところ、北東に隣接する井戸の洗い場と思われるコンクリートを平面で検出したため、下層の調査を断念する。

1トレンチは、墳丘側に1.5m拡張する。墳頂側から墳丘裾に向かって礫混黄色土の落ちがみられる。基盤層・盛土・盛土流出土のいずれなのか要検討。

3トレンチは、表土を剥いだ後、墳丘側で基盤層と思われる黄色土を検出。その上層に部分的に赤土(焼土か?)が堆積する。



第17図 作業風景

11月4日(木) 天候：晴

1トレンチは、墳丘の落ちのラインを確定させるため、側溝を下げ断面および平面での土層堆積状況の把握に努める。平面で周濠埋土と推定される砂礫混黑色土との境を確定し、写真撮影する。

3トレンチは、墳丘側に1.0mトレンチを拡張する。昨日検出した赤土(焼土)はドーナツ状に広がり、埋土には土器・焼土の塊・炭などがあることから、竈でないかと考えられる。その付近から東へ向かって基盤層の落ちを側溝断面で確認する。

11月5日(金) 天候：晴

1トレンチは、側溝断面で墳丘側に堆積した礫混黄色土の下層に礫混黄灰砂質土を確認する。2層ともに墳丘側に続くことから、基盤層であると判断できる。周濠埋土と推定される砂礫混黑色土をこの土層まで除去する。

3トレンチは、竈を平面精査したところ焼土の

楕円が二つ連なることから砂糖竈であると推定される。写真撮影・実測を行う。側溝で墳丘裾の堆積土を除去する。基盤層直上には黒色腐植土が堆積しており、土層下部より土師器把手を検出した。香川県文化行政課松本和彦氏が来訪。土器の年代等について御教示いただく。

元興寺文化財研究所角南聡一郎氏より砂糖竈の資料を送付していただく。

11月8日(月) 天候：晴

1トレンチは、先週に引き続き周濠埋土と推定される砂礫混黑色土を除去する。トレンチ南端より2.5mあたりまでは、基盤層である礫混黄灰砂質土の上に暗灰粘土が薄く堆積する。基盤層直上まで全て除去した段階で写真撮影する。

3トレンチは、砂糖竈の完掘を行い、写真撮影後裁割を行う。その後周濠埋土と考えられる黒色腐植土上面まで掘削する。

11月9日(火) 天候：晴

1トレンチは東西壁の土層断面図を作成する。

3トレンチは、基盤層の落ちが周濠になるかどうか確定するため、東側へ5.0m拡張する。

4トレンチは、耕作土の除去を行う。側溝で土層の堆積状況を把握する。

11月10日(水) 天候：晴

3トレンチは、引き続き拡張部分の表土を除去する。側溝で土層の堆積状況を把握する。

4トレンチは、耕作土直下黒灰粘土上面まで掘削した後写真撮影をする。

11月11日(木) 天候：雨のち曇

午前中は、雨天のため作業中止。室内で図面・写真の整理を行う。

午後は、3トレンチの北隣に3トレンチを設定するため該当箇所にある廃土を除去する。

3トレンチの壁面精査をする。墳丘裾部分はやや窪みがある。土師器把手はこの窪みの埋土から出土したものと考えられる。

4トレンチは、墳丘側に1.5m拡張する。

11月12日(金) 天候：晴

3・3トレンチは引き続き廃土を除去した後、3トレンチの設定を行う。(1.5×5.5m)表土を除去する。

4トレンチは、拡張部分を基盤層の面まで掘削する。

香川県埋文センター中里伸明氏が来訪。

11月13日(土) 天候：晴

3'トレンチの耕作土を除去する。墳丘側で南北方向に走る溝を検出。近現代の瓦がぎっしり詰まっており、暗渠ではないかと考えられる。3'トレンチは墳丘裾の傾斜部分が砂糖竈で攪乱を受けていたが、3'トレンチは緩やかに傾斜していくのが平面で確認できる。

11月15日(月) 天候：雨のち曇

午前中は、雨のため作業中止。室内で図面・写真等の整理を行う。

午後は、各トレンチの水抜きおよび3'トレンチ北壁東側部分の崩落箇所廃土の除去、3'トレンチの墳丘裾堆積土上面までの掘削を行った。

4'トレンチは、拡張部分の表土を除去する。

11月16日(火) 天候：晴

4'トレンチは、基盤層の面まで拡張部分の掘削を行う。

3'トレンチは、基盤層直上の黒灰粘土を除去する。黒灰粘土下層には多量の木片が埋没していた。(一部取上げ)

徳島文理大学助教授大久保徹也氏来訪。葺石・埴輪の有無、墳丘外部施設の状況などから菊塚の年代観について御教示いただく。



第18図 作業風景

11月17日(水) 天候：晴

3'トレンチは、墳丘裾溝埋土の掘削をする。埋土下層より土器片が出土する(弥生土器か?)。

3'トレンチも墳丘裾溝埋土の掘削をする。同じく埋土下層より土器片が出土する(弥生土器か?)。

香川県埋文センター片桐孝浩氏・信里芳紀氏来訪。墳丘裾溝埋土と基盤層直上粘土層との前後関係(切り合い)や3'トレンチと1・4'トレンチの堆積層の関係について御教示いただく。丸亀市教育委員会大野宏和氏来訪。

11月18日(木) 天候：曇時々雨

現場の作業は休みとする。室内で土器洗い等を行う。

11月19日(金) 天候：曇時々雨

現場の作業は休みとする。室内で土器洗い等を行う。

11月20日(土) 天候：晴

3'トレンチは、墳丘裾の溝状遺構埋土の掘削を行う。除去後、3'トレンチ・4'トレンチと合わせて写真撮影をする。3・3'トレンチの土層断面図を作成する。

11月22日(月) 天候：晴

3・4'トレンチの土層断面図、2'トレンチの平面図を作成する。県文化行政課松本氏来訪。

11月23日(火) 天候：晴

土層断面図を作成する。大川広域行政事務組合松田朝由氏・琴南町教育委員会加納弘之氏来訪。

11月24日(水) 天候：晴

土層断面図・平面図の作成を行う。平面図にレベリングする。

11月25日(木) 天候：晴

3'トレンチ砂糖竈の断面図を作成する。竈床面炭層の土をサンプリングする。調査区の埋め戻しを行う。

11月26日(金) 天候：晴のち曇

調査区を埋め戻し、調査完了。道具の片づけをする。

11月27日(月) 天候：晴

図面・写真等の整理を行う。

11月28日(火) 天候：晴

図面・写真等の整理を行う。

第3節 古墳の立地

菊塚古墳は善通寺市街地から南西側に広がる瓦谷地区に位置する。この地区は有岡地区とも呼ばれており、低丘陵地帯が広がっている。この地区は有岡大池を水源とする弘田川上流域に該当し、多くの首長墳級の前方後円墳が集中する地域として著名である。この地は古代から聖域視されていたようで、集落遺跡があまり検出されない反面、青銅器埋納遺跡や祭祀遺跡、墳墓などが多く見つかっている(第2図)。

この地域は北側から西側にかけて、五岳山の一角である香色山(標高153.2m)、筆ノ山(標高296.0m)、我拝師山(標高481.0m)が連なっており、南側は丸亀平野の独立峰では最も高い大麻山(標高616.3m)の裾野が広がり、西側の平野方向のみが開ける地形となっている。これらの山々の尾根上には前期古墳が点在し、標高50~80mの山裾部には後期から終末期の群集墳が密集している。また平野部にも舌状に伸びる小丘陵が点在しており、その地形を利用して多数の古墳が築造されている。

菊塚古墳は、これらの平野部に広がる古墳のうち最も西側の平地に独立して築造されている。古墳は開墾や住宅建設に伴い前方部の大部分が消滅しており、菊理姫命を祀る菊主神社がある後円部のみが辛うじて残存しているに過ぎない。その後円部さえも周囲は大きく崖状に削平されるなど地形の改変が著しい。一方圍場整備前の航空写真を観察すると、古墳の周囲には周庭帯の痕跡と推定される平面楕状の地割りが認められる。この部分は墳丘南側では西から東にかけて階段状に低くなっており、その比高差は0.7mを測る。墳丘の主軸は南西-北東方向を向いている(付図)。

墳丘の全長は推定で約59m、後円部直径約39m、周庭帯の全長は約90m、最大幅約70mを測り、丸亀平野でも屈指の規模を誇る。

第4節 調査の概要

菊塚古墳後円部墳丘の範囲については、平成12年度の墳丘裾の調査、平成13年度の墳丘測量調査、平成14年度の主体部の調査での結果を総合して、玄室奥壁中心を基点に約直径39mの円弧に復元できる(平成15年度報告書墳丘復元案参照)。しかし、墳丘裾自体の調査は平成12年度において後円部南側にトレンチを1ヶ所設定したのみで、他の部分について発掘調査は行われていなかった。

そこで今年度は後円部墳丘裾の確定を目的に、発掘調査が可能な後円部南側および東北部にかけて合計5本のトレンチを設定し範囲の把握につとめた。トレンチの設定は、墳丘復元案を参考に、墳丘中軸線に直交する南側に第1トレンチ、東に45度振った地点に第2トレンチ、中軸線上東側に第3トレンチ、第3トレンチより0.5m北に第3トレンチ、中軸線より北に45度振った地点に第4トレンチをそれぞれ設定した(第23図)。各トレンチの規模は、調査開始時は1.5×5.0mであったが、その後調査の状況に応じて適宜拡張している。

第5節 調査の成果

①遺構

第1 トレンチ トレンチの規模は、1.5×6.5mを測る。土層は4層に大別できる。

第1層は表土で土層①～③が該当する。黒色粘質土で、近・現代の瓦・土器を多く含む。土層②の上面より直径0.8mの円形土坑が検出された。近・現代の土器・瓦が大量に出土したことから近・現代の廃棄土坑であると考えられる。

第2層は、土層⑤・⑥が該当する。基盤層由来と推測される風化した礫を含む堆積土である。

第3層は土層⑦・⑧が該当する。基盤層直上に堆積した粘土層である。

第4層は基盤層である。土層⑨・⑩が該当する。砂礫層である。トレンチ北端より1.25mの付近で北から南へと下方に落ちている。この傾斜が基盤層削り出しの墳丘裾部分であると推定される。

第2 トレンチ トレンチの規模は、1.5×5.0mを測る。表土を除去した段階で、コンクリートや煉瓦で区画された構造物が検出された。調査区北西には近・現代の井戸が隣接しており、検出した遺構は井戸の洗い場であったと考えられる。除去が困難であるため、当トレンチにおける下層の調査は断念した。

第3 トレンチ トレンチの規模は、1.5×11.0mを測る。土層は、6層に大別される。

第1層は、近・現代の耕作土・床土である。土層①・⑦が該当する。近・現代の土器・瓦を多く含む。トレンチ西端土層⑦上面で焼土の範囲を検出した。ドーナツ状の平面楕円の焼土が東西に2つ連なっている。各焼土坑の埋土からは、炭・焼土、土器・瓦が検出された。遺構の形態や土層・出土遺物の状況から砂糖竈であると判断した。西端側より順に砂糖竈1、砂糖竈2と呼称する。砂糖竈1は最大横幅1.2m、砂糖竈2は最大横幅0.8mを測る。炊き口は2基とも南側に配置する。2基とも竈内埋土は、焼土・炭混じりの暗灰粘質土で、底部は炭が堆積している。周囲は被熱のため赤く変色し硬化している。また竈は、土坑状の穴を掘り据え付けている。掘形の底部には灰褐粘土を敷いている。

第2層は、近代以前の堆積土である。砂糖竈東にあたる部分は、数回にわたり整地しており(土層⑧・⑩～⑫)、さらに東側は水平に堆積している(土層⑨・⑬)。風化礫を含む。

第3層は、2層よりさらに前段階の堆積土である。遺物が出土していないため時期の確定は困難である。土層⑮・⑰が該当する。礫を含み、水平に堆積する。

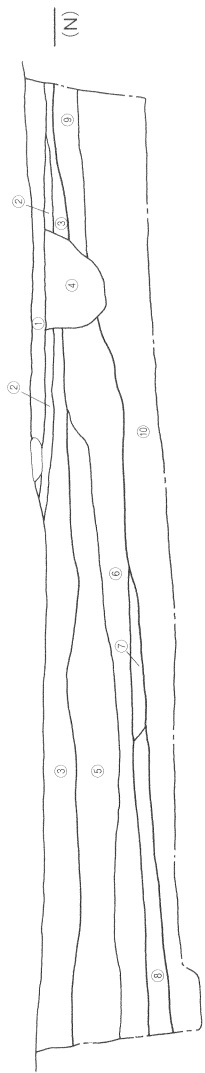
第4層は、墳丘崩落土である。墳丘基盤層崩落土は土層⑱が該当する。基盤層由来の黄土ブロックを含む。墳丘盛土崩落土は土層⑲・⑳・㉑が該当する。墳丘裾の傾斜部分に西から東へ下る様に堆積する。㉑より弥生土器破片が出土した。

第5層は、墳丘裾から周庭にかけての基盤層直上の堆積土である。土層㉒が該当する。黒色粘土(腐植土)で水平に堆積する。底部より大量の木片が検出された。木片は加工されていない自然木で枝の部分がほとんどである。おそらく墳丘・周堤若しくは周濠外周辺に植生していた樹木の枝が、周庭に落ち込んだものであると考えられる。

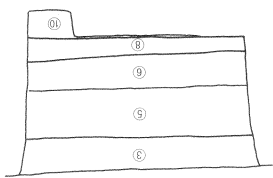
第6層は、基盤層である。墳丘から墳丘裾にかけては黄褐色粘質土(土層㉓)、周庭は緑灰色粗砂(土層㉔)となる。トレンチ西端から3.3m東の地点で西から東へ下る。さらにトレンチ西端から6.1m東の地点で東上方へ上がり、そのまま東へ平坦な面が続く。つまり、基盤層削り出しの墳

第1トレンチ

L=39,000m



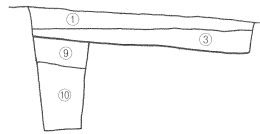
(W)



L=39,000m

(E)

L=39,000m
(W)

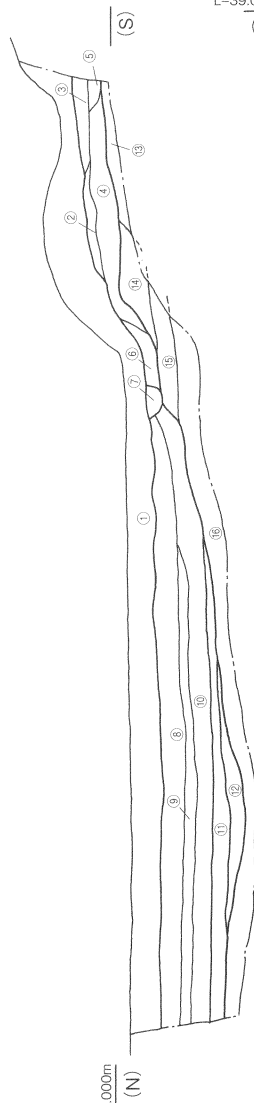


(E)

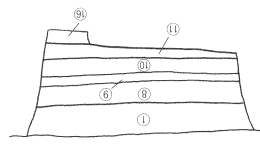
- ①10YR 2/2 黒褐色粘質土「黄土」
- ②10YR 3/2 黒褐色粘質土(黄土プロック 塊泥)「黄土」
- ③10YR 2/3 黒褐色粘質土(塊泥)「黄土」
- ④10YR 3/3 黒褐色粘質土(生泥、互層)「土坑埋土」
- ⑤10YR 3/2 黒褐色粘質土(風化した礫少量を含む、茶土層)
- ⑥10YR 2/2 黒褐色粘質土(風化した礫少量を含む、茶土層)
- ⑦N 2/0 黒色粘土(風化した礫、青灰砂を含む)
- ⑧N 3/0 暗灰粘土
- ⑨2.5Y 4/4 オリーブ褐色砂礫「基盤層」
- ⑩2.5GY 4/1 暗オリーブ灰緑砂(風化した礫を含む)「基盤層」

第4トレンチ

L=39,000m



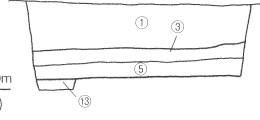
(E)



L=39,000m

(W)

L=39,000m
(E)



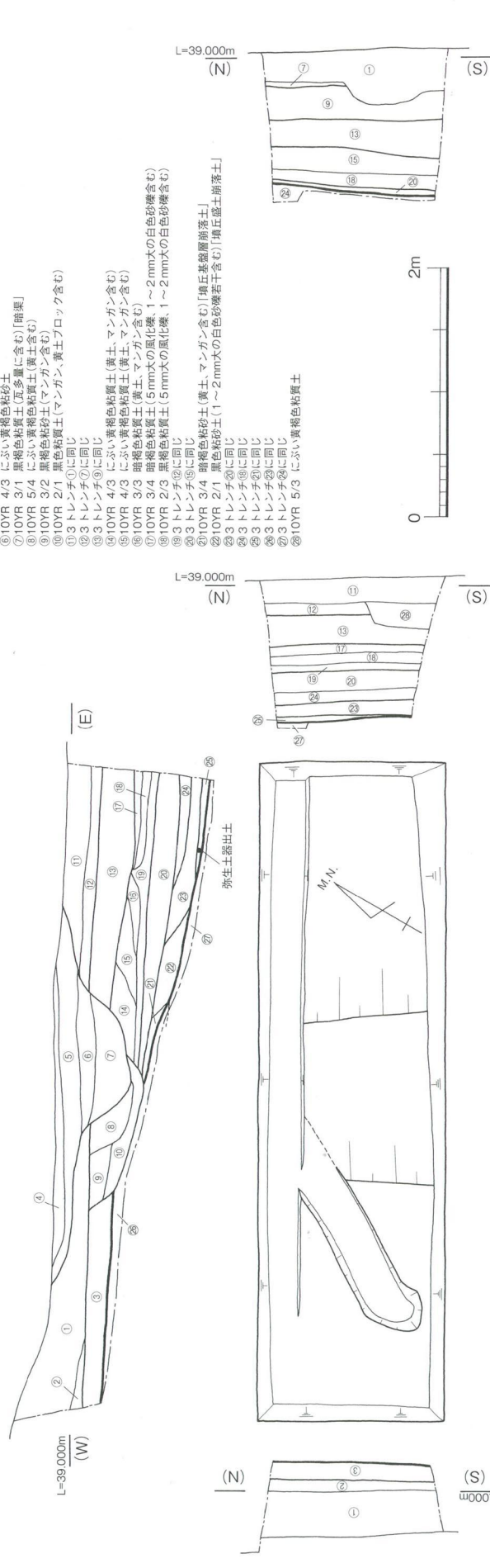
(W)

- ①10YR 3/1 黒褐色粘質土(炭、近現代の瓦、土器含む)
- ②10YR 5/3 にぶい黄褐色粘砂土(炭泥)
- ③10YR 3/4 暗褐色粘砂土(黄土プロック泥)
- ④10YR 3/4 暗褐色粘砂土(黄土プロック泥)
- ⑤10YR 2/3 黒褐色粘砂土(炭泥)
- ⑥10YR 5/4 にぶい黄褐色粘質土
- ⑦10YR 4/2 灰黄褐色粘質土(1~3mm次の白色砂礫混入の白色砂礫泥)「耕作土」
- ⑧10YR 3/2 黒褐色粘砂土(黄土プロック、1~2mm次の白色砂礫混入)「耕作土」
- ⑨10YR 3/1 黒褐色粘土「床土」
- ⑩10YR 3/2 黒褐色粘質土(マンガンを含む)「耕作土」
- ⑪10YR 2/1 黒粘土(2~3mm次の白色砂礫若干含む)
- ⑫10YR 7/1 黒色粘土(緑灰砂を含む)
- ⑬10YR 5/8 黄褐色粘土「基盤層」
- ⑭10YR 5/6 黄褐色粘質土「基盤層」
- ⑮10YR 5/3 にぶい黄褐色粘質土「基盤層」
- ⑯SY 3/2 灰オリーブ粘砂土(1cm次の礫、黄土含む)「基盤層」

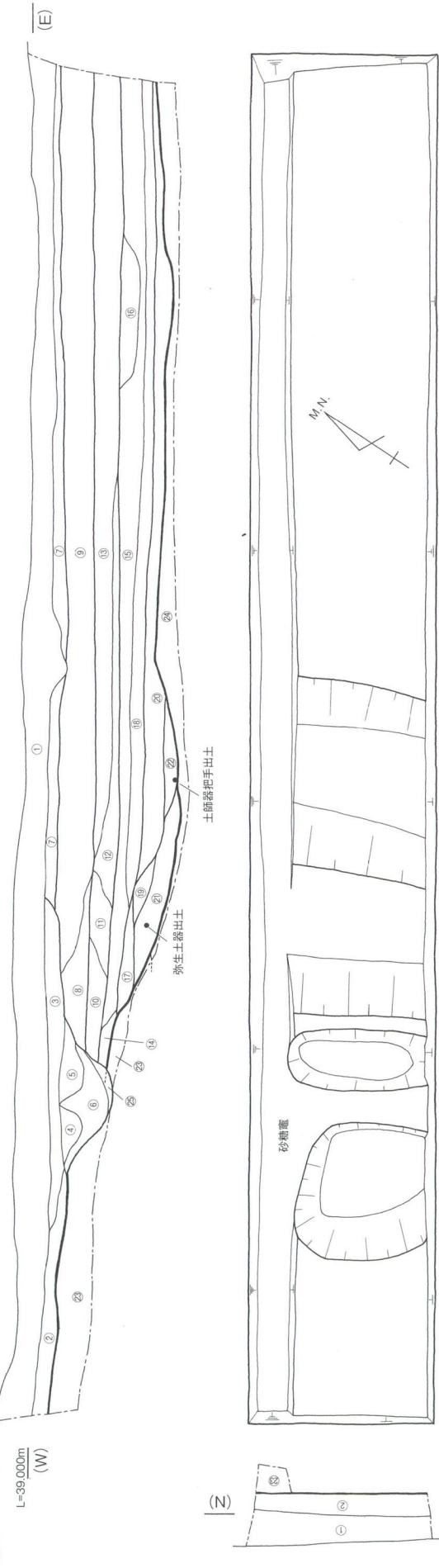


第19図 第1・4トレンチ調査区平・断面図(1:50)

第3トレンチ



第3トレンチ

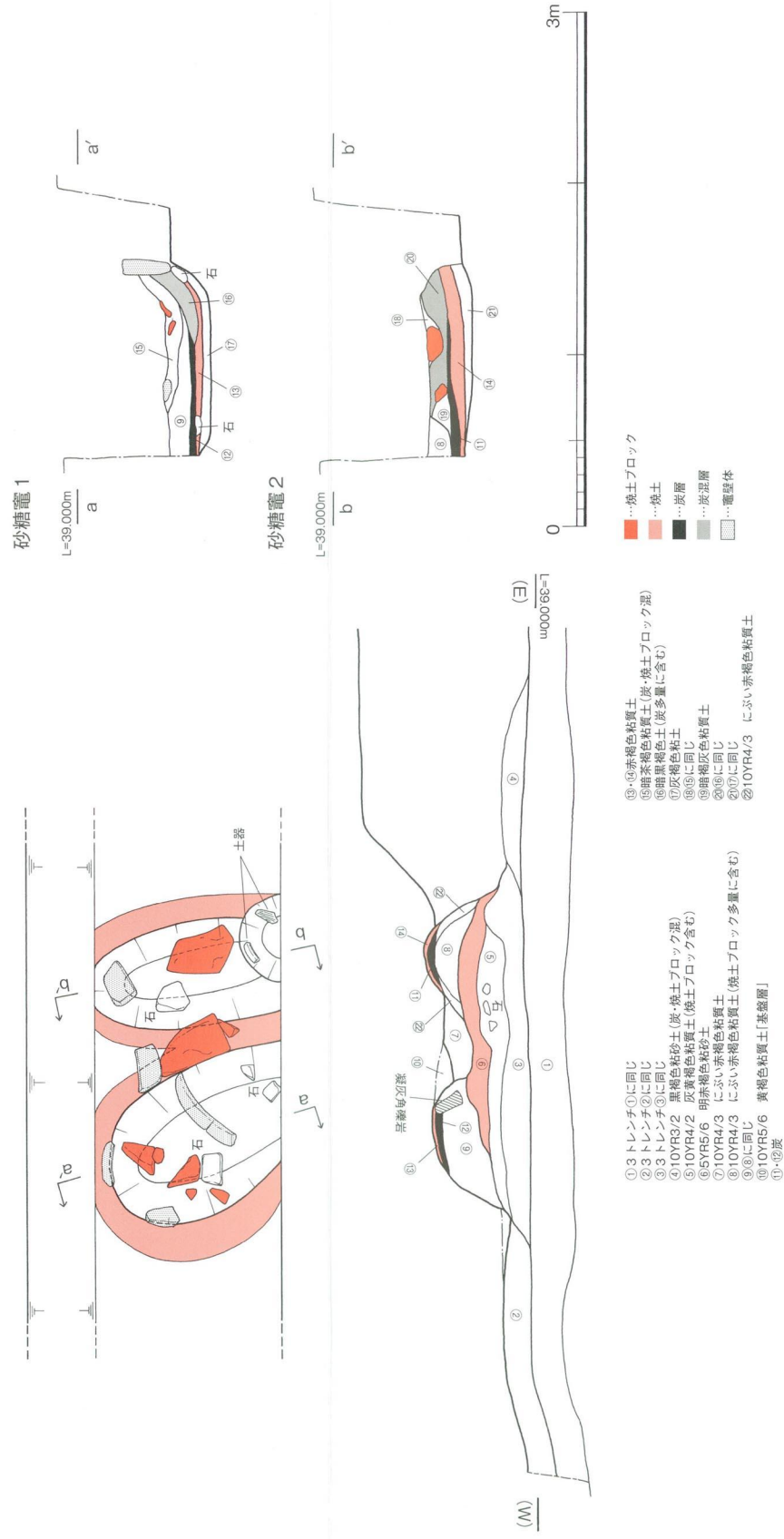


- ①10YR 3/3 暗褐色粘質土(近現代の瓦・土器多量に含む)[黄土]
- ②10YR 4/4 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ③10YR 3/1 黄褐色粘質土(黄土・炭層)
- ④10YR 4/3 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑤10YR 4/3 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑥10YR 4/3 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑦10YR 5/4 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑧10YR 3/2 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑨10YR 3/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑩10YR 2/3 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑪10YR 4/6 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑫10YR 3/2 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑬10YR 4/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑭10YR 4/2 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑮10YR 2/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑯10YR 3/4 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑰10YR 1/7/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑱10YR 1/7/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑲7.5GY 5/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑳10YR 3/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)

- ②410YR 4/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ③10YR 4/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ④10YR 4/2 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑤10YR 2/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑥10YR 3/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑦10YR 2/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑧10YR 1/7/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑨10YR 1/7/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑩7.5GY 5/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑪10YR 3/1 暗褐色粘質土(黄土・炭層)

第20図 第3・3'トレンチ調査区平・断面図(1:50)

第21図 砂糖竈検出状況・断面図(1:40)



- ①3トレンチ①と同じ
- ②3トレンチ②と同じ
- ③3トレンチ③と同じ
- ④10YR3/2 黄褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑤10YR4/2 黄褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑥5YR5/6 黄褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑦10YR4/3 暗褐色粘質土(黄土・炭層)
- ⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
- ⑳10YR5/6 黄褐色粘質土(黄土・炭層)
- ㉑⑩炭層

- ①赤褐色粘質土
- ②黄褐色粘質土(黄土・炭層)
- ③黄褐色粘質土(黄土・炭層)
- ④黄土
- ⑤黄土
- ⑥黄土
- ⑦黄土
- ⑧黄土
- ⑨黄土
- ⑩黄土
- ⑪黄土
- ⑫黄土
- ⑬黄土
- ⑭黄土
- ⑮黄土
- ⑯黄土
- ⑰黄土
- ⑱黄土
- ⑲黄土
- ⑳黄土
- ㉑黄土
- ㉒黄土
- ㉓黄土
- ㉔黄土
- ㉕黄土
- ㉖黄土
- ㉗黄土
- ㉘黄土
- ㉙黄土
- ㉚黄土
- ㉛黄土
- ㉜黄土
- ㉝黄土
- ㉞黄土
- ㉟黄土
- ㊱黄土
- ㊲黄土
- ㊳黄土
- ㊴黄土
- ㊵黄土
- ㊶黄土
- ㊷黄土
- ㊸黄土
- ㊹黄土
- ㊺黄土

丘裾の傾斜より外側に溝状遺構が形成されている。溝の幅は2.6m、深さは0.2mを測る。埋土は、墳丘裾側は墳丘盛土崩落土が堆積しており(土層㉑)、東側は黒色粘土の溝堆積土(土層㉒)である。土層㉒からは、第5層と同じく底部より大量の木片が検出された。また土師器把手が出土している。

第3'トレンチ トレンチの規模は、1.5×5.5mを測る。第3トレンチで墳丘部分に砂糖竈が構築されていたため、墳丘裾のオリジナルの状況を把握すべく北接に設定した。土層の堆積状況は、南側の第3トレンチとはほぼ同様である、6層に大別される。

第1層の耕作土・床土は、土層⑪・⑫が該当する。第1層上面では近・現代の土坑(土層④・⑤)、暗渠(土層⑥・⑦)を検出した。ともに土器・瓦を大量に含む。

第2層の近代以前の堆積土は、土層⑬～⑰が対応する。また墳丘裾部分には土坑状の攪乱があり(土層⑧～⑩)、埋土には基盤層由来の黄土ブロックが混じる。

第3層は、第2層前段階の堆積土である。土層⑳・㉑が該当する。

第4層の墳丘崩落土は、墳丘基盤層崩落土に土層㉒が、墳丘盛土崩落土に土層㉓・㉔が対応する。土層㉒からは、弥生土器破片が出土した。

第5層周庭基盤層直上堆積土には、土層㉕が該当する。

第6層の基盤層は、㉖・㉗が該当する。基盤層は、トレンチ西端から3.2mの地点で緩やかに東へ下る。墳丘裾の傾斜であると推定される。

第4トレンチ トレンチの規模は、1.5×6.5mを測る。土層は、6層に大別される。

第1層は、表土である。土層①が該当する。黒色粘質土で炭、近・現代の土器・瓦を含む。

第2層は、耕作土・床土で、土層⑧～⑩が該当する。水平に堆積している。

第3層は、トレンチ南端墳丘基盤層上の堆積土である。土層②～⑦が対応する。現地形の墳丘円周に巡る土手部分に位置しており、第2層の耕作土・床土整地段階の土手構築土と推定される。下層の④・⑥は基盤層由来の土層であり、墳丘基盤層を掘削して整地した可能性が高い。

第4層は、基盤層直上堆積土である。土層⑪が該当する。黒色粘土で墳丘裾からトレンチ北端にかけて水平に堆積する。

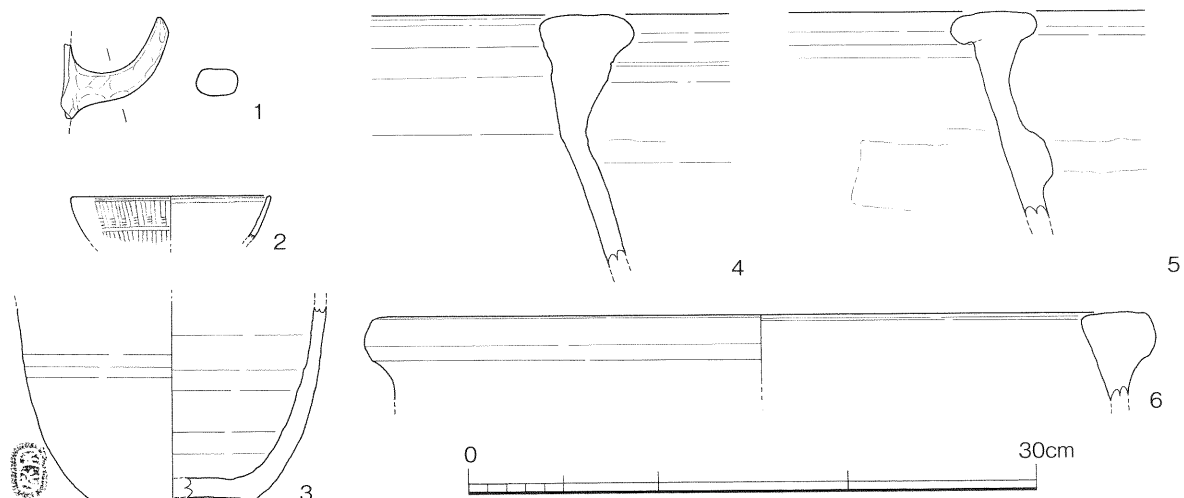
第5層は、墳丘裾溝状遺構埋土である。土層⑫が該当する。溝の幅は1.8m、深さは0.12mを測る。埋土は黒色粘土である。

第6層は、基盤層である。土層⑬～⑰が該当する。トレンチ南墳丘側は黄褐粘土(土層⑬～⑮)、墳丘裾から北にかけては灰オリーブ細砂土(土層⑰)となる。基盤層はトレンチ南端から北へ1.6mの地点で北へ下方に傾斜する。

②遺物

各トレンチから少量の遺物が出土したが大部分は表土・耕作土および近・現代の土坑、溝から出土した近世以降の瓦・土器類である。これらのうち、重要なもののみを図化した。

墳丘裾出土遺物 (1)は第3トレンチ墳丘裾溝状遺構(土層㉒)より出土した、土師器把手である。牛角状の形態をしており、最大幅は体部との接合部分で3.0cmを測る。先端部は先細りになる。断面形は角が丸みを帯びた方形を呈す。把手部のみ残存しており、体部は存在していないが大きさ・形状から判断してコップ形椀に取り付くと推定される。胎土は精緻で、色調は淡橙褐色である。類似した個体が香川県坂出市雄山5・6号墳から出土している(松本・宮崎2000)。雄山5・



第22図 第3トレンチ出土遺物実測図(1:4)

6号墳の年代は須恵器田辺編年でTK10に相当することから、今回の調査で出土した土師器把手もほぼ同年代とみて差し支えないと考えられる。

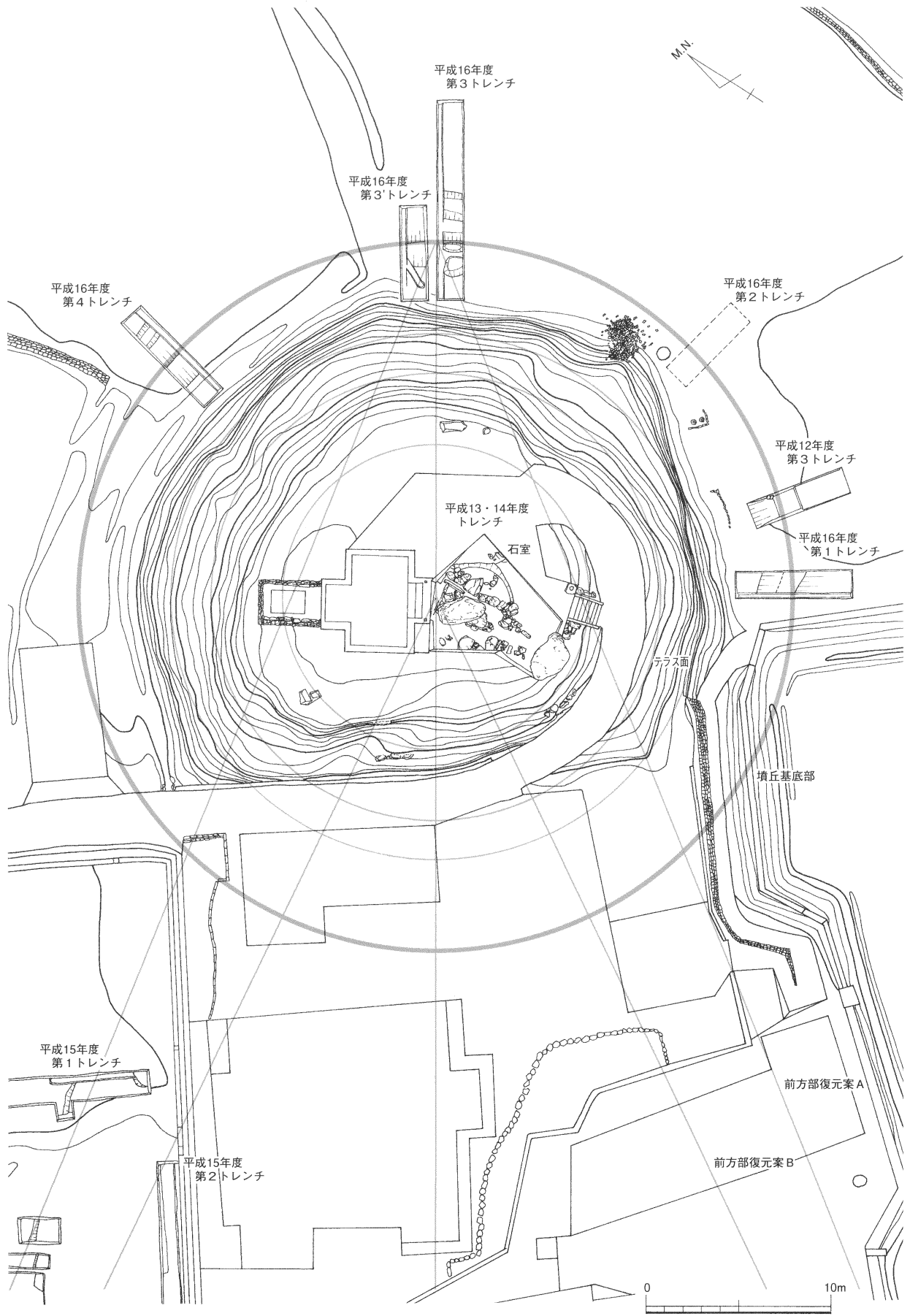
また、墳丘裾溝状遺構に流出した墳丘盛土崩落土(第3トレンチ土層⑳・第3トレンチ土層㉔)からは、それぞれ土器片が出土した。土師質で灰褐色を呈し、砂粒を多く含み胎土が粗いことから、弥生土器であると考えられる。器壁は著しく摩滅しており細片であることから、二次的な埋没に伴うものと推測される。

砂糖竈出土遺物 遺物の取り上げは上層の段階で遺構が2基に分かれると認識する以前に検出したものもある。(2)は、肥前磁器碗(小広東碗)である。染め付けが施されている。年代は、1770～1810年代である。(3)は、土師質鉢である。底部に「正近」の刻印が押印されている。(4)は、土師質甕である。砂糖竈1より出土した。口縁端部に肥厚し、下方にくびれがある。(5)は、土師質甕である。砂糖竈2より出土した。口縁端部は肥厚し、体部に幅2.0cmの突帯が巡る。(6)は、土師質甕である。砂糖竈2に伴うピットより出土した。直径41.0cmを測る。口縁端部は肥厚する凶化したものの他に、瓦・板石を検出した。板石は埋土中に崩落していたものが大半であったが、一部奥壁・側壁に据付けた状態で検出された。菊塚古墳平成12年度調査第1トレンチ、原間遺跡でみられる砂糖竈に類例がある(笹川2001、片桐2002、角南2003)。なお、石材の材質は凝灰角礫岩で菊塚古墳玄室出土の石屋形の石材と一致する。古墳石屋形の石材を転用していた可能性も考えられる。

第6節 まとめ

①各トレンチの検討

第3・3トレンチと第4トレンチの調査によって墳丘裾に溝状遺構が存在することが明らかになった。溝の規模は、幅は最大で2.2mであることから、周濠とは言い難い。またその上層には粘土層が墳丘裾からトレンチ端部にかけて水平に堆積する。同じく下層の基盤層も平坦な面を呈している。第3トレンチで確認したところ、平坦面は4.6m続く。周濠のような大きな溝状遺



第23図 後円部墳丘復元案(1 : 300)

構は検出されなかった。以上の状況から、基盤層の平坦面は周庭で、墳丘裾に小規模な溝状遺構を巡らせたと解釈できる。ただし前方部墳丘南端部分は、平成15年度の調査(第9トレンチ)で幅5.5mの溝状遺構を検出し、周濠であると推定している。また側端部(平成15年度第1トレンチ)や後円部南側(平成16年度第1トレンチ)では確認できなかった。同じ墳丘のなかでも場所や地形によって墳丘裾のありかたが異なるのか、後世の削平を受け残存していない部分があるのか、さらに調査を重ねて検討する必要がある。

②後円部墳丘復元案

平成15年度の報告書において、昨年度までの調査成果をもとに墳丘・周濠・周堤の復元案を提示している。本年度の調査では、後円部墳丘裾の確定を主眼に調査を実施した。そこで、今回は後円部墳丘の復元を中心に検討を行う。

第1～4トレンチで検出した基盤層の落ちのラインを結ぶと、現在の裾部より2m前後外側のラインが墳丘基底部と考えられる。玄室奥壁中心部を基点に直径約39mの円周を描く。これは、前年度提示していた墳丘復元案と一致する。ただし、落ちのライン自体が不明確なこともあり、基盤層直上堆積の粘土層の始まる地点を一応の目安とし、復元を試みた。

以上のように後円部墳丘裾の範囲を凡そ把握することが出来た。これまでの墳丘測量やトレンチ調査により復元した復元案とほぼ合致する結果となっている。また今回の調査では、墳丘裾部分で溝状遺構を検出しており、前方部端部の溝状遺構との関係、周濠・周堤の有無など検討課題が残る。今後はくびれ部の調査も含めて、正確な墳丘復元を試みる予定である。

付章 1 平成14年度出土遺物

平成14年度調査で石室内から出土した遺物のうち、整理作業が終了したものについて報告する。今回報告するのは土師器21点(高坏18点、埴2点、コップ形土製品1点)、須恵器11点(甗3点、台付壺1点、甕5点、横瓶2点)、耳環8点、玉類127点である。

第1節 土師器

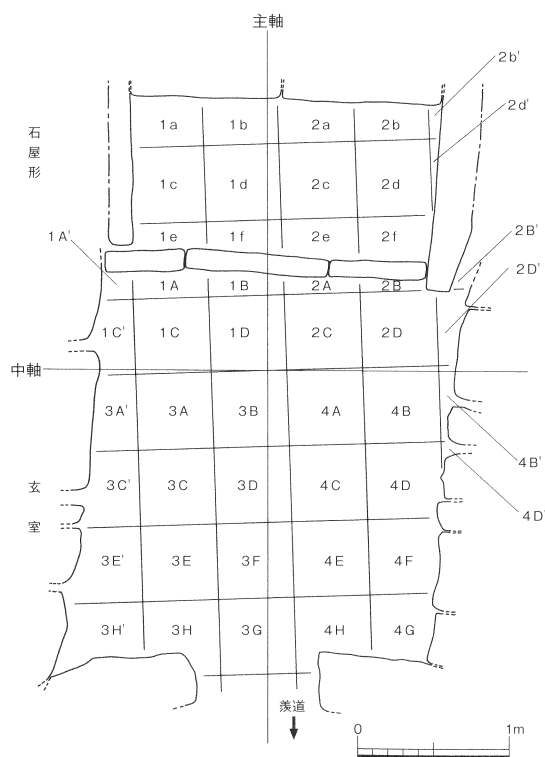
【高坏】 土師器高坏は全て玄室内から出土した。接合検討の結果、18点の高坏を確認した(第25・26図)。いずれも焼成がやや不良である上、石室床面は攪乱を受けていたため、器壁は磨滅・剥離しているものが多く調整が不明瞭な部分も多い。色調に若干の差異はあるが、胎土に含まれる砂粒などは同じであり、現時点では同一地域で生産されたと考える。

坏部・脚部の調整方法は、いずれの個体も幅0.4~0.8cm、長さ1.4~2.6cmの板ナデ調整を内外面ともに施す。坏部外面は基本的に横方向の板ナデで調整され、個体によっては縦方向の板ナデもみられ、複数の調整が認められる。坏部外面の端部付近は、一部で横方向の板ナデを施す。坏部内面には、主に口縁部で器面に沿う横方向の板ナデと、口縁部から底部に向かう縦方向の板ナデの2種類の調整を施す。脚部は外面が板ナデで調整する。脚部内面は(14)・(16)で縦方向の板ナデを施すが、主に横方向の板ナデで調整する。調整の方向には若干の違いがみられるものの調整は坏部、脚部ともに板ナデ調整が用いられ、工具の木目の痕跡が認められる。

坏部と脚部の接合方法は2種類確認できる。接合方法は(11)の断面観察により、粘土を坏部と脚部の継ぎ目に補っていることがわかる。同様に(2)・(5)・(7)・(17)は、分割成形した後、接合部に粘土を充填し、不定方向の板ナデと指オサエにより接合、調整したと考える。その他の個体は坏部と脚部を別作りし、不定方向の板ナデと指オサエにより搾り出して接合している。

口径は13.8~16.8cm(平均15.8cm)、器高は12.4~14.2cm(平均12.9cm)を測る。坏部の形態がおおむね確認できるものが18点中14点あり、口縁部の形態から2種類(A類・B類)に分類できる。

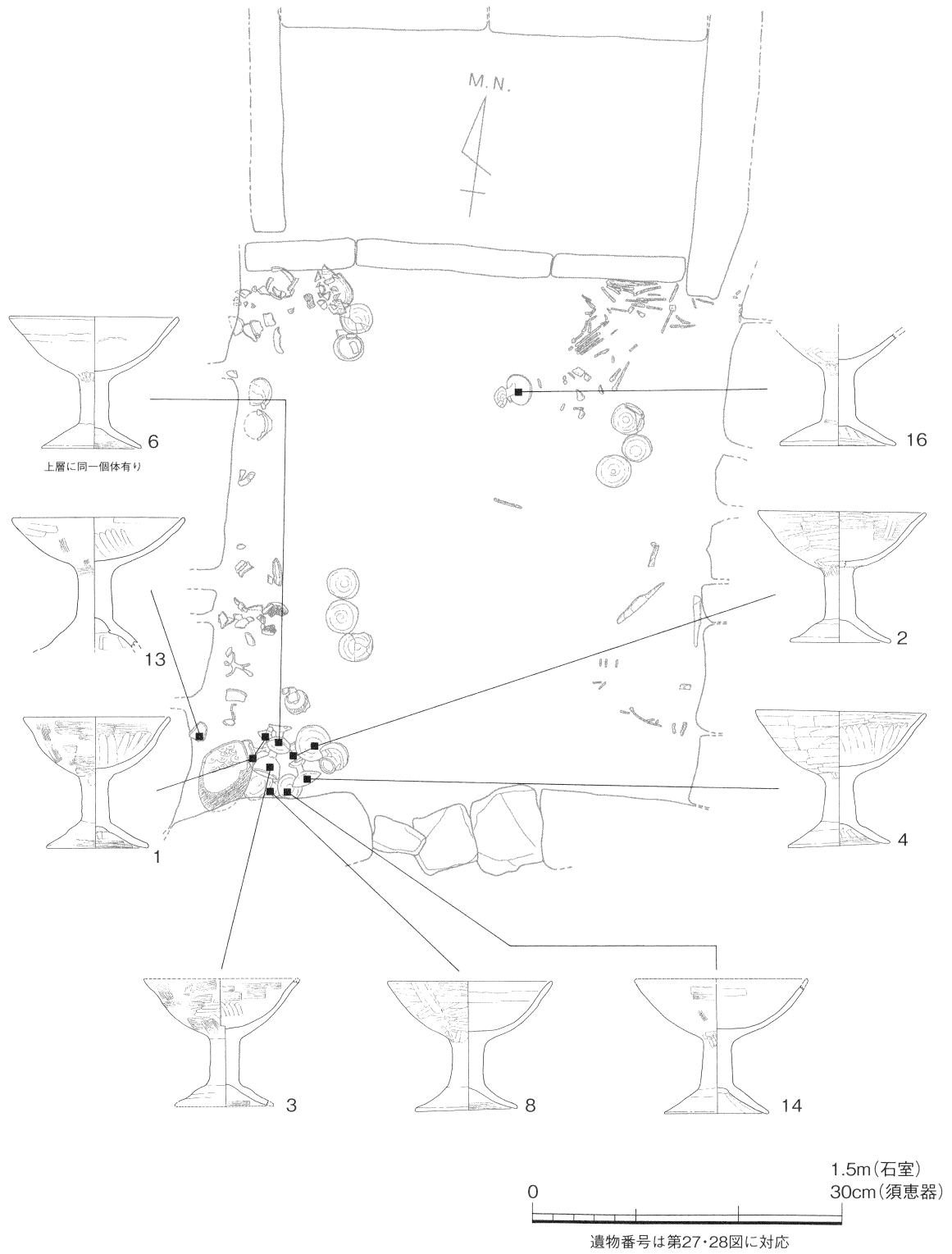
A類(1)~(7)は、口縁端部付近をやや外反させたもので、口径13.8~16.4cm(平均15.5cm)、器高12.4~12.9cm(平均12.7cm)を測る。(1)~(4)は玄室床面直上、(5)・(7)は玄室床面上層、(6)は玄室床面直上と上層で出土している。坏部の形態は、底部から内弯気味に立ち上がり碗形を呈し、口縁部は端部付近でやや外反するもの



第24図 主体部遺物取り上げ地区模式図



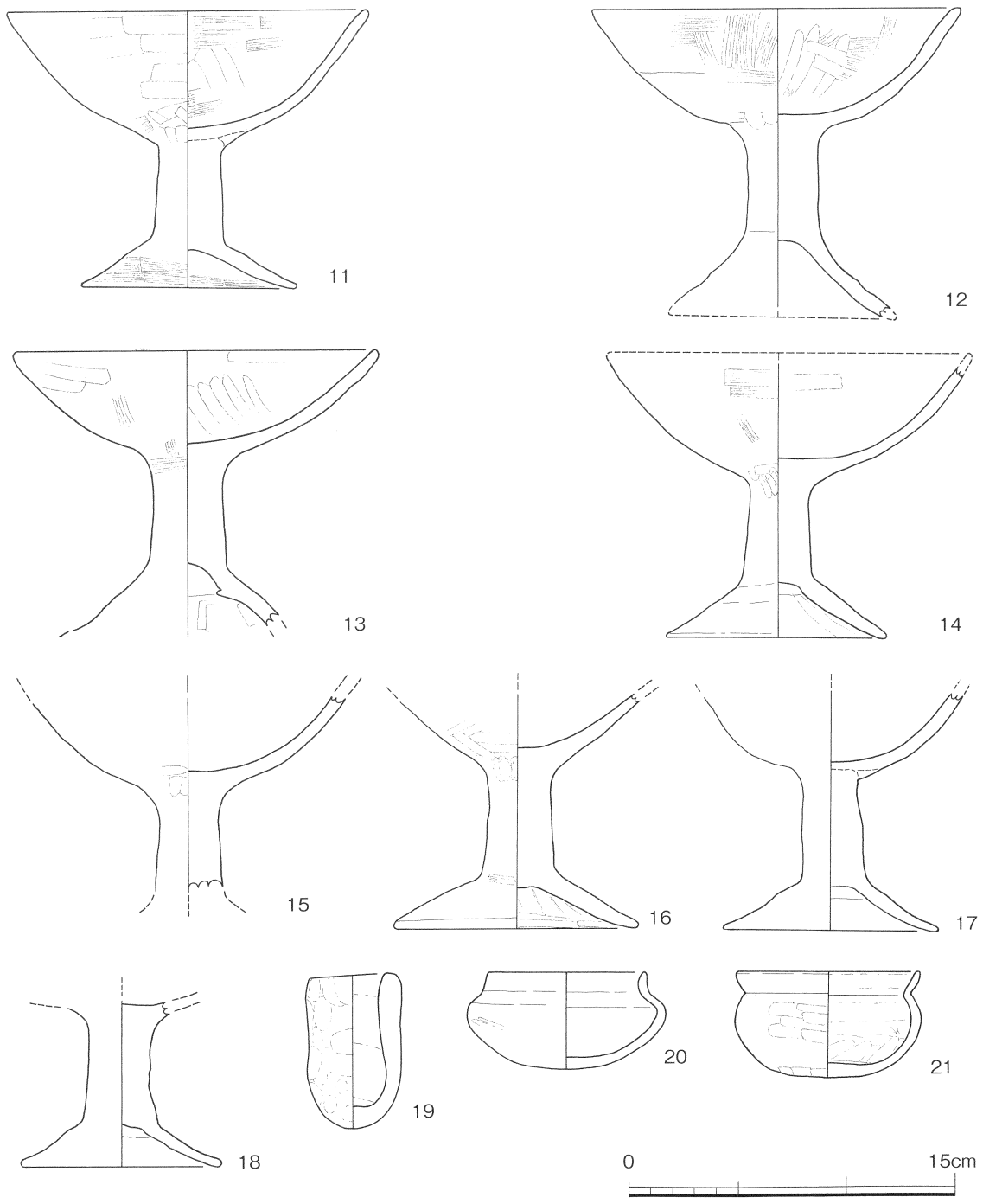
第25図 主体部土師器出土状況図①(床面上層)



第26図 主体部土師器出土状況図②(床面直上)



第27図 主体部出土土師器実測図①(1 : 3)



第28図 主体部出土土師器実測図②(1 : 3)

(1)と、緩やかに外側に開くもの(2)~(7)に細分できる。(2)~(7)は口縁部はやや外反し、端部は丸く収める。脚部の形態は脚柱部は直線的で短く、(1)~(3)の脚裾部は端部付近でやや外反し、他は直線的に外方に開く。脚端部は口縁端部と同様に丸く収める。(1)~(3)・(6)は、外面が不定方向の板ナデ調整を行っているが、(4)は横方向の板ナデ調整である。(5)の坏部外面には板ナデの調整とは異なり、粘土を意図的に継ぎ足したような痕跡がみられる。(7)は磨滅・剥離のため器壁が薄い。脚端部は丸みがとれ、端面ができています。

B類(8)~(14)は、口縁端部付近が直線的に立ち上がるもので、口径15.2~16.8cm(平均16.0cm)、

第1表 出土土師器観察表①

()内の数値は復元・残存の法量

遺物番号	出土層位	器種	法量(cm)・胎土・焼成・色調・残存率	特徴	備考	取り上げ番号
1	玄室床面直上	高坏	口径13.8/脚基部径2.8/脚端部径9.6/器高12.7/胎土：やや粗/直径1～4mmの白色粒・石英・雲母を含む/焼成：良好/色調(外面)浅赤橙(内面)浅黄橙(断面)赤褐/残存率：口縁部60%・脚端部80%	坏部は緩やかに立ち上がり、さらに端部は外反する。脚部は端部に向かい小さな段を有する。脚部内面の紋りは強い。坏部内面は口縁部付近は横方向、中位から底部は縦方向の板ナデ調整。坏部外面は不定方向の板ナデ調整。脚部内面は横方向の板ナデ、端部付近は横ナデ調整。		775・797・3060
2	玄室床面直上	高坏	口径15.9/脚基部径3.4/脚端部径9.5/器高12.6/胎土：やや粗/直径1～3mmの白色粒・石英・雲母を含む/焼成：良好/色調(外面)赤橙(内面)浅橙(断面)赤褐/残存率：口縁部80%・脚端部90%	坏底部から口縁部まで緩やかな屈曲で上方にのび、端部はやや外反する。坏部外面は不定方向の板ナデ、内面は口縁部付近のみ板ナデ調整を確認。脚部は端部に向けて小さな段をもつ。脚部内面の紋りは強い。脚部は磨滅のため、調整不明瞭。坏部と脚部の接合痕あり。坏部内面に空洞部分が見られ、胎土に混ざった植物質の燃失か。	内・外面に少量の灰色付着物。坏部口縁と脚端部にわずかに黒斑がみられる。	772・777・3057
3	玄室床面直上	高坏	口径(15.2) /脚基部径3.3/脚端部径(9.5) /器高(12.1) /胎土：密/直径1～3mmの白色粒・石英・雲母を多く含む/焼成：良好/色調(外面)灰褐(内面)灰褐(断面)灰褐/残存率：口縁部90%・脚端部60%	坏部は口縁部付近で外反する。坏部・脚部ともに端部は欠損。坏部外面は横方向(一部縦方向)の板ナデ調整、器面に工具痕残存。坏部内面は口縁部付近は横方向、底部付近は縦方向の板ナデ調整。脚部は端部に向かって段を設ける。脚部は調整は磨滅のため、内面で板ナデが一部確認できるのみ。脚部内面の紋りは強く、坏部と脚部の接合は不定方向の板ナデ。	内・外面に灰色の付着物。ほぼ完形で出土。	793
4	玄室床面直上	高坏	口径16.3/脚基部径3.7/脚端部径9.7/器高12.9/胎土：密/直径1～3mmの白色粒・石英・雲母を含む/焼成：良好/色調(外面)赤褐(内面)浅黄橙(断面)赤褐/残存率：口縁部80%・脚端部80%	坏部は口縁部付近でややすぼまる。脚部は基部が一部凹み、直線的に開き、端部付近で肥厚する。坏部内面は口縁は横方向、中位から底部にかけては縦方向の板ナデで器面を調整する。外面は同一方向の板ナデで整える。脚部内面の紋りは弱く、内面は板ナデで調整する。坏部と脚柱部の接合は確認できず。	黒斑が坏部の約25%にみられ、内・外面に暗灰色の付着物。	778・3061
5	玄室床面上層	高坏	口径15.8/脚基部径3.0/脚端部径不明/器高(11.7) /胎土：やや粗/直径1～4mmの白色粒・石英・雲母を含む/焼成：良好/色調(外面)赤褐(内面)浅橙(断面)赤褐/残存率：口縁部50%	坏部は底部付近で肥厚し、口縁部付近でわずかに屈曲し外反する。坏部と脚部の接合は器面磨滅のため不明瞭。坏部内面は底部付近に縦方向、口縁部付近は横方向の板ナデ調整。坏部外面は板ナデ調整だが磨滅のため一部のみ確認。坏部中位に粘土を付着した痕跡。脚部と坏部の接合は確認できず。脚部内面にみられる紋りは弱い。	内・外面ともに灰白色の付着物。	278・432
6	玄室床面上層直上	高坏	口径16.4/脚基部径3.1/脚端部径9.5/器高12.7/胎土：やや粗/直径1～3mmの白色粒・石英・雲母を含む/焼成：良好/色調(外面)浅赤橙(内面)赤褐(断面)浅赤橙/残存率：口縁部45%・脚端部90%	坏部は上方に開き、口縁部でわずかに屈曲する。脚部はハの字状に開き、端部は丸く収める。脚部内面の紋りは強い。坏部・脚部ともに器面が磨滅しているため、調整は確認できない。坏部と脚部の接合痕が確認できる。	内・外面に少量の灰色の付着物。	44・70・697・775・3054・3056・3097
7	玄室床面上層	高坏	口径15.5/脚基部径3.4/脚端部径9.5/器高12.7/胎土：やや粗/直径1～3mmの白色粒・石英・雲母を含む/焼成：良好/色調(外面)赤褐(内面)赤褐(断面)赤褐/残存率：口縁部40%・脚端部80%	坏部と脚部が別であったが、焼成および胎土より同一個体と判断。坏部は緩やかに立ち上がり、口縁部付近でわずかに外反する。坏部の器壁は本来の厚さではなく、磨滅した結果。脚部は緩やかに外側に開き、端部はやや肥厚する。脚部内面の紋りは弱い。器面磨滅のため、坏部・脚部の調整および脚部と坏部の接合は確認できず。	坏部外面の一部は浅黄橙を呈し、黒く焼成。	44・85・3104
8	玄室床面直上	高坏	口径15.7/脚基部径3.8/脚端部径9.6/器高12.5/胎土：やや粗/直径1～4mmの白色粒・石英・雲母を含む/焼成：良好/色調(外面)赤褐(内面)浅赤橙(断面)赤褐/残存率：口縁部90%・脚端部20%	坏部は底部の面が広く、やや急な立ち上がりで端部付近ですぼまる。脚端部も同様に丸く収め、脚部はわずかに外反する。坏部外面は口縁部から中位にかけて横方向の板ナデ調整。坏部・脚部ともに内面は磨滅のため、調整は確認できず。坏部と脚部の接合の粘土圧着痕あり。不定方向の板ナデ調整。脚部内面にみられる紋りは弱い。	内・外面ともに灰白色の付着物。	794・795
9	玄室床面上層	高坏	口径15.2/脚基部径3.2/脚端部径9.3/器高12.8/胎土：やや粗/直径1～3mmの白色粒・石英を含む/焼成：やや不良/色調(外面)浅黄橙(内面)浅黄橙(断面)赤褐/残存率：口縁部20%・脚端部70%	坏部と脚部が別であったが胎土と焼成から同一個体と判断。坏部は端部付近で内傾する。坏部内面は一部板ナデ調整、外面は不定方向の板ナデ調整。坏部と脚柱部の接合痕は明瞭に確認できないが、接合部付近に凹線が巡るため、指ナデおよび板ナデにより接合。脚部は直口気味に下がる。脚部内面の指オサエは強い。脚部内・外面ともに磨滅により調整は確認できず。	外面に灰色の付着物。坏部と脚部が一部赤褐色を呈す。	7・23・43・188・195・307
10	玄室床面上層	高坏	口径15.6/脚基部径2.7/脚端部径9.9/器高13.1/胎土：やや粗/直径1～3mmの白色粒・石英・雲母を多く含む/焼成：やや不良/色調(外面)橙(内面)浅黄橙(断面)浅橙/残存率：口縁部30%・脚端部50%	坏部から口縁部は緩やかに直口する。口縁端部は欠損。坏部と脚柱部の接合は指オサエ。坏部内面は一部縦方向の板ナデ調整。脚部は緩やかにハの字状に外反する。脚部内面の紋りは弱い。脚部は内・外面とも磨滅しているため、調整は不明瞭。	内面に灰色の付着物。一部黒く焼成。全体的に磨滅。	178
11	玄室床面上層	高坏	口径16.4/脚基部径3.6/脚端部径9.8/器高12.8/胎土：密/直径1～3mmの白色粒・石英・雲母を含む/焼成：良好/色調(外面)赤褐(内面)浅黄橙(断面)赤褐/残存率：口縁部30%・脚端部20%	坏部と脚部が別であったが、焼成と胎土より同一個体と判断。坏部は口縁部付近でわずかに内傾する。坏部外面は横方向、内面は口縁部と底部は横方向、中位は縦方向の板ナデ調整。脚部は端部ですぼまる。脚部は内・外面共に横方向の板ナデ調整。坏部と脚部の接合は指オサエと板ナデによって接合および器面の調整を施す。	内・外面に少量の灰色の付着物。	238・244・499

第2表 出土土師器観察表②

()内の数値は復元・残存の法量

遺物番号	出土層位	器種	法量(cm)・胎土・焼成・色調・残存率	特 徴	備 考	取り上げ番号
12	玄室床面上層	高坏	口径16.8/脚基部径3.5/脚端部径10.4/器高(14.2)/胎土:やや粗/直径1~3mmの白色粒・石英・雲母を多く含む/焼成:良好/色調(外面)浅黄橙(内面)浅黄橙(断面)赤褐/残存率:口縁部45%・脚端部50%	坏底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。脚端部はわずかに欠損し、端部付近にわずかな凹みを有する。脚部内面の絞りは強い。坏部・脚部ともに磨滅。坏部内面・外面ともに不定方向の板ナデ調整。坏底部と脚部は接合痕がみられる。	内・外面ともに灰色の付着物。坏部・脚部ともに一部赤褐色を呈する。	60・168・635・3028
13	玄室床面直上	高坏	口径16.4/脚基部径3.5/脚端部径10.0/器高(12.1)/胎土:やや粗/直径1~4mmの白色粒・石英を含む/焼成:良好/色調(外面)赤褐(内面)赤褐(断面)赤褐/残存率:口縁部60%・脚端部90%	坏部は外上方に開く。脚部はやや急に開き、脚端部は欠損している。坏部内面は口縁部付近は横方向、口縁部から底部にかけては縦方向の板ナデで調整され、外面は不定方向の板ナデで調整されるが、磨滅により一部しか確認できない。脚部は内面のみ横方向の板ナデがみられる。	内・外面に少量の灰色の付着物。	754
14	玄室床面直上	高坏	口径(16.5)/脚基部径3.2/脚端部径10.0/器高(12.5)/胎土:やや粗/直径1~3mmの白色粒・石英・雲母を含む/焼成:良好/色調(外面)赤褐(内面)淡橙(断面)明赤褐/残存率:口縁部50%・脚端部90%	坏部は直口気味に立ち上がり、端部はわずかに欠損している。脚部は下方に開く。脚部内面の絞りは強く、中心から外側に向かうナデが確認できる。坏部は内面・外面共に横方向の板ナデ、坏底部付近の縦方向の板ナデが一部確認できる。脚部と坏部は指オサエと板ナデにより接合する。		794・795・3060・3086
15	玄室床面上層	高坏	口径不明/脚基部径不明/脚端部径不明/器高(9.1)/胎土:やや粗/直径1~3mmの白色粒・石英・雲母を含む/焼成:やや不良/色調(外面)浅橙(内面)赤褐(断面)赤褐/残存率:不明	坏部中位から脚柱部までが残存。内・外面ともに磨滅。調整は不明瞭。坏部と脚部の接合は指オサエと板ナデによって器面を調整する。		462
16	玄室床面直上	高坏	口径不明/脚基部径3.6/脚端部径11.1/器高(10.9)/胎土:やや粗/直径1~4mmの白色粒・石英・雲母を含む/焼成:良好/色調(外面)赤褐(内面)淡橙(断面)赤褐/残存率:脚端部80%	坏底部から脚端部にかけて残存。坏部はやや急な立ち上がりが見られる。脚部は端部にかけて緩やかに開き、脚裾部はやや厚い。脚部内面は端部付近で横方向、脚底部から口縁部にかけて縦方向の板ナデ調整。脚部と坏部は指オサエと不定方向の板ナデにより接合し、調整する。	内・外面に少量の灰色の付着物。	701
17	玄室床面上層	高坏	口径不明/脚基部径2.8/脚端部径9.9/器高(10.9)/胎土:やや粗/直径1~4mmの白色粒・石英・雲母を含む/焼成:やや不良/色調(外面)赤褐(内面)赤褐(断面)赤褐/残存率:脚端部70%	坏底部から脚端部にかけて残存。坏部は内湾気味に上方にのびる。脚部は端部付近でわずかに外傾する。坏部・脚部共に内・外面が磨滅のため、調整は確認できず。		71・293・403
18	玄室床面上層	高坏	口径不明/脚基部径3.6/脚端部径9.2/器高(7.6)/胎土:やや粗/直径1~3mmの白色粒・石英・雲母を含む/焼成:やや不良/色調(外面)浅黄橙(内面)浅黄橙(断面)浅黄橙/残存率:脚端部60%	坏底部から脚端部までが残存。脚部は緩やかに下方に開き、脚端部は丸く収める。脚部内面に不定方向の幅約3mm、長さ約2cmの凹線が4ヶ所みられる。内・外面共に器面が磨滅しているため、調整は不明。	内・外面に少量の灰色の付着物。内・外面一部赤褐色を呈す。脚端部の一部が黒く焼成。	31・3024・3060
19	玄室床面上層	コップ形土製品	口径4.0/器高7.1/胎土:密/直径1mmの長石・石英・黒雲母を少量含む/焼成:良好/色調(外面)灰黄(内面)浅黄(断面)明赤褐/残存率:体部90%	外面は指オサエ、内面調整は指ナデであるが口縁部には指オサエが残存。器壁は底部が厚く、立ち上がりの部分はやや薄くなるものの、口縁部に近づくにしたがって再び厚くなり、口縁端部はやや薄くなる。口縁部内面は開き気味。口縁端部は平坦で、底部の形態は丸い。	外面1箇所に縦長の黒斑がみられる。内面と口縁部の一部に朱が付着。	27・193・602・3032・3036・3082
20	玄室床面上層	埴	口径7.5/器高3.75/胎土:密/直径1mm以下の赤色粒・白色粒を含む/焼成:良好/色調(外面)黄橙(内面)黄橙(断面)黄橙/残存率:完形	底部は体部にかけて緩やかに立ち上がり、体部中ほどよりやや上で屈曲し肩を成形し、やや内傾しながら立ち上がり、口縁部を成形。(21)よりも扁平な体部。外面頭・口縁部には横ナデ調整、体部は板ナデ調整。内面底・体部はナデ調整。	内部より土製丸玉38点出土。	
21	玄室床面上層	埴	口径(8.2)/器高(4.9)/胎土:密/直径0.1mmの金雲母を多く、長石を少量含む/焼成:良好/色調(外面)明赤褐(内面)橙(断面)橙/残存率:体部50%	底部は体部にかけてやや強く立ち上がり、体部最大径を中央やや上に作り、緩やかに屈曲し肩を成形。頸部は強く屈曲し、口縁部は外反する。口縁部・頸部内外面には横ナデ調整、体部内外面には横方向の板ナデ調整、底部内外面には不定方向の板ナデ調整。		31・36・572・621・3000・3077・3090

器高12.5~14.2cm(平均13.0cm)を測る。(8)・(13)・(14)は玄室床面直上、(9)~(12)は玄室床面上層で出土している。坏底部に面を有し、坏部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。(8)・(9)は口縁端部に内傾する面がみられる。脚柱部は直線的で短く、脚裾部はやや反るもの(8)、直線的なもの(9)・(10)・(14)、小さな段を有するもの(11)・(12)・(13)に細分できる。脚端部はいずれも丸く収める。B類はいずれも脚部は内面の絞りが強く、脚端部から脚裾部までが高いものが7点中5点を占める。(13)はこの中では坏部の開き方が大きく、高さが低い。脚部内面には強い絞りの痕跡とともに脚柱部と裾部の間に小さな隙間がみられる。

接合検討を重ねたにも関わらず、坏部の形態が確認できない高坏が複数個体あり、このうち(15)~(18)の4点を図化した。この4点は磨滅・剥離のため、調整が不明な部分が多い。(16)は

玄室床面直上の中央付近で出土し、原位置を保っていた可能性がある。(15)・(17)・(18)は玄室床面上層で出土している。(16)～(18)は坏底部から脚端部まで残存し、(17)は坏部と脚柱部まで残存する。(15)・(17)は坏部が中位まで残存し、坏部は急な角度で立ち上がる。脚柱部は直線的で浅い段を設け、直線的な(16)とやや外反する(17)・(18)に細分できる。(15)・(16)は坏部と脚部の接合の調整痕がみられる。脚部は全て中実であり、脚部内面にみられる絞りの痕跡に強弱があるが、その違いは坏部の形態との対応がみられない。(13)の内面のわずかな隙間がみられる点や(16)の脚基部に一部板ナデの痕、(4)でみられるような外面の指オサエの痕跡などから、脚部は脚柱部と脚裾部を別作りで接合し、調整した可能性がある。

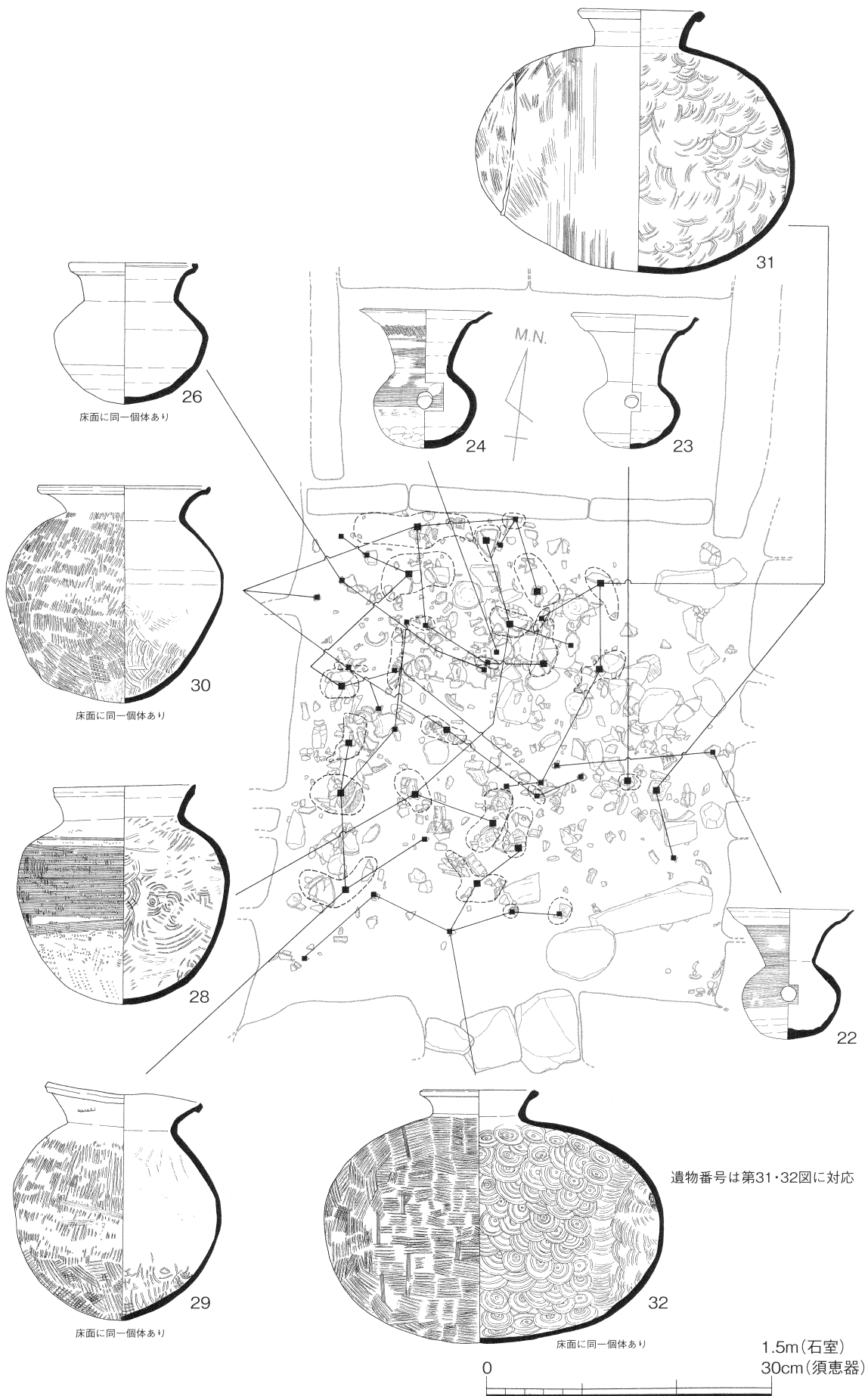
【コップ形土製品】 床面上層から1点(19)出土している(第28図)。一見するとコップ形のイダコ壺のように見えるが、イダコ壺に特徴的な紐孔がみられないことからイダコ壺ではないと判断した。内面と口縁部の一部には朱の付着が認められ、祭祀用土器の可能性が想定できる。外面調整は指オサエ、内面調整は指ナデであるが口縁部には指オサエ痕が残る。外面には縦長の黒斑がみられる。器壁は底部が厚く体部はやや薄くなるものの、口縁部に近づくと再び厚くなり、口縁端部はやや薄くなる。そのため口縁部内面は開き気味になる。口縁端部は平坦で底部の形態は丸みを帯びる。

【埴】 玄室内より2点(20)・(21)出土している(第28図)。ともに床面上層から出土している。底部は体部にかけて緩やかに立ち上がり、体部中ほどよりやや上で屈曲し肩を成形したあと、やや内傾しながら立ち上がり、口縁部を成形している。体部は(19)よりも扁平な形を呈す。頸・口縁部外面には横方向のナデ、体部には板ナデ状の調整を施す。内面体・底部はナデ調整である。内部からは計35点の土製丸玉が出土した。副葬品として納入されていたと考える。(21)の底部から体部にかけてやや強く立ち上がり、体部最大径を中央やや上に作り、緩やかに屈曲し肩を成形する。頸部は強く屈曲し、口縁部は外反する。口縁部・頸部内外面には横方向のナデ、体部内外面には横方向の板ナデ、底部内外面には不定方向の板ナデがそれぞれ施されている。

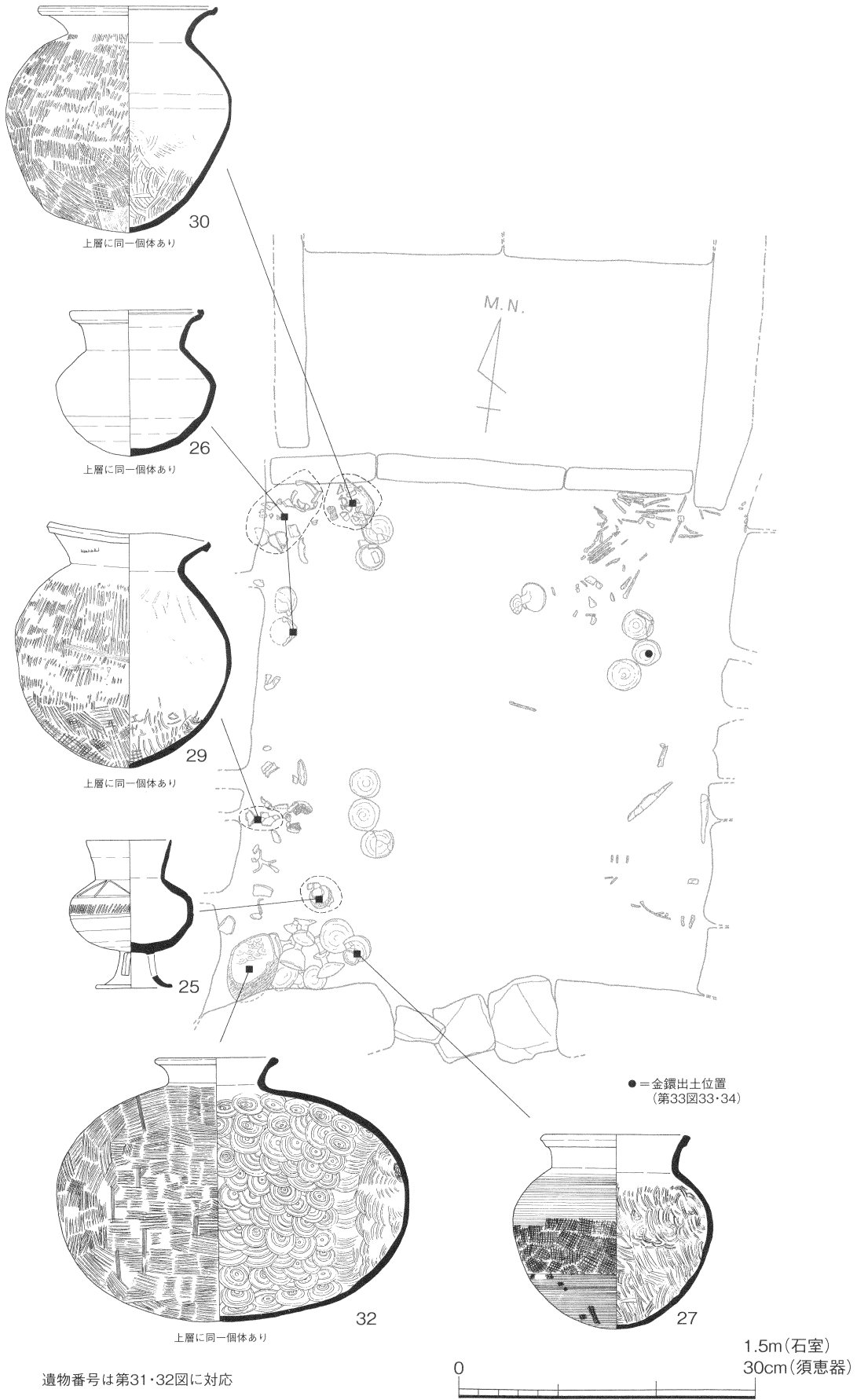
第2節 須恵器

須恵器は玄室床面上層では大半が破片で出土し、床面直上では完形に近い坏身・坏蓋、右袖付近と石屋形付近で壺や横瓶の破片が出土している(第29・30図)。なお、須恵器の内、坏身・坏蓋、高坏については、平成14年度報告書にて掲載しているのでご参照願いたい。

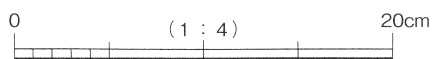
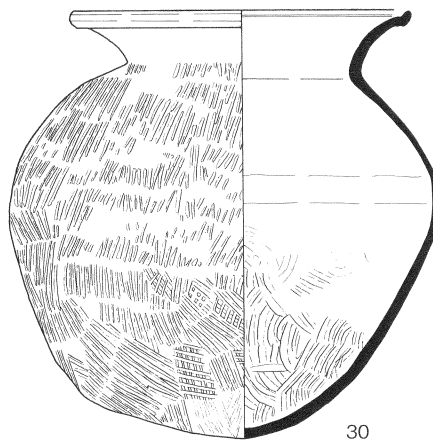
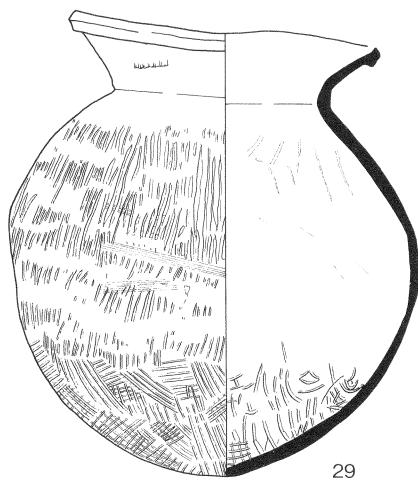
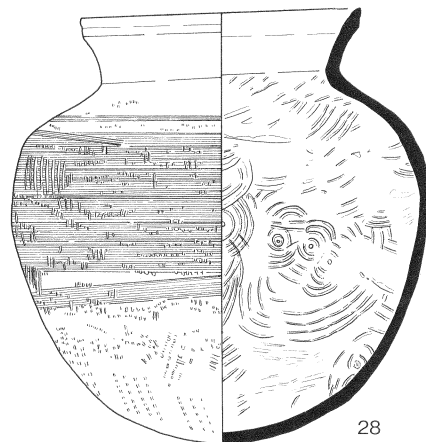
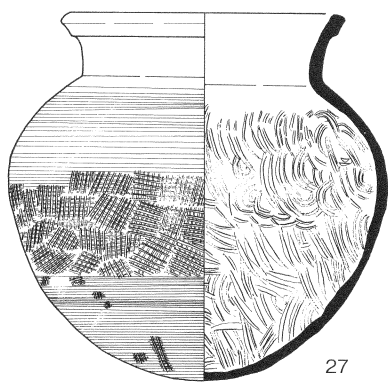
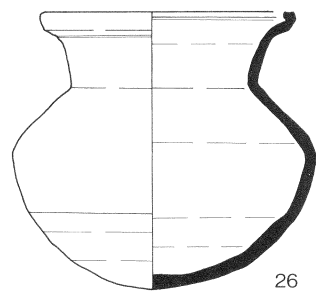
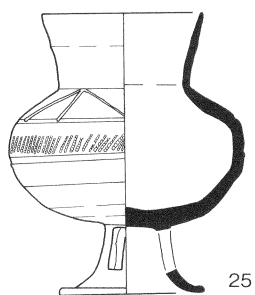
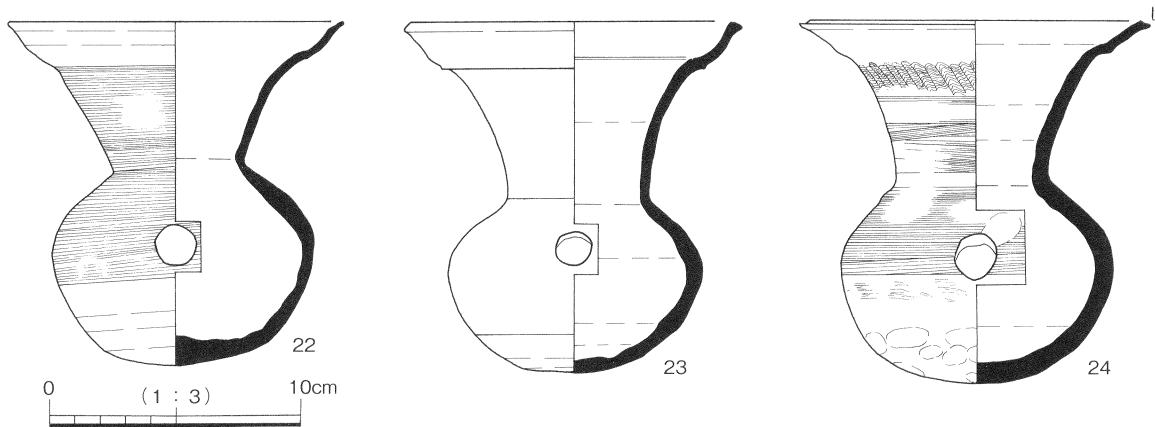
【甗】 甗は接合により3点(22)～(24)確認でき、全て床面上層から破片で出土している。残存率の低い(22)は体部円孔を確認できなかったが、出土した2点と口縁部・頸部・体部の一部の破片から甗と判断した。器形は頸部がラッパ状に外反し、口径が体部直径を上回る。(22)・(23)の口縁部は内側にやや屈曲するが、(24)は口縁部が外傾する。3点とも口縁端部をつまみ出して成形している。頸部上位では(23)・(24)は外面に鋭い稜を有し、(22)は鈍い稜が1条みられる。(23)のみ内面に1条の浅い沈線が巡る。3点とも肩部の張りは弱く、体部は球形を成す。調整は口縁部から体部は回転ナデ調整、底部は回転ヘラケズリを行い、(22)と(24)の底部は回転ヘラケズリ後、ナデ消しを行い、底部に丸みを帯びる。底部および体部の円孔付近に指オサエの痕跡が残存する。頸部・体部の内面は回転ナデで調整し、(22)・(24)は調整が粗雑なためか頸部および底部内面には、粘土紐の巻き上げ痕が残る。(22)は頸部から体部にかけて1cmあたり8～11本のカキ



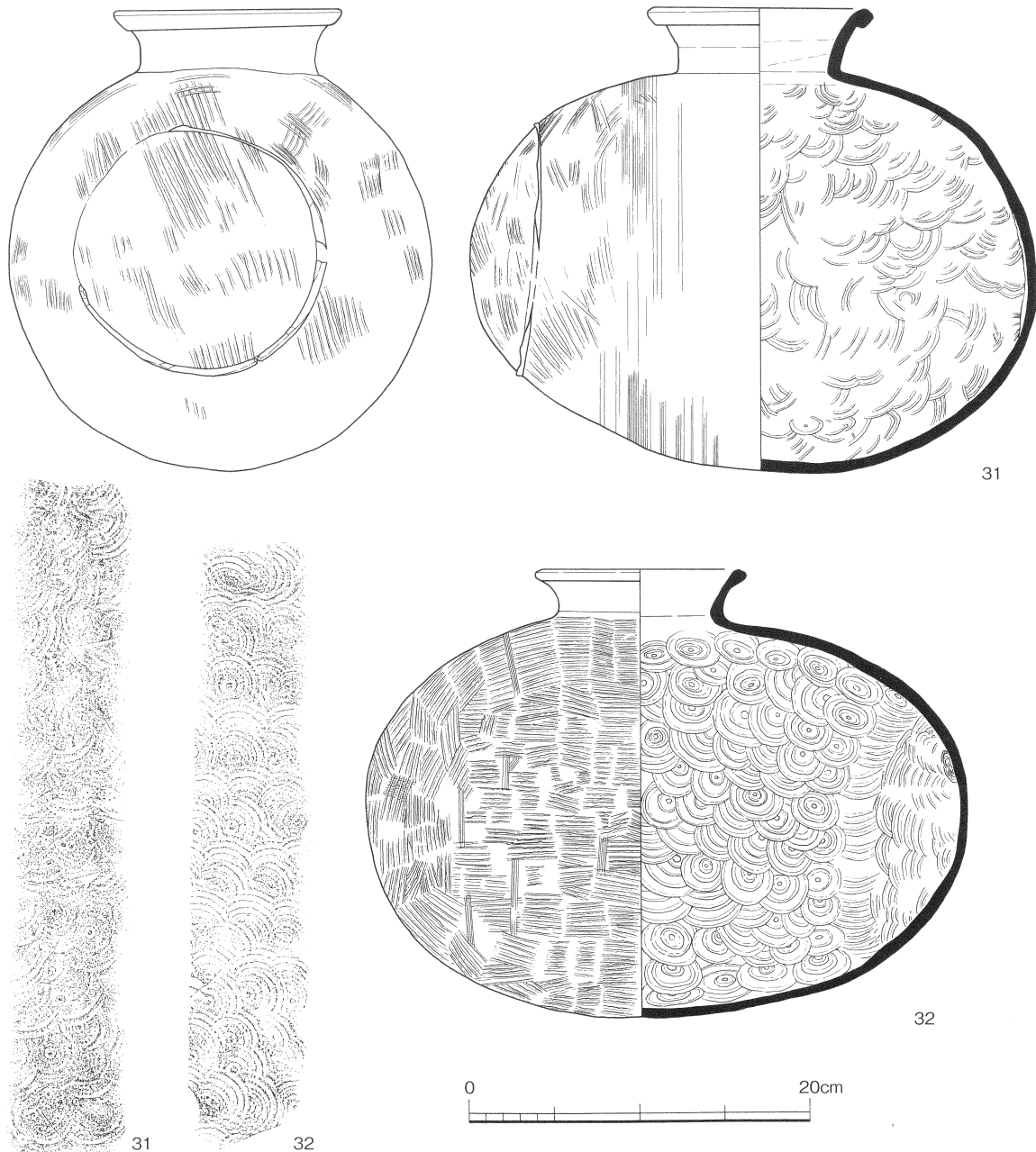
第29図 主体部須恵器出土状況図①(床面上層)



第30図 主体部須恵器出土状況図②(床面直上)



第31図 主体部出土須恵器実測図①(甗 1 : 3、壺・甕 1 : 4)



第32図 主体部出土須恵器実測図②(1 : 4)

メを施し、(24)は頸部上位に櫛描波状文が巡り、頸部から体部にかけて1cmあたり8~10本のカキメを施す。また、(24)は頸基部付近に接合痕がみられる。

頸部の形態、調整、また体部に文様が施されず頸部上位に波状文の文様帯のみが巡る特徴などを踏まえると、田辺編年のTK10型式併行期に該当する。その中でも頸部の長頸化がみられず、体部に文様が確認できないことから、口縁部の形態と器形の特徴から類似する(22)・(24)はTK10型式併行期の中でも型式的に新段階の様相を呈する。

【壺】 壺は台付壺が1点(25)出土した。(25)は、玄室床面直上の右袖付近からほぼ完形の状態で出土した。体部中央付近には2本の凹線が巡り、その間に櫛描列点文を施す。口縁部から体部中位にかけて回転ナデ、底部は回転ヘラケズリで調整される。肩部から体部上位にかけて鳥の足先のように3方向に3本の線からなるヘラ記号がみられる。脚部は安定性を欠き、方形の透かしが

第3表 出土須臾器観察表

()内の数値は復元・残存の法量

挿入番号	出土層位	器種	法量(cm)・胎土・焼成・色調・ロクロ回転・残存率	特徴	備考	取り上げ番号
22	玄室床面上層	甕	口径(13.1)/器高(13.7)/頸基部径(5.3)/胎土:密/直径3~5mmの白色粒を少量含む/焼成:良好/色調:(外面)青灰(内面)青灰(断面)青灰/ロクロ回転方向:右/残存率:口縁20%・頸部60%・体部30%	頸部はラッパ状に外反し、口縁部はやや内に傾き、端部をつまみ出す。外面の頸部上位に1条の鈍い稜が巡る。肩部の張りは弱く、体部は丸みを帯びる。円孔は確認できず。外面は頸部から体部に回転ナデ調整をし、底部は回転ヘラケズリでナデ消し。底部は指オサエ。内面は全体に回転ナデ調整、底部には粘土紐巻上げ痕が残存。粘土の盛り上がりを中心にみられる。	円孔と頸基部径は推定。	4・65
23	玄室床面上層	甕	口径12.5/器高13.9/頸基部径5.7/胎土:密/直径1~3mmの白色粒を少量含む、石英を若干含む/焼成:良好/色調:(外面)青灰(内面)青灰(断面)赤褐/ロクロ回転方向:右/残存率:口縁95%・頸部100%・体部95%	頸部はラッパ状に外反し、口縁部はやや内側に傾き、端部をつまみ出す。外面の頸部上位に1条の稜が巡り、内面に沈線を有する。肩部の張りは弱く、体部は丸みを帯びる。体部上位に直径1.4cmの円孔を穿つ。外面は頸部から体部に回転ナデ調整、底部は回転ヘラケズリ。底部と円孔付近は指オサエ。内面は全体に回転ナデ調整、底部は粘土紐巻上げ痕が残存。	体部外面の上位が赤く焼成。	57
24	玄室床面上層	甕	口径13.2/器高14.1/頸基部径6.5/胎土:密/直径0.5mmの白色粒と石英を含み、直径2~3mmの白色粒を少量含む/焼成:良好/色調:(外面)灰白(内面)灰白(断面)灰白/ロクロ回転方向:右/残存率:口縁95%・頸部100%・体部100%	頸部はラッパ状に外反し、口縁端部をつまみ出す。頸部上位に1条の稜が巡り、1~1.5cmの幅に櫛波状文が巡る。肩部の張りは弱く、体部は丸みを帯びる。体部上位に直径1.5cmの円孔を穿つ。外面は口縁部から体部に回転ナデ、底部は回転ヘラケズリのちナデ消し。体部の円孔の下、数ヶ所に8~10本/cmのカキメ。底部と円孔付近に指オサエ。内面は全体に回転ナデ調整、弱い粘土紐巻上げ痕が頸部と底部に残存。	暗緑色の自然釉が内外面全体の55%かかる。	160
25	玄室床面上直上	白付壺	口径8.4/頸基部径7.0/脚基部径3.5/脚端部径7.5/器高15.0/胎土:密/直径1mm前後の白色粒を少量含む/焼成:良好/色調:(外面)青灰(内面)青灰(断面)青灰/残存率:口縁部90%・体部95%	口縁部は外傾し、端部は丸く収める。頸部は口縁部付近でさらにすばまる。体部中央付近には2本の凹線が巡り、その間に櫛波列点文を施す。脚端部はわずかに上方に丸く収める。調整は口縁部から体部にかけて回転ナデ、底部は回転ヘラケズリが施される。肩部から体部上位にかけて3方向に3本の線からなるヘラ記号が見られる(一定の間隔であるわけではなく偏る)。脚部に3方向透かし。	肩部から体部にかけて上面から灰がかかっている。	736
26	玄室床面上層直上	甕	口径13.4/頸基部径10.1/体部最大径16.2/器高14.5/胎土:やや粗/直径1~3mmの白色粒を少量含む/焼成:やや不良/色調:(外面)浅黒灰(内面)灰白(断面)浅赤褐/残存率:口縁部25%・体部55%	口縁端面に弱い凹線を巡らし、端部直下には2条の沈線を有する。内面には沈線が1条巡る。頸部はやや外反。体部最大径は中位に位置する。調整は口縁から体部中位にかけて回転ナデ調整、中位はさらに回転ヘラケズリ。体部下位から底部にかけては回転ヘラケズリ、体部内面全体にナデ調整。		185・275・281・445・665・739・740・742・817・3048
27	玄室床面上直上	甕	口径14.1/頸基部径12.8/体部最大径20.1/器高19.5/胎土:密/直径1mm前後の白色粒・雲母を少量含む/焼成:良好/色調:(外面)灰白(内面)灰白(断面)灰白/残存率:口縁部95%・体部95%	口縁部は外側に肥厚し、面を有す。端面はハケメが1周巡るが不明瞭。内面は半周ほど凹線が巡る。頸部は直線的に立ち上がり、体部最大径の位置は中位となる。内面全体に同心円当具痕が見られるが不明瞭、体部上位から中位にかけて当具痕をナデ消し。外面は上位において4~6本/cmのカキメ、中位は格子タタキで整形。下位から底部は格子タタキ後、7~9本/cmのカキメ。底部の一部にタタキ。	外面は約30%は明灰色、約15%は明青色。	756
28	玄室床面上層	甕	口径14.8/頸基部径12.6/体部最大径22.3/器高22.9/胎土:密/直径1mm前後の白色粒を含む/焼成:良好/色調:(外面)青灰(内面)青灰(断面)青灰/残存率:口縁部30%・体部85%	口縁部は外側に肥厚し、外面に沈線が1条巡る。頸部は直線的で口縁端部は丸く収める。体部は肩が強く張り、最大径は体部上位となる。体部全体に平行タタキ、上位・中位ではタタキの上から8~10本/cmのカキメ。カキメは全体的には口縁部とほぼ平行に巡るが、一部異なり、肩部付近では左上方から右下方へ、体部中位は左下方から右上方へ巡る。体部下位から底部はタタキ後ナデ消し。	体部中位のカキメ上に複数の指紋が残存。	30・86・102・107・109・147・156・190・242・358・502
29	玄室床面上層直上	甕	口径16.1/頸基部径11.5/体部最大径22.0/器高23.7/胎土:密/直径1mm以下の白色粒を含む/焼成:良好/色調:(外面)暗赤灰(内面)青灰(断面)灰赤/残存率:口縁部90%・体部90%	口縁部は歪み、外側に肥厚し面を有す。外面は稜が1周し、内面にユビナデが1条巡る。端部直下に弱い凹線。頸部は強く外反し、体部から口縁部はカキメ。内面に1条のユビナデ。体部最大径は中位に位置し、外面中位に9~11本/cmのカキメ。その上から体部全体に平行タタキ。タタキは左上方から右下方にむけて施され、下位ではタタキが交差。内面全体に同心円当具痕が見られ、上位から頸部にかけてはナデ消し。	外面は体部上位の一部で暗赤色が見られ、頸部から体部上位にかけて灰白色の自然釉がかかる。	83・128・136・192・280・316・383・384・408・423・449・474・479・489・497・747・800・1081
30	玄室床面上層直上	甕	口径17.9/頸基部径12.5/体部最大径22.6/器高22.6/胎土:密/直径1~3mm以下の白色粒を多く含む/焼成:良好/色調:(外面)暗青灰(内面)暗青灰(断面)青灰/残存率:口縁部25%・体部70%	口縁部は弱い沈線が外面に2条、内面では1条巡る。頸部は左右で角度が大きく異なり強く外反。体部最大径は中位に位置し、外面上位から中位には平行タタキ。タタキは不明瞭、空白部分もある。底部付近のみタタキが交差する部分のみ見られ、底部が2ヶ所凹む。底部タタキは部分的にナデ消し。体部内面は頸部から体部上位まで当て具痕をナデ消す。器壁の薄い部分はタタキ整形だけでなく、内面もナデ調整されている可能性あり。体部下位には当具痕が残存するが、複数回当てられているため重複関係の判定は困難。	外面の体部上位には青灰色も見られる。	35・53・92・96・98・115・118・119・122・124・125・144・151・159・182・184・200・273・286・288・292・314・398・467・468・500・581・582・583・585・586・620・634・640・647・733・737・738・935・1029・1033・1037・1057・1059・1061・1091・1093・1141・3008
31	玄室床面上層直上	横瓶	口径12.3/頸基部径9.7/体部最大径33.2/器高27.1/胎土:密/直径1~3mmの白色粒・黄褐色粒を少量含む/焼成:良好/色調:(外面)黄灰(内面)青灰(断面)灰褐/残存率:口縁95%・体部95%	頸部は横長の体部からやや直線的に立ち上がり、口縁部はやや歪む。肥厚する口縁直下には沈線を巡らす。小口外面には焼成時に使用された焼台が融着。小口内面には直径7.4cmの閉塞円盤の接合痕。平行タタキの後に5~8本/cmのカキメ。内面には、同心円当具痕が弱く残存。	口縁部に粘土が融着している。体部外面には、約40%にオリブ色の自然釉がかかる。	9・24・28・45・97・121・127・143・172・196・207・237・249・278・279・291・322・333・399・427・466・470・472・573・577・597・601・607・609・622・632・633・662
32	玄室床面上層直上	横瓶	口径10.5/頸基部径10.6/体部最大径35.5/器高26.4/胎土:密/直径1~2mmの白色粒を含む/焼成:良好/色調:(外面)灰(内面)灰(断面)青灰/残存率:口縁部95%・体部95%	頸部は体部から緩やかに外反し、口縁端部は肥厚し丸く収める。外面は2箇所やや窪む。体部はほぼ全体に平行タタキ、一部ナデ消し。タタキ目の上から体部の30%程度にカキメ。内面全体に同心円当具痕がみられる。		18・76・77・106・153・155・294・373・376・377・404・492・669・698・796・1009・1012

3方向穿たれ、内面の痕跡から外側から内側に穿孔されたことが確認できる。

【甕】 甕(26)～(30)は5点出土した。(27)は玄室床面直上、(28)は玄室床面上層、(29)・(30)は玄室床面上層および直上から4点とも複数の破片で出土した。(26)は玄室床面直上の石屋形付近で出土した。焼成が不良で軟質である。口縁端面に浅い凹線が巡る。口縁部から体部中位にかけて回転ナデにより成形され、中位はさらに回転ヘラケズリにより面を作っている。下位は回転ヘラケズリが行われ、体部内面全体にナデ調整が行われる。甕の口径の平均は15.3cm、頸基部の平均は11.9cm、体部最大径の平均は20.6cmを測り、いずれも精緻な成形、調整である。(27)～(30)は口縁部は主として(27)・(29)が外側に肥厚し面を有し、(28)・(30)は丸く収める。頸部は直線的な(27)・(28)と外反する(29)・(30)がみられる。体部最大径は主に中位に位置し、(28)のみ肩が張り上位になり、底部は全ての個体で丸みを帯びる。4点ともタタキにより整形され、(27)は格子タタキ、他3点は平行タタキで整形されている。(28)・(30)は底部のタタキの痕跡が一部ナデ消されている。タタキ原体の形状は全体的に方形であるが、(28)はナデ消されているため正方形に近い形がよくみられる。(27)～(29)はタタキの後にカキメを施し、(29)が不定方向、他2点は口縁部とほぼ平行にカキメが巡る。当具の形状は主に同心円状であり、(27)～(30)4点とも複数回当てられているため重複関係を判断することは難しい。また(29)・(30)の内面の当具痕は、上位から中位にかけてナデ消される。(28)の体部中位にはカキメの上に壺を持ち上げる際に付いたと思われる指紋が複数みられる。(29)は頸部の一部で工具の痕跡がみられ、カキメを施す際に付いたものと考えられる。色調が異なるものの形態や調整技法から(29)・(30)は同時期のものと考えられる。

【横瓶】 横瓶は2点(31)・(32)出土している。2点とも体部は長円球の倒卵形を呈し、器高27cm前後・体部最大径35cm前後と大きさがほぼ類似する。外面には平行タタキで整形後にカキメを施し、内面には同心円当具痕が残る。2点とも玄室床面上層・直上で破片の状態出土し、(31)は玄室床面上層で出土し、(32)は体部の大半が玄室床面直上の右袖付近で出土している。(31)は口縁部が肥厚して端部は丸く収める。外面には焼台が融着しており、内面には閉塞円盤の痕が残る。外面は平行タタキの痕跡がみられないことから、ナデ消したと想定する。内面には閉塞円盤がみられ、同心円当具痕はその部分にはみられない。また、頸部付近にオリーブ灰色の自然釉が付着している。(32)の口縁部は丸く収め、端部に面を有する。体部全体に平行タタキが施されているが、一部ナデ消された痕跡や小口付近で格子状タタキがみられる。内面全体に明瞭に同心円当具痕が確認できるが、一部凹んでいる箇所があり、閉塞した部分が確認できる。体部のカキメが施されている部分は、外面に接合した調整が確認できることから別作りと考えられる。

第3節 耳 環

石室内から8点の耳環(金環6点・銀環2点)が出土している(第34図-33～40)。材質・形状および出土状況から4対になると思われる。

【金環】 石室内より計6点出土した。(33)・(34)、(35)・(36)、(37)・(38)が対になると思われる。

(33)・(34)は、玄室内より出土した。この内、(33)は玄室内4B区床面直上にある須恵器坏内より出土した。また(34)はこの須恵器の直下から出土しており、出土位置および直径や形状から対になるのは明白である(第30図●部分の坏内部および直下より出土)。いずれも原位置を保って

いると考える。(33)は銅芯金張りで縦径18.60mm、横径19.05mmと僅かに楕円形である。断面はやや歪な円形で、開き部付近では多角形状を呈する。端面(接面)の中央部がやや凹み、円板をはめ込み折り返して成形した可能性が高い。一部金箔が裂けている。素材の厚みは欠損部で計測すると0.2mmである。(34)は銅芯金張りで縦径18.35mm、横径19.25mmと僅かに楕円形である。断面は歪な円形で、開き部付近では隅丸方形を呈する。端面(接面)の中央部がやや凹み、円板をはめ込み折り返して成形した可能性が高い。一部金箔が裂けている。素材の厚みは欠損部で計測すると0.15mmである。(33)・(34)はともに、直径が太いこと、内面に縦方向の皺が観察できることなどから、金箔を貼り付けた後、曲げて成形していると推測する。

(35)・(36)は、ともに石屋形内東側の2d区砂利層内より出土した。いずれも原位置を保っていないと考える。出土位置および形状から対になると考える。(35)は銀芯金張りで縦径16.80mm、横径17.95mmと僅かに楕円形である。断面はほぼ円形で、開き部付近では隅丸方形を呈する。完形であるため肉眼観察では不明であるが、X線観察および(36)の断面観察により中実であることが確認できる。また端面(接面)は中央部がやや凹むが、金箔を張り合わせた痕跡や円板をはめ込みの痕跡などは観察できない。(36)は銀芯金張りで縦径15.25mmを測る。全体の約40%が欠損している。断面はほぼ円形で、開き部付近では歪な円形を呈する。断面観察により中実であることが分かる。(35)・(36)は、ともにアマルガム法を用いたと推測する。

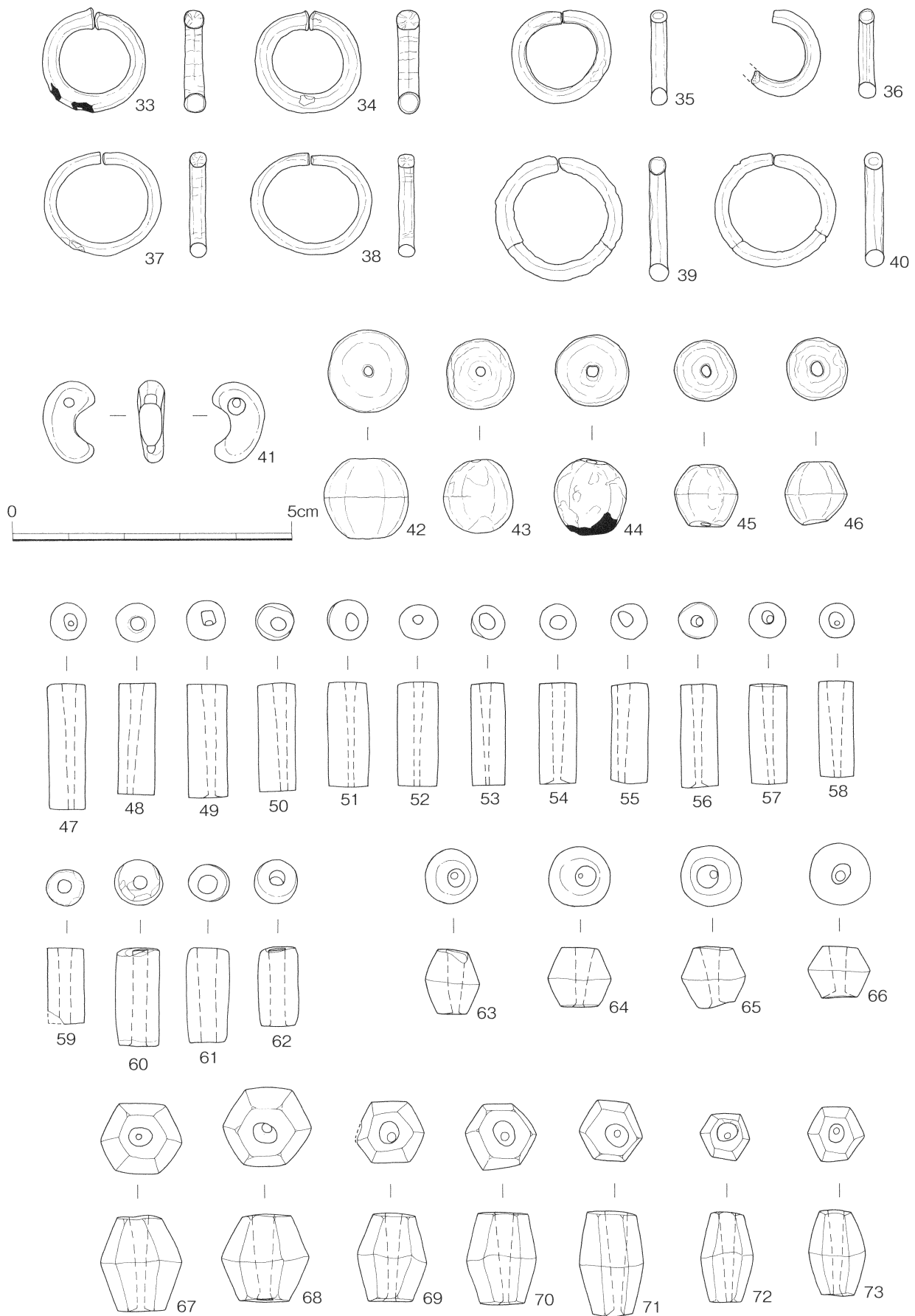
(37)は石屋形内東側2区砂利層直上から、(38)も石屋形内東側2a・2d層砂利層内より出土した。いずれも原位置を保っていたとは考えにくい、ほぼ接近した位置関係にあること、直径や形状から対になると考える。(37)は銅芯金張りで縦径19.15mm、横径21.20mmと僅かに楕円形である。断面は歪な円形で、開き部付近では隅丸方形を呈する。また端面(接面)の中央部がやや凹み、円板をはめ込み折り返して成形した可能性が高い。(38)は銅芯金張りで縦径19.15mm、横径21.20mmと、僅かに楕円形である。断面は歪な円形で、開き部付近では隅丸方形を呈する。端面(接面)の中央部がやや凹み、(37)と同様、円板をはめ込み折り返して成形した可能性が高い。(37)・(38)は、ともにアマルガム技法を用いたと推測する。

【銀鑲】 計2点出土した。(39)は石屋形内東側2d区砂利層内、(40)は石屋形東側2e区砂利層内より出土した。いずれも原位置を保っていないと考える。出土位置や形状より対になると考える。(39)は銀製で、縦径22.35mm、横径22.40mmと、ほぼ正円である。鍍金が著しく、全体が鍍で覆われている。このため、断面形態および開き部の形状は不明瞭である。(40)は銀製で、縦径20.20mm、横径21.35mmと、僅かに楕円形である。(39)と同様、鍍金が著しく、全体が鍍で覆われていたため、断面形態および開き部の形状は不明瞭である。いずれも鍍金が著しいことから銀以外の鉱物が比較的多く含まれていると推測できる。

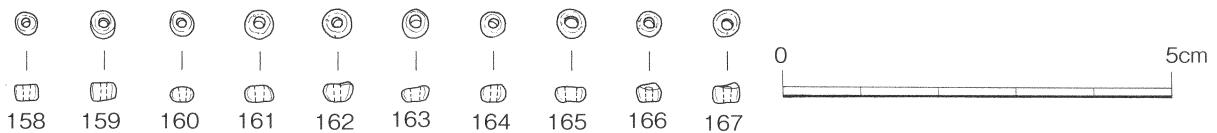
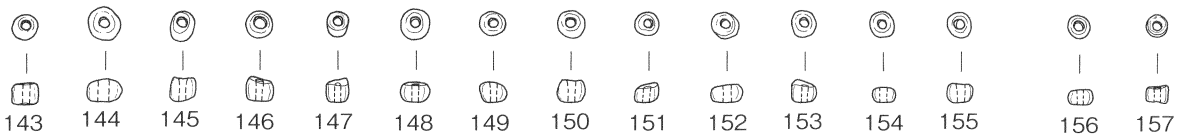
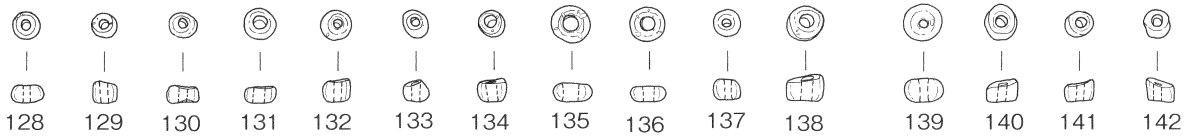
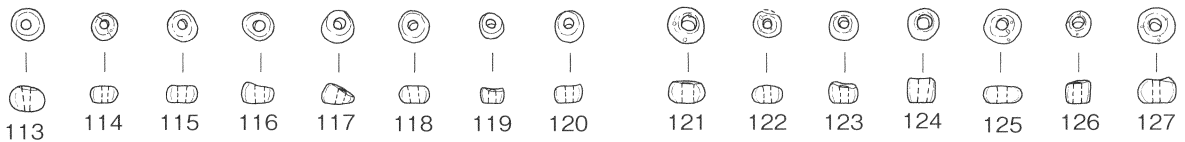
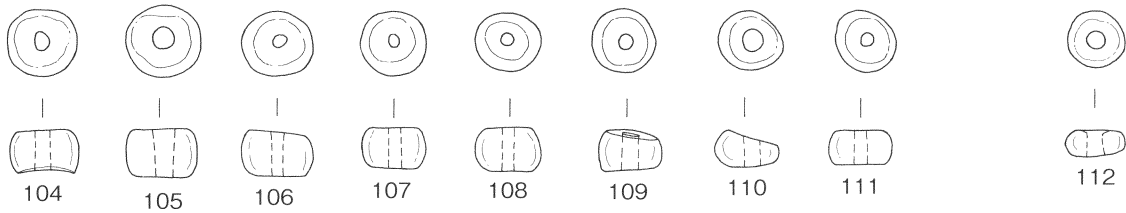
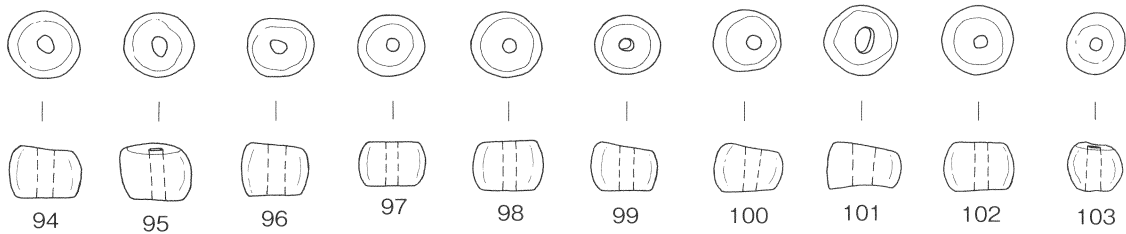
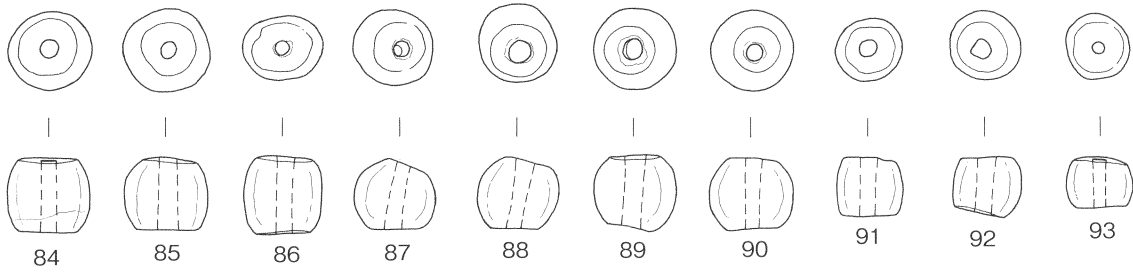
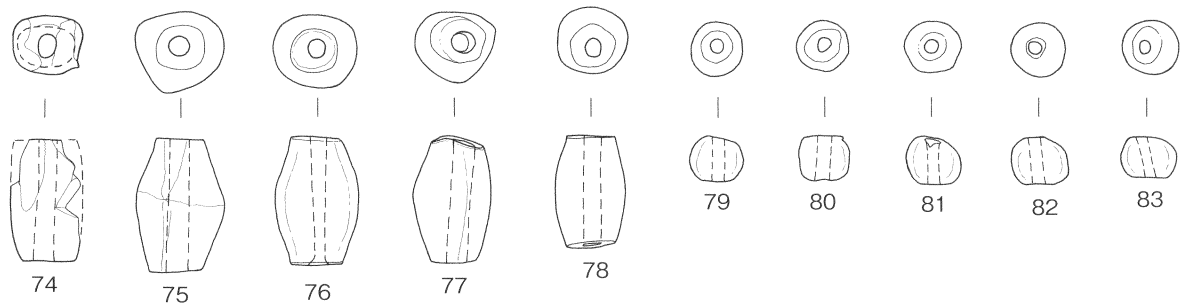
いずれの耳鑲も現時点での肉眼観察の結果に基づいている。詳細な製作技法、材質などの考察は、今後の科学的分析の結果を待って再度行いたい。

第4節 玉 類

玉類は玄室内および石屋形内より多数出土した。種別としては勾玉・空玉・管玉・算盤玉・切子玉・棗玉・丸玉・白玉・ビーズ玉がある。整理作業が完了していないため正確な点数は確定していないが、総数は600点以上になると思われる。このうち整理作業が終了したものについて報告する。



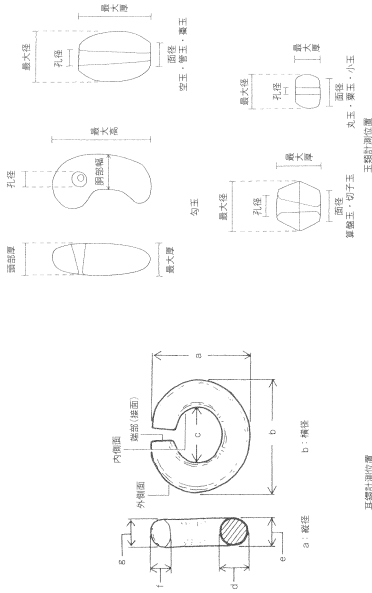
第33图 主体部出土装身具实测图①(1:1)



第34图 主体部出土装身具实测图②(1:1)

第4表 出土装身具観察表①

凡例
 ・材質は肉眼観察によるものであり、今後の分析により変更する可能性がある。
 ・色調のうち英語表記および色調番号は、城一夫編 1986 『カラーアトラス 5510』 color chart book 光村推古書院を使用した。ただし日本語表記は直訳せず筆者がより適切と思われる表現に改変しているものもある。客観的な色調は色調番号を優先していただきたい。
 ・数値中の〔 〕内の数値は残存部の数値である。
 ・取り上げ番号で重複する番号の遺物については、大きさなど特徴を記入している。



(松本編1999を元に作成)

挿図番号	種別	材質・形状	重量 (g)	色調	a (mm)	b (mm)	c (mm)	d (mm)	e (mm)	f (mm)	g (mm)	出土位置	出土層位	備考	取り上げ番号
33	金環	金・中空	2.66	18.60	19.05	12.30	3.20	3.70	3.30	3.60	4 B	床面直上	須惠器杯内部より出土・34と対	663	
34	金環	金・中空	3.15	18.35	19.25	12.25	3.55	3.20	3.15	3.50	4 B	床面直上	須惠器杯下部より出土・33と対	703	
35	金環	金・中実	2.42	16.80	17.95	12.35	2.50	2.75	2.20	2.55	2 d	砂利層内	36と対	2120	
36	金環	金・中実	[1.31]	15.25	-	-	2.55	2.55	2.20	2.30	2 d	砂利層内	35と対	2019	
37	金環	金・中実	6.27	19.15	21.20	15.50	2.65	2.90	2.85	3.00	2区	砂利直上	40と対	2119	
38	金環	金・中実	6.52	19.20	21.80	15.75	2.85	2.90	2.85	2.95	2 a・2 d	砂利層内	39と対	2121	
39	銀環	銀・中実	2.37	22.35	22.40	16.55	2.95	2.75	2.60	2.70	2 d	砂利層内	38と対	2017	
40	銀環	銀・中実	2.33	20.20	21.35	16.25	2.55	2.55	2.10	2.40	2 e	砂利層内	37と対	2122	

勾玉

挿図番号	材質	色調	重量 (g)	最大径 (mm)	最大高 (mm)	最大厚 (mm)	孔径 (mm)		胴部幅 (mm)	頭部厚 (mm)	出土位置	出土層位	取り上げ番号
							最大	最小					
41	瑪瑙	暗緑色 (Dark Green・Forest Green)	0.96	14.70	14.70	4.70	2.75	1.50	5.40	4.70	2 A	砂利層内	2011

空玉

挿図番号	材質	色調	重量 (g)	最大径 (mm)	最大厚 (mm)	孔径 (mm)		出土位置	出土層位	取り上げ番号
						最大	最小			
42	銀	黒青色 (Brackish Blue)	1.51	14.65	14.35	1.60	1.20	2 D	砂利層内	2023
43	銀	灰黒色 (Kurosubami)	1.71	13.00	13.55	1.50	1.10	2 A ~ C・ 2 b・4 A・ B	床面上層	2069
44	銀	灰黒色 (Kurosubami)	[1.18]	13.10	9.50	2.15	1.35	4 B	床面直上	702
45	銀	灰黒色 (Kurosubami)	0.84	10.85	11.35	2.30	1.35	3 E	床面上層	2039
46	銀	暗茶褐色 (Dark Grayish Reddish Brown)	1.04	11.40	11.35	2.30	2.15	3 C	床面上層	2033

第5表 出土装身具観察表②

管玉

挿図番号	材質	色	調	重量 (g)	最大径 (mm)	最大厚 (mm)	孔径 (mm)		出土位置	出土層位	取り上げ番号
							最大	最小			
47	碧玉	深緑色 (Dark Green)		1.78	6.60	22.70	2.40	0.45	4区	床面上層	2056長
48	碧玉	深緑色 (Dark Green)		1.69	6.80	20.05	2.05	1.10	2f	砂利層内	2001長
49	碧玉	深緑色 (Dark Green)		1.99	7.20	20.60	2.35	0.95	4区	床面上層	2056短
50	碧玉	深緑色 (Dark Green)		1.54	6.55	19.30	2.45	0.30	2a	砂利層内	2005
51	碧玉	深緑色 (Dark Green)		1.88	7.25	18.75	2.70	0.90	2G	砂利層内	2025
52	碧玉	深緑色 (Dark Green)		1.68	6.90	18.45	1.80	0.30	2f	砂利層内	2001短
53	碧玉	深緑色 (Dark Green)		1.29	6.15	18.55	2.70	1.10	2D	砂利層内	2022長
54	碧玉	深緑色 (Dark Green)		1.49	6.75	18.25	2.50	0.95	2C	砂利層内	2007
55	碧玉	深緑色 (Dark Green)		1.31	6.35	17.65	2.45	1.65	2D	砂利層内	2022短
56	碧玉	深緑色 (Dark Green)		1.57	6.80	18.35	1.85	0.45	2b	砂利層内	2014
57	碧玉	深緑色 (Dark Green)		1.41	6.65	17.70	1.95	1.25	2E	砂利層内	2009
58	碧玉	深緑色 (Dark Green)		1.25	6.25	17.10	2.30	1.10	2f	砂利層内	2024
59	琥珀	赤銅色 (Deep Reddish Brown)		[1.02]	6.50	[14.00]		2.20	2f	砂利層内	2024
60	琥珀	赤銅色 (Deep Reddish Brown)		1.52	7.40	17.35	3.15	2.10	2e	砂利層内	2028
61	ガラス	サックスブルー (Moderate Greenish Blue)		1.18	7.35	16.55	3.45	3.05	2f	砂利層内	2001
62	ガラス	サックスブルー (Moderate Greenish Blue)		0.90	6.85	13.70	2.85	2.60	2e	砂利層内	2028

算盤玉

挿図番号	材質	色	調	重量 (g)	最大径 (mm)	最大厚 (mm)	孔径 (mm)		面径 (mm)	出土位置	出土層位	取り上げ番号	
							最大	最小					
63	水晶	透明		1.32	9.40	11.60	2.65	0.80	6.30	5.40	2b	砂利層内	2014細長
64	水晶	透明		1.75	11.00	10.65	2.95	0.90	6.45	6.05	2G	砂利層内	2025
65	水晶	透明		1.61	11.15	10.45	3.45	1.00	7.20	6.15	2d	砂利層内	2018
66	水晶	透明		1.42	10.90	9.45	3.30	1.40	6.95	6.50	2b	砂利層内	2014普通

切子玉

挿図番号	材質	色	調	重量 (g)	最大径 (mm)	最大厚 (mm)	孔径 (mm)		面径 (mm)	出土位置	出土層位	取り上げ番号	
							最大	最小					
67	水晶	透明		4.09	14.40	17.15	3.35	1.25	8.55	7.60	1C	床面直上	453
68	水晶	透明		4.51	15.55	15.90	3.90	1.30	9.80	8.05	1A	床面直上	464
69	水晶	透明		2.87	12.20	15.55	2.95	1.25	8.00	7.55	1C	床面直上	454
70	水晶	透明		3.24	12.10	16.70	3.70	0.90	8.90	7.45	1D	床面直上	455
71	水晶	透明		3.12	11.45	18.65	3.90	0.75	8.95	6.80	1D	床面直上	456
72	水晶	透明		1.61	9.40	16.30	3.45	0.90	6.60	5.15	1A	床面直上	999
73	水晶	透明		1.93	10.50	15.30	2.85	1.30	6.75	6.30	1C	床面直上	452

棗玉

挿図番号	材質	色	調	重量 (g)	最大径 (mm)	最大厚 (mm)	孔径 (mm)		面径 (mm)	出土位置	出土層位	取り上げ番号	
							最大	最小					
74	琥珀	暗こげ茶色 (Dark Reddish Brown)		0.66	[8.90]	15.80	2.70	2.30	6.35	6.35	3D	床面直上	565 - 2129
75	埋木	茶黒色 (Brownish Black)		1.14	11.00	17.55	3.05	2.55	7.00	6.25	3C	床面上層	67
76	埋木	茶黒色 (Brownish Black)		1.03	10.90	16.55	2.00	1.95	6.95	5.85	3D	床面直上	564
77	埋木	茶黒色 (Brownish Black)		0.86	9.85	15.80	2.65	2.15	6.90	6.60	3D	床面直上	566
78	埋木	茶黒色 (Brownish Black)		0.77	8.95	14.15	2.15	1.90	6.60	6.60	3C	床面直上	567